生命は唯だ生命自身が自照し實現するのである。猪口も鶏も我も。生命の域に於て他の日露無數の民衆に宿る所の靈魂と圓融して同物である。かるが故に。露帝や荒木夫の心身も。我參謀部員や小村の心身も。此に感觸し此に冥聯し。世界全般の氣運も此に集中して。『日露の破裂は最早定まれる』ぞと、手前の事を手前が告げるのである。

凡夫は心に執著して靈魂を信解せず。故に世の中の現象は心有て爲す者と、心の比量分別に歸する者との外に、何も無い者の樣に思ひ做し。從つて猪口や鶏には心無き故に靈魂無しと斷見す。而して特に知らず。實在てふ事は宇宙の萬有に亘りて。實在其ものが生命を現證し。生命てふ者は即靈魂たるが故に。有情非情非非情一切の神物人は悉く全唯一の靈魂たるを。

實に赤鶏の猪口は。其靈魂を以て明々地に物語り。宵鳴の鶏と相應じて。嚴かに予に宣示して左の如く言ふた。

迷ふ勿れ妙法はお互なり。

日露の破裂は『妙法自爾の事』として既に靈界に端を成せり。

天眼。汝は人間てふ果報に依りて。人間の使ふ語葉を能くせり。我等は明白に物言へども。我等の物言ふ語葉が人間のと異なる故。人間等の耳には入り難し。

之を聞いて解する者は。唯汝一人在り。因て汝は宜しく我等妙法と人間との中間に立ちて。通譯の勢を執り。以て人間等に其と信解せしめるがイトたれよと。

是れ予が當時の觀念なりと思ふ勿れ。觀念は事境其者にあらず。右は事境甚れ自體が。天眼の靈魂を自照したる而已。予は直ちに猪口等の生命と與に握手會談しつゝ在りし也。猪口が予たりし也。

爾れは予は。這般の事境を信受して移ちざる所以の修業として。赤鶏の猪口をば請ひ受けて家に歸り。爾後毎日之を使用しつゝ。一杯を口にする毎に。世界の生命を我口に吸ひ込む心持にて。日露をば我と同じく酉の水に醉はしめつゝ。我は妙法の傀儡と爲りつゝ。アナ嬉しや唯我一人が日露なり、世界なり、時なり、宇宙なり、我にして退轉せざる限りは。最早日露戰が起りしも同樣なり……と信解しつゝ。モー其時から日露問題に對する安心立命が『實成の佛』と爲りた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

扨。さかづきが物を言ふてふ此事が予の感應實驗の眼目で。三十六年の初冬に之を獲て後。翌三十七年の二月には。愈々朝鮮仁川の海に戰爭が破裂し。其より旅順閉塞やら總攻擊やら、黃海海戰やら、鴨綠江戰やら、摩天嶺本鶏湖、續いて遼陽の大戰やら。著々と戰運が陸海に進行して。我生命の證人たる赤鶏の猪口は。滿一年間予に追隨して『戰事外交本末談』を予が草しつゝ在りし同年の晩春から初冬迄。予と形影相伴ふた。然るに……然るに……。

予は『對露戰は日本國が生命界に於ける信行なり』と信解する故。戰爭の巧拙やら時の勝運やら

は深く念に留めず。唯だ日本國民が妙法＝即ち全宇宙の靈威＝即ち不盡無量の精力＝に歸依することの深さや否や。誠に其れ國家其れ自體をすらも投げ出して。靈火の中に燒き了りて。而して自國の運命を自照する迄の不惜身命の法華行、に住するや否や。即ち『犧牲を甘んずるは成佛の本因なり』と確信して。勢威以て屈從す可からず。刀刃以て斬截す可からざる日蓮上人龍の口御難の時の如き事境に住し得るや否や……をのみ惟れ慮かり。惟れ憂ひ。惟れ念じた。

實に是は。立正安國の本事が六百年の後に。其まゝ應生したる大國難の時で。鐵砲や兵粮や兵數や、戰略や。凡そ理と勢力と智識とに屬し。人間の比量分別に歸する所の者を、詮議するソレ以上。更に向上し更に圓融し。更に精進して。以て直ちに國家獨存の靈魂＝即ち國家本有の精力＝即ち國家の生命に國家自身が感觸し接到し。竟に其と融一して。國家が妙法自照の事境に達すること此境此時の無上道で有つた。而して予は『這般の國家の事境をば。予一人即五千萬人なり。是れ神物人一切平等の現證なり』と勵み奮ふて。益々行を積んだ。

故に戰時に於て予は常に言へり。

武勳の形チと名とは。如何に赫々たりとも。所は國民的精力の影法師のみ。戰爭は魂魄の勝負なり。戰勝を致したる各將勇士を拜むは誤れり。之を致したる者は神明なり。宇宙の靈威なり。本を思へよ末に走るな。軍人等が自已の力にて勝てりと思惟せば。所は惡魔の情なり。勝ちて後に國は聽て亡ぶ可し。露人を侮る莫れ。露人の精力は未了の處多し。露人が強いから日本人も御蔭で強いのである。自他感應である。強弱は時の相なり。不變帝住の本體に非らず。本體は唯だ魂魄の力なりと。予は常に言へり。

而して予は實に。旅順要塞の兇敵が可惜勇士を啖ふこと惡魔の巨口の如くして。ハテさて人力奈何ともす可からざる歟と。人も憂ひ我も莫れし此歷史上未曾有の惡戰罪鬪に關して。予は全く五千萬人が神明の懷ろに身を投出して如何樣とも捌きを受くる外に途なしと予が心に決定し。旅順戰は力の鬪ひに非らず。靈の戰ひ也と。絶叫せること幾回なるを知らず。攻圍軍の犧牲をば眞に神明の使者なり弓矢八幡の分身なりと信仰して。之に全幅の歸依を献けた。

幸いにして後日旅順が落ちた。

けれども。落ちる乎落ちぬ乎と心配の峠を幾個となく陟りて。モー此上に山はあるまじと思へば。又候險山の現はるゝ。崎嶇たる險山の絶頂に登り詰めたる其時の事である。予は實に怖れ戰きて『我深く日露戰爭をば神明の本意と感じつるが。所は凡夫の了見の過ちにて實は此戰爭は罪惡なりし乎。左も無くば。斯く迄犧牲を要求して尙落著せざるこそ訝かしや』と。反省し。自責して。更に再び神明を祈り。再び宣示を請ふ可く決心するに至りた。

其時の神明は即ち今謂ふ妙法である。

扨其時なり。ドー考へても。如何に憂慮の爲めに反省しても。自己に斷見我見の迹を見出し得ねば。日露戰を妙法の本事なりとせし從來の信念を自ら覆ふこと協はず。去り迚戰爭の行末は三年掛かる乎十年掛かる乎、常闇の國に進む如く日に日に心許なく感せらるゝ、我心身の姿を見れば。終には心を以て靈魂を動かし。物心二境大自在の功德をも何時しか喪ふ如く覺へて。次第々々に國の前途を危ぶむに至る。扨は靈魂に即くつもりでも。我は我心に即きし乎と。再たびも三たびも繰返し〳〵て煩悶し焦心し。殆んど此身は八大地獄の底に落つる乎と自ら怪むに及びた。

その時よ。例の猪口を擧げて。肅乎として默禱すれば。不思議や。予は古希臘の勇士が波斯の大軍に與へたる『イフ』の一語即ち『なにをッ』と云ふ眞氣魄がムラ〳〵と湧き來りたが。シカシ。予は斯かる煩悶と自信との交錯を幾回と知れず實驗したる末。竟に該さかづきを神明の前に擲ちて。微塵に爲れ!! と打碎くに至りた。

此は。予が餘りに戰爭に熱中して。戰爭方面にのみ精力が集中し。却て平和は何時來る耶と云ふ大事に疎隔しはせざる耶と自ら戒めて。修行の活機を新たにせばや。と念ずるの極。執着の絆たり易き此大切の友を天地俱々粉微塵に附し。以て平和克復の生命に接觸せむと試みた次第で。予が。『平和來!!』を豫言するに至りし本因は是に成りた。

予が此さかづきを擲つ時の氣魄も形相も。全く全宇宙と合せて我心身を一槌に破碎する程の畏ろしき權威の示現で有たらう。而して予自身は知らず。全く夢中なり。

* * * * * * * *

靈魂の本然自照の事境は。スペース(空間)を絶對的全唯一ならしめる故。大小、廣狹、深淺、方圓等の差別を絶し。乃ち地球と云ふて宇宙に懸る芥子粒ゝの其又中の小差別たる日本と云ひ露西亞と云ふ者も。敵と稱し味方と云ふ者も。等しく消へて仕舞ふて。『戰爭其れ自體が引括めて我靈魂の顯現』ぞと自照する。のみならず。タイム(時間)も亦絶對的全唯一に歸するが故に。以前は過去と現在と未來とが際限なき一本棒で有た奴が。今や一所に圓く成て。『過去が未來か。現在が過去歟、循環の端無ければ。因果は總て同時なり』と云ふ事を自照する。

宇宙と云ひ法界と云ふも。空間と時間と此二ッが。竪から横に人間の觀念を支配し。其中に於て理や勢力や活動やらが宿り居るソレを指さすに過ぎざるが。今夫れ此横竪の二ッが各々融一して仕舞ふて。寸法に掛らぬ事と成れば。世界に起る事件が一人の心靈に因て照破され得るこそ當然で。毫も幻怪の沙汰に非ず。則ち豫言てふ事は。人間の心身に即いて考ふるからこそ事前に知ると云ふ事がドーやら奇妙に聞ゆれど。靈魂よりすれば、三世が融一する故。實は事前と思ふのが人間の私しである。事前の先見抔と誇る可き理由は無い。即ち。

氷は自ら冷を知らざると同じく。

豫言者は。自ら之を事前と思はず。其處に今發生した事を今見て今語るので有る。

爾して其が世に謂はゆる『天啓』で。天啓の事理、相性は。自己の靈魂を感得したる人若くは感得せむと發願して神物人一切に歸依する滅意妙行有る人＝にして。初めて信解し信受し得るので有る。緣無き衆生度し難しとは。自己の靈魂に自己が接觸する因緣をば。我心から撥無して。信解と信受の機會を捨る者を謂ふので有る。

蓮華は華咲く間に實が結び居る。故に妙法に蓮華の形容辭を添へて。神物人一切を表明したる釋迦牟尼佛の旨たるや深い。妙法だけでは。空間の融一即ち萬有の融一を表する丈の樣に誤認され易く。時間の融一に至りては尙ほ宣示するに足りざるが玆に蓮華を加ふれば。華果同時の事境＝即ち因果同時＝即ち三世融一と云ふ根元的大事實を明白に表明し得る。但し本職の法華僧中、未だ予の如く明白に具體的に『蓮華の二字は時間の絕對的融一を表す』と道破せし者有らじ。彼等は。文句に勿體を附け。法華經に於ける傳說的神秘を以て人心壓伏若しくは誘人の唯一方便と爲し。多く盲從的迷信的耽法華連を製造して。明々白々たる日蓮直傳の魂魄をば彼と同一なる我々人間より疎隔せしめしこと玆に六百年なり。されば。今の僧俗より觀れば。彼等の心に蓄く後光附きの大菩薩や活き佛ならでは。天下國家の大事など豫言を能くする者に非ずと。思惟されること必然で有る。シカシ感應てふ事は何人と雖ども實驗しつゝ在る事で。爾して感應が可能ならば。豫言も亦神秘的の者でない。

無線電信さへも出來た世ぢやに。普通謂ふ所の感應てふ事さへ六カしい者の如く思ふ人こそ。奇妙な人達である。

電氣は金線を傳はりてに非ざれば先方に屆くまじき樣心得し數年前の我身を顧み。今の電氣同志の直接交通を味ひ給へ。『疇昔の思想は誠に物を隔て理に局して居つたもので。今や顯はれし無線電信の事境から見れば。我等はッイ其處に在る者にッザ〳〵被覆を冠せて自ら發見せず好んで面倒に做し居つた次第ぢや』と悟證せずに已まれない。其と同じく靈魂もぢや。

感應が無いのは自から隔てるからである。否。感應は常に在れども。人は自ら心と肉體とを隔て。心身と靈魂とを隔て。我と他人とを隔て。我靈魂を神物人一切から隔つるが爲めに。現在する感應をば自覺せぬので有る。神さまと呼吸が合はぬのである。生命が使ふ無聲の語を解せぬので有る。

一遍づゝ而して一人々々に對して＝人間の言葉や所作を以て直接に耽目を押し。先方が承知しましたと申し。納得したる姿を示したる上ならでは。感應に迄至らぬ者と。自分で斷定し自分で面倒にし。果テは感應の本體を誤認し。靈淨々、活洒々の處を滅茶々々にして仕舞ふ儀で有る。

『此方に在るから先方に映る。先方にあるから此方に映る。』是は心や自體に屬する感應＝即ち靈魂を一個づゝ別に在る者としての話なれど。感應の總說には便なる可し。映る所以の者は同じ物で。實は融

一して居る次第を照破せば。則ち電氣は何處に發作しでも、宇宙間に實在する同一物ぢや。而して同一物たる故に。假令ひ發作の依りて顯現する道具が別別たりとも。發作した時が即ち感じ合ふた時で。感じ合ふた時が其まゝ。本體融一の事境を自成した時では無い乎。

是は固より理上の悟證で。法華行のヂカ行キとは違ふ。シカシ事上の悟證を誘ふには好方便の話であらう。先づ靈魂を電氣と假定して。感應は此方か先歟、先方が先歟。區別し難き所を味ふ。然る後『電氣の本體は。其顯はれざる時と雖も常住する者で。顯はれたは本體の影なり又迹なり』と觀する。然る時。前に本體と見しは實相にあらず。本體は宇宙に遍在する靈威なりと信解する。

非情非非情に迄亘らずに。有情の動物同志だけの感應は。大抵の人が日常に實驗し居る事で。靈魂を獻はず心や肉體やだけで事が相濟む。小供は此方が笑へば其に伴れて笑ふ。泣けば一所に泣く。痛く無いと言へば痛く無く爲る。而して小供がピーと泣けば母親の五臓も爲めに震盪する。小供が利巧ぢやと他人が褒めれば親は相好を崩して悦ぶ。是れ小供と親とが相互に相感應する事相である。支那人が馬を御するに。車輻を呑む程の凹坎をば。唯だ『アタ〳〵』なる一語以て暗示して。他をして應接自在、進退靈妙ならしめる。是れ馬級一急を悉く此『アタ〳〵』を命令語とし。止、動、避、突の一がチャンと人間の呼吸に感應する習慣を平生養ふて。自然と此方が思ふ通り相成るので有る。即ち感應の連續である。

兎角我から隔てるから先方が隔てる。隔てるのは前謂ふ通り小乘の特性で。又社會缺陷の根本的事由で有る。

同じ隔てるにも世間に色々ありて。隔て方が一番少なくて。赤心を他の腹中に置くとか天下の憂に先ちて憂ひ天下の樂に後れて樂むとか云ふ方面の人は。即ち賢人とか英雄とか云ふ大乘根の人で。俗式ながら菩薩の片割と相成る。例は歴史に多し。

林子平は。嫂の死する時に。死骸の裾に逗入てグウ〳〵高鼾で寢たとの事。是れ奇を衒ふての行爲にあらず。彼はお附合に夜伽を爲したれど。本來人間の生死位るの事を面倒に思はぬ程に達觀し。又自他と云ふ隔ての心が薄いから。偶然此奇行が現はれたもので。去ればこそ彼は思想の輪廓が全國の人に超越し。鎖港攘夷とて隔て力の極盛なる時代に在りて。平然として海國論を著はし。江戸日本橋より龍動まで海は直通なりと喝破し。精神の大乘をば國家の事境に應現せしめたのである。

宮本武藏が出羽山中にて。十二三の小童の家に宿りし時。深夜刀を研ぐの響凄々たりければ。武藏戒心して寢ねざるを。小童發見して。小父ナセ寢ないの乎畏いの乎と。ダシ抜けに言ふ。武藏度膽を抜かれて起ち。事の由を詰れば。小童は何等意に經る所無く答ふる樣。今日父さんが死んだのだ。家は俺一人で。父さんを壑に持て行かうと思ふんだが。巨大くて運べぬから。二つに切つて荷擔はうと思ふて鉈を研いでるのよと。武藏聞いて小童の氣膽を敬愛し。爲めに死骸を葬り。且つ小童を『士ィ』に

爲して遣るてふ誓約を以て。彼を九州に連れ還り己が養子とす。件んの小童が即ち後年天草亂に大功を建てし宮本伊織其人にて。武藏以上の腕前と後年稱えらるゝ新免二刀流の本尊なり。扨ココだ。哲機、禪機、兵機、等しく小童の一喝に含まれて在る。

武藏は六十餘州を武者修行して。對境に立つ者を發見せざりしと雖ども。此時尙々武道未熟であつた。武藝は達しつらむなれど。武道の極處に於ては小童の天機滿々たるに及ばず。小童は武藝全く不案内なれど。武道は之を天然に享受し居つた者である。

武藏は實に此時まで。尙ほ一物を心法に留めて。本體自照の妙境に格らず。故に其隔ての有る丈け人物が小さく。從つて二乘の境界を脫しなかつた。

武藏にして若し此時までの武藏たるに止まりて。藝以上の進境を得ざりしなら。彼は必ず佐々木岸柳から返り擊され了つたで有らう。岸柳は十八歲にして九州を靡かせし非常絕倫の武藝家である。

東鄕大將が神明を先として戰略や勇氣やを後とし。凱旋の第一著に伊勢太神宮を拜み奉る神妙の處有るからこそ。予は東鄕大將を『靈魂の人』として恭敬し。斯人を心の鏡と立てゝ妙法に引括めるが。東鄕氏にして苟くも日本軍人は大和魂と云ふ者を有するから克つ抔と。胸底に一物を留めるならば。其時は氏の落第である。曾に此一人の墮落たるのみならず。日本の精力は今日を限り漸衰である。東鄕氏に限らず野津大將も其他も同じ事である。法華行の予は。軍人に非ざるなりに。座しながら皇國軍人に武道の印可を授くるの權威有あり。猶武藏に對する出羽山中の芥子髮小僧の如く然り。

世俗的英雄中に在りて性格最も日蓮上人に近き所の猿面冠者は。最もこの『隔て』の少なき人物で有た。歷史學者は。自己の靈的修業が未熟なる爲に。自分の分量だけに英雄を解釋する而已で。直ちに己れが古英雄の魂魄と融化する迄の事境を得ず。從つて古英雄の神氣が筆に移らず。往々英雄を誤解し無道の力量者と爲し。他の大乘的性格をば埋沒せしむ。即ち政界の眞英雄クロムエルは。文界の眞英雄カライルの筆に由りて初めて其靈魂の光明を放射せしかど。彼れの心事が世に埋沒せしこと數百年なりける類にて。秀吉の場合に於ても亦。太閤樣と云へば。人々は單に智慧才覺の精妙なる人と解すれど。太閤の太閤たる所以は。實に大乘根を感得したる處に在り。智慧才覺の精妙は其れの影や迹である。秀吉が上杉景勝敵對の兆しを見るや。僅々數人の扈從と與に、直接景勝を訪ひ。肝膽を披いて之と語りた。然るに景勝は秀吉の意氣に感じ。其時からスッカリ是が味方と爲つた。是れ秀吉が景勝と感應し合ふたの也。

光秀が信長を殺すや。秀吉は對敵たる毛利勢に實を明かして和を講じた。毛利方に人有り。小早川隆景と云ふ。議して曰く。秀吉は蓋し撥亂反正の天授の人なり。今之を厄に窘めずして和せば。彼我の長計ならむと。快く和議を諾す。是れ秀吉の『自ら好んで他を隔つる小乘式ならざる處』が毛利勢に感應し。又隆景の高義が秀吉に感じたる事相で。若し夫れ歷史家が皮相の見を持し。雙方の電氣が無

線で感じた處を目して。胸に一物有ての小細工と思はゞ。汗は眞英雄の罪人で有る。

尤も神通力や天眼通は。外道と雖ども之を善くする者で。何も今更服するには足りぬ。個人同志が心身の範圍に於ける感應と靈魂の感得とは全く異ふ。此區別が大切で有るが。右の如く有情同志感應の姿は、極々手近き事にて解かり易い。而して斯く普通の心身上の感應が合點されたならば。予が所謂神物人一切の感應も亦。羊に繰りて牛を識るの便を得るであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

されば。一事一物だに精神に隔てざる予が。且らく自行の主題として日露戰に回向し。旅順戰の勝負の劒々峯に必死と心靈的に採合ふて精も根も竭き果てむずるソノ時。此城落ちるが天意乎、落ちざるが天意歟と惑ふ程に自ら愛慮に閉ぢられつゝも。さり迚。我既に妙法に同じて戰爭全部を我生命と爲せるに。旅順が落ちず迚自ら愛慮するは。偶々以て靈魂自照生命融一てふ事の我の迷信たるを示すには非ざる乎……と。行きゆ戻りつ心念を激使し。自力他力の混線が劇しく、我靈魂の常寂光を靈盪せしめ。恰かも電力不完全の爲め電燈が一明一滅するが如き事境に我は化しける彼の時!!ア一彼の時よ。成佛と退轉との界線は實に此危機なりけるよ。

予にして信力が兎の毛ほどだにも薄かりしならば。予は必ず絶望したで有らう。妙法の功德にリミット(限度)を設いたで有らう。予自ら日蓮の魂ィに融一し得ざりしで有らう。當時の有力なる兵家が愛へし通り。旅順は到底不落なりと。予は分別したであら。即ち神靈と己レとを隔てたで有らう。予若し當時。天地俱々、我身も心も、微塵に碎けよと。一擲する迄に妙法蓮華に歸依せざりしならば。惡魔は天上より打見て我を指し。

哀レなる天眼。汝は敵も味方も『全唯一の實在』の所現なり、故に『全唯一の實在』を自照する我は。旅順必ず落ち、露西亞必ず破れ、平和必ず來ると照破すと謂ふ。汝が註文通り行かばお慰みなれど土壘汝は過れり敵は敵の力味方は味方の力なり。力と力との勝負は唯だ是れ打算を以て判ず可し。ソレ以上に。其を括めて支配する何等超越せる靈威なし。且つ汝が自照すと心得る者は。其は日本人として日本側に即きて愛國心てふ煩惱から斷言せし者而已。妙法は唯だ佛と佛との境界なり。汝凡夫爭かで之と融一するの事境に及び得可き……

と呵々大笑して。嘲り戒め、叱らるゝ樣に。當時予が感じたる其儘。予は如上の感念に降伏して。我を卑下し乃ち我靈魂をば神物人一切から幾分なりとも隔て了りたで有らう。

而して其時を限りとして。妙法蓮華の光明は我靈魂を離れ。予は日蓮直傳の靈魂を世界に現證し得ず。終に『天眼は神經質思索家にして八卦置の如き迷信家なり。但し文章は面白ふ書く男であつた』位ゐの所で藝道相濟と相成つたで有らう。

實に此時ぞ。信仰の力の難有さ!!

予は全幅の心身が日露戰に籠りつゝ在つた。故に一旦落ちねばならぬと照破せしに。其を今更疑ひ且つ惑ふ樣にては。是れ我信仰不足の結果なり。佛罰畏る可し。落ちずば更に行を積まざる可からず。どこ迄も其に歸依せむには。妙法の力は旅順を落す可し。若し誠に落ちざる者ならば。妙法は更に予が靈魂を開いて心の憂虞を除き。旅順不落の儘に我成佛の事境を顯現す可し。……と。予はハット頓悟した。而して心と身とを粉微塵にする大決定を以て。『例の土製の猪口＝實は妙法其れ自體若くは我靈魂と同視したる所の大切なる猪口＝をば巨石に打著けて。獨り私かに若しや之有ると恐れし自己の執着＝自已の無明煩惱＝をば唯だ此一擧に破碎し。乃ち新たに此瞬間に於て起る所の天啓的事相を信受せばや』と。我身が生き居るや否や。我、我を知らざる心身無＝無亦無＝の事境に立ちて。何なりそこに超絶的宣示が開くのを待ちた。

道間予に五感無し。意識無し。祈念の對象たる所の理無し。神無し。物無し。人無し。若し强ゐて之有りとせば。汗は唯だ我れが融一したる妙法のみ之有り。

扨力を極めて。巨石に打著けし予は碎けた。予自身が碎けたると同じきさかづきは見る可からざる微塵に碎けた。

見る可からざる微塵とは。碎きし刹那の盲感の相で有る。

碎いて後暫時は。喪心者の如くなりしならむも。予は知らず。

予自ら我は茲に現在すと。五感と意識とが普通人間に復せし時には。予が碎きし刹那に何等の超絶的宣示が開けし乎、何が妙法の所現天啓的事相なる乎を分別し、若しくは冥感す可くもあらず。

唯殘るは土製猪口の死骸!!

打覩遣れば。碎けし細片は粉々たり。而して猪口の主なる部分は。如何なる機みなりしにや。鷄の畫くるみ絲底も其まゝに殘れり。手に把り擧げて。ムーと握ること數十分。南無妙法蓮華經を默唱しつゝ。今こゝに起れる新たなる生命は果して何を語る耶を自ら聽く可く祈り念じた。

祈る前に。實は『新生命』の語葉は予が靈魂に聽えて居たので有るが。しかし。予が心は未だ之を分別せざりしので有る。

斯の如くすること多時にして。精根竭きしにや思はず手を放てば。破れし猪口に蒸汽立つ中より。只だ予が心眼に印せし形ちは。

『缺けし鷄の脚』と『絲底の圓體』と而已。

ア―。新生命の猪口は唯だ是丈の事相を基本として更に廣く演繹し『戰爭の前途如何、平和克復の時期如何』てふ千百萬言を要する事實を世に通譯せざる可らず。

理學と傳說と心との奴隸たる所の當世智者識者哲學者宗教者より見たならば。這般の行爲は。危險極まる非論理非科學、非常識の沙汰と謂はゝ。予は修めし學術の範圍内に於ては。固より論者の謂

ふ所の如く予自ら否定せざるを得ない。而れども世界に若し一人たりとも。當世の所謂科學の領分に於て。『生命』てふ問題を解示する楷梯(でもよし)だに與へ得る人あらば。予は口を噤む可しと雖も。淺ましや人間界には古往今來。未だ生命を事境に現證したる科學者なく哲學無きなり。故に予は日蓮直傳の宗旨に依りて之を信解し信受する外に途なし。

日蓮の啓示せし事上成佛は。生命をして生命を照さしめ靈魂をして靈魂を語らしむる唯一乘の妙法蓮華にして。唯一乘の妙法蓮華は。神物人一切の感應を事境に現證せしむ也。

予は終始『靈魂の人』たるを信行の歸著とす。而して此歸著は。神物人一切の靈魂に融一して。因緣に應じて其一部を現證するが故に。妙法所現の一部たる日露戰爭を照破する位ゐの事は。科學者が二二が四を證する如くに現證し得可しと爲す。

予は此時實に照破せり。

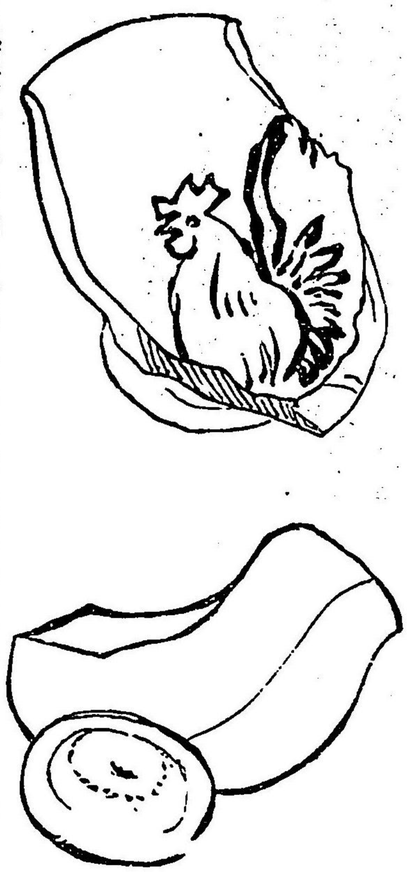
日露戰爭は一と七の數にて終結する事旅順は一の數たる一月に落ち。大體の戰爭は七月一日に相濟む事。平和は一と八の數に由る事。

を照破せり。靈魂が斯く語れり。

其次第は如何。

* * * * * * * *

單に冥感せりと言ふ許りでは。人々愈々疑惑し。天眼めが偶中の迹から前に遡りて巧く牽强附會ると謂はむ。さればよ。事上の悟證と斷はりて予は勞す。予は抽象的にのみ言はじ。這般の照破を證明するに一々具體的說明を有す。先づさかづきの坏れて新生命を示現せる姿を御目に掛けやうならば。



右は現物其まゝに描寫して。內部と外側と兩つを示した者で。爾餘は全く粉微塵に碎けて庭の土に歸したのである。

扨この新生命の猪口が初發に予に語りしは。

『脚と云ふ事』と。

『硬剛いと云ふ事』と。

の二箇で有て。其外は空寂で有た。

而して妙なる哉。糸底完全にして。外邊が缺けたること圖の如き故。主體は確かに立ち得るなり。缺けて開きたるは乾即ち天を表し。地盤即ち糸店の渾厚にして能く載するは坤即ち地を表す。是れ易の『地天泰』の當相にして。八と一の數なり。況んや『脚』は。予が意識牽引の符號に於て。『七の數』なり。硬剛いと云ふ事は『一の數』なり。

平和を意義する卦面は。六十四卦中に唯だ一個、地天泰の卦。即ち八と一の數である。而して一七を卦面に改むれば。☰☷この卦と爲る。之を一括めに括めて觀る時は。四陽が二陰を壓する形ちで。ツマリ陰陽各二本を一個と見做せば。☰☴これに成て仕舞ふ。此は五也風也巽也である。而して巽は。易の基本數たる八卦の第五位☴巽爲風たるが故に。一七の暗示する『風』の本用は五五の數に成立つと活斷される儀である。が。シカシ。此活斷を物にする迄の苦心は一通りでは無かつた。

蓋し靈魂は自照す。而れども自照したる影と迹とを人間に通譯する役目に移れば。其時からが心の領分である。心の符牒を引合に出して。理や數や情やを調べ。其がキチリ合ふ所を宣示する。其が予の立言として顯現する次第で。ココが佛敎に謂ふ所の本門の佛と迹門の佛との差別である。

妙法自照は本門である。一個の天眼として言ひ且つ書く時は迹門である。本門は超絶的なるが故に。普通の論理が打消し得る事にあらねど。迹門は又格別にて事が現實的なるが故に。合理的を要する。世間に偶生する、自稱神佛者流や滔々たる迷信家は。心を以て靈魂を覆ひ。若しくは靈魂の所照なりと斷見して。迹門の身をば超絶的の者の樣に誤信しつゝ。心の符牒たる理や數や情やを度外に措き。而して我は神佛の旨を獲たりと自分免許するが故に迷信家である。非論理家である。之に反して拙者のは。飽まで理數を信じ科學を尊びつゝ。更に超絶的の者を事實に現證して理數と並び行はれて相悖ちぬが故に。眞理以上更に眞事實で有る。迷信と相距ること細胞の中の靈活なる核や仁と。石地藏は迹の如くにして。サテ。迹門に於ける智慧、知見は。科學者の爲す如く精嚴なるを期すもので。泰の形ちと巽の性とを我手に握りてから後の予は。己が知識の及ぶ限り。事實の綜合と推理の實驗とに盡瘁し。結局是が適用の當否を心に論定すべく常識を傚ひ來りて試驗石と爲す次第で。決して一氣即斷のまゝト者然と世に告るのでは無いのである。

* * * * * * * * * *

憶へば。妙法が予の鉄猪口に應現して頭缺けず尾剩す莫き靈淨淨の主體を暗示し。汝は神物人一切の語る無聲の言葉を人間に通譯し得む乎とて。一見すれば謎の如き者を予の面前に投げ出しける此時は。正に明治三十七年十一月中旬にして。時恰かも籠城攻圍二軍が絶對絶命の絶頂に瀕せるソノ

事境が。此方の心靈に感受して。予をして四百四の骨骨がミリミリ碎け四肢五體が烈火に炙炮られて膏汗の焦げ立つ底の苦患を驗せしめつゝ末に。死ぬより尙つらい箇中の苦みをば。唯一乘の妙法に救はれむと渴仰せしめ。竟に全宇宙一擲の大決心を以て己が心身たるさかづきを叩き附けしめし者たれば。此時斯くして天意の謎の題を握りし瞬間の予は。之を握る前に比ぶれば天地全く淨穢を異にし。心すがゝしく體胖かにして。恰かも迷宮の圖を內部から辿りて外に出る如く氣安く。其狀は攻圍軍が全滅を賭して却つて晏如たりし時の心持と相似たり。是ぞ煩惱の極は菩提てふ實境なる。されど其も僅かに一時の安心なりけり。

蓋し。無心非情なる鉄猪口が靈的に語る所は。地(八)天(一)泰＝平和＝てふ事と一七＝五五の數となりければ。其をば其と歷々に解釋する業は。後日、戰爭の成行を實驗しての上でこそ成る程神明は斯く告げけるよと悟證し得れども。其當時即ち三十七年十一月中旬に於て。其と吾心の讀むには決して尋常の苦行には非ず。思慮分別は心靈の障碍と爲り、知識聞見は妙法の光明を遮蔽し。乃ち折角閃めきたる神物人の感應をば其まゝ吾心に寫影せしめむには。復たび非常の勇猛心を要せしめたので有る。即ち常識に於ても又種々の報告が示す所に於ても。二〇三高地が今や確實に占領される乎ドーカ乎と云ふ絕頂の時に。『旅順は一月を以て落ち決勝本戰は五月を以て濟み平和談判は七月一日を以て荒方定まる也』と云ふ神意天數を斷定する事。は如何に我靈魂は其の自照しても吾心は却々其と確認する迄に大膽なり難く。ドー考へてもウソの樣であつて。予は爲めに兎つ追つ鉄猪口に入神して氣の遠く成る樣に覺へしこと屢々で有た。

蓋し予若し小乘的に自得して晏然たらば。如上の感應をば自分一個の秘念に留め中れば結構、中らざるも亦世に迷惑を掛けしとて高聚長引し得る儀ながら。予は。一身を一社として一社を國家として國家を世界とし地球を全宇宙として、大乘的に自行し化他し。自行と化他との融一中に靈魂の主體を置く者たるが故に、一念苟くも發起せむ歟。汗は一個の天眼てふ迹門の假相に非ず直ちに全宇宙の事境なりとせざる能はず。從つて如上の感應一たび到る時は。之を公公然、了々地、新聞紙上に發表し。洽ねく一切の衆生と與に。佛知見に浴して淸淨を取得するに非ざれば。予は法華經の大罪人たり。則ち予は實に自ら小氣味惡き程の感應に對して我を忘れて歸依し。自分ながら當惑する程の豫言者＝ソンナ者は此節甚た流行らず新聞が豫言者氣取る抔と來ては其だけでもチト變だよ天眼は戰爭狂の徵候を現はしたよと謂はるゝ而已で當人たる社長は社員の手前すら氣の毒なる所の＝豫言者として世に打出さるべからず。扨斯うなると。萬一違ふたとて。自分の心事は愛國と法華經とに在りて他意なければ毀譽榮辱、屈の河伯なれど。最も軍人に愛好せらるゝ我新聞が（實際我新聞は戰局の指針として戰地に歡迎されしこと拔群なりし也）斯の如き事を公言せば士氣に關して人心に響く所果して如何ぞ。若し豫言が外れて戰爭がズーッと長期に永續する樣の時には。折角人々が見當に立つる唯一の燈明臺が

潰れて仕舞ふ儀にて國氣茲に滅裂を來さむ。然らむ時には。予が妖言の罪たるや。一身を八ッ裂にして一社を焦土とするも亦償ひ難し。吁敢てせむ歟。自ら揺らざるより出る罪業の恐有ること斯の如し。去りとて敢てせざらむ歟。予が法華行は一空なり。予は是に於て復たび絶對絶命に陥れり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

絶對的事境に入るや。死活以上の死活は來る。之を妙數理に對照するに。消極面の數が微數の極に迄消却し行きて。零と見まほしき程の『元原的一』に達する時は。是ぞ生に非ず滅に非ずニゲチーヴに非ずポヂチーヴに非ざる絶對的事境で有る。然り而して此事境は。其儘消極の絶頂にして而して積極の初發的起點に接するが故に。數は乃ち『九一合一』の當相に因繰して又も死活以上の死活に入る也。是れ菩薩の菩提には即ち煩惱伴ふ所以にして。慈悲之が根を爲し。功德之が導を爲す。根とは煩惱なり。導とは成佛の本因なり。引導を渡すと云ふ事は亡者に限る沙汰ならず。右云ふ如き煩悶の場合に於て。吾自らに引導を渡すのは即ち是れ法華經の現實なる功德で有る。

是に於てか。新生命を鉄猪口に握りし予は。復たび鉄猪口の復活後の死活に心を奪はれたり。理に於ても數に於ても常識に於ても一七＝五五の數が完全なる事を證する迄は心安からじとて。自ら苦海に沒在せり。而して吾自らに引導を渡す迄は。再び無量の信行に勞せり。

『常識』と『直覺』との混戰は。予が腦底に連發して。大腦小腦を振盪し意識情感を耗却すること週又週遂に予が心身をば綿の如くならしめて後。困睡嬉嬉、全く正體無きこと約二昼夜に亘らしむるに至りた。但し此は苦行として異むに足らず。本來法華行者は。自行化他を一束して事境を其まゝ靈魂と做すが故に。心身の困憊は以て潜める生命を損するに足らず。却つて困憊の極に於て微妙の神氣を喚起し來りて。端なくも靈魂の謎を心が解くに至るを常とすれば。予は正に如法に行じたので有た。

されば。感應の内容を蔽ひつる意識の外皮をば斯く漸次に耗却せしめける結果として。我は困睡てふ涅槃に入り。扨然る後。困睡より醒めて。瞳焉として新生の嬰の如くに眼を開けば。時は恰かも鴉が東雲を鳴り渡りた。心機ノ〳〵として我は誰なり耶と訝かる頃には。傍らの梅蕾が嬰兒の頬の如く何時の間にか脹らみ居つたのも目に映じた。ァー乾坤の清氣を集中せる梅よと。屹と座りて吒と氣を吸へば。我は日清戰爭の初發に當りて靈の導火を演せし我なりけり、日露戰爭の天命を夙感せるも亦我なりけり、我は宿世の善根に於て神物人の特寵を享ける程の權利を有してけりと。天來の勇氣ムラ〳〵と發して。前に仰ぎし鉄猪口をば今は威如として眼下に見降す。而して鉄猪口が予に對ふて更に再び一七、五五を繰返すに止まず乎と。打見遣れば……。

電光石火!! 神靈徐ろに予に告げて曰く。『一七は銀ぢや。銀を知らば平和を知るぞよ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

予が意識の略符たる八卦の定義に於て。『一』は堅剛を司どり鑛物を表し東北の金氣に配す。而

して『七』は即ち脚なり、艮なり(艮の卦は前章に述たり)。故に迂曲せずして單純に符牒を操りさへすれば。『金に添ふ艮』が一七有る。

金の字に艮を添はしめば。其は何物ぞ。

言ふにや及ぶ。所は『銀』である。

『銀』既に一七に本具せり。銀を味へば平和來が明瞭と爲る。此は夙に其と氣附く可かりしを我ながら迂濶なりける也。

所以は何ぞ。

抑々舉國の人士が戰局前途の遼遠を思ひ、平和克復の時期は何の日ぞと想像するだも得爲さゞりし、當時なりと雖ども。世界の形勢を達觀する時は。『戰爭は非常に長期なり耶將た案外短期に落著す可き耶』の疑問を解決する活機は。左の二途孰れに轉ぶやに繫かりて居たのである。

1。日露戰爭が餘り長期に亘れば。露國は歐洲の均勢を破り。投資者たる佛蘭西を筆頭として列國共に貿易の大頓挫、經濟界の大擾亂を蒙り。從來七分三分の力ネ合にて幾かに維持する國際上の姑息的平和は。爲めに各處各物に破綻を生じ。乃ち漸して佛露獨對英米日の不兩立と爲り。竟に列國戰世界戰に迄押移るを免かれざる事。

2。是に於て列國は日露戰をば日露同志の喧嘩と見ず。一歩誤れば我身の上と觀じて。汲々として戰局限制の手段を講じ。且つ成るべく急に戰爭を收束せしむるに全力を盡す。因て支那は滿洲の外は日露共に兵を用ふる能はざる事と爲り。歐米は又國際法規の嚴守に約束され事態增長の端を塞がれつゝ在り。然り而して萬々一、日露戰が長期に過ぐるあらば。ソノ時は。印度のアフガン境上も支那、四百餘州も亞非利加內地も。共に風雲亂飛の舞臺と化するを以て。差し當りて列國が急中の急として需むるは。是等廣大なる未開地に於ける行動上、最も必要なる『銀塊、銀貨』たる可きは論無し。

3。故に日露戰が必ず長期戰と爲るならば。其は列國が戰局限制に冷淡なる時で、爾して忽ち銀價沸騰する時であるし。然らざらむには。平和速成の列國の意圖に準じて。銀塊の價格は比較的平穩に止まる可きなり。

實に此は常識上に於て秀逸せる活學的著眼點であつた。

尤も邦人は。戰時に於て只管良民的に、國威を謳歌し。名譽の戰死を誇耀し。或は客氣的に猛くて。烏拉第一峯占領など云ふ空想を流行せしめつる而已にて。戰事眼外交眼兩つながら盲丁し。新聞てふ者は記事論說共に其日暮しを勤め。其指導は戰局及び國際の機勢に對して全然不用意なりければ。如上の著眼點は當時の常識には超絕せりと謂はざる可からず。然れども世界的立脚に基く常識の精且つ周なる人士ならむには。右の通り看取して。以て戰期長短に關する概算上のメートルを發見する筈で

有た。而して日本は驕兒的官僚と。其に風化させられつゝある智力の淺さ論客記者達が政界に翔翔する時節に付。御本人の大藏大臣すらも。銀價がドッチ向くやら不用意にして怪しとせず。戰地に銀貨引換の軍票を發行するに當りて。一圓の票を七十錢以下に使ふて。其後暴騰するは必然たるにも拘はらず。軍票が通りさへすれば結構とばかりの貧乏暇なしの了見を演じ。扨回收の時筋には一圓のが一圓十錢にも當るに至りて茲に內三割減と外一割增と二重の損を成し。ツマリ一億圓なら四千萬圓は宙宇に消えさせて仕舞ふた都合で。『開戰と同時に銀塊を買占めて、敵ロシヤに鼻を明かせ、依りて以て我は却つて一億の金貨を一億三千萬にも活用する』などの先見及び活手腕どころか。土臺から銀のギの字も活勢に參酌せざりしと覺えたり。

然るに予は。一方に靈感直覺を專念しつゝも。他方には前段の所謂世界的常識を缺かなかつた。

『一七は銀ぢや、銀が五五の證人ぢや、馬鹿め!!疾くに其と示して在るに、銀の一字に考へ附かぬ遲鈍さよ』と。我から我心を叱咤して世界の銀相場一條を冥思しける頃には。早世界が明るふ成りて仕舞ふた。板戸洩る丶曉氣は障子の白を點染した。心めは戀婿から握手さる丶姫のごと全幅が鎔ろけさう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

常識上の推斷にては力及ばざる戰局の成行如何てふ難問題たればこそ。身を粉にして天啓的事相の發現を請ひしなれど。之を獲て而して意識の領內に捌く段に移りては。復たも常識に俟たざる能はず。而して常識上の主要なる著眼點も亦、一七の數に依りて鮮明に知得されしぞ嬉しき沙汰なる。是に至りて初めて予は鬼に金棒なり。

斯くて普通の記者よりして豫言者に進化しつゝ在りし予は。鮟猪口の靈的主體をば了々地に了々し乍ら。慈悲より起る煩惱の爲に『決定』を遲ふすると約五旬。遂に十二月の末に至りてサー正月の初刷は。二十七八日頃迄に原稿を作り上げねば出來ないと云ふて。脚下から鳥の立つ場合に推移りて。予は。豫言者然たる位置に進むのを今更ながら忸怩として。兎角胸の動悸めきしが。恰かも花嫁が媒妁人から六曲屏中に押遣らるゝ如く。職工等から執筆三昧に押遣られ。とうゝ。

三十八年の國家大開運と元旦の本紙

と題し。初刷第一面に自ら預言者の銘を打ちて。戰爭の成行と平和克復の期限を目に見る如く斷言して仕舞ふた。

勿論。當時予が生命たるさかづきの一條は是れ予が修行の私事に屬するを以て、予は一語も之に言及せず。只だ、社中及び社友には予が天啓の本據を證明して後日の驗に供したるが。扨自分には秘念の本據有て斯く豫言する事ながら。本據を世に示す可き時と處と位とは未だ至らざりし同年の元日には只だ、バットした丈の事はか言ふ能はず。乃ち成る可く幻怪の感を與へざる樣勉めて攝受的に書き做

せり。

爾れば旅順が一月初めに落ちると云ふ事も

新年我手に入る最高價の山

と特筆せる旅順圖に於て仄めかし。又旅順が落ちたる見地に立ちつる戰局本末の論文をも入れしかど。未だ正月三個日中に落ちると迄預言する程の確信は予に之有らず。其邊は畏い物見たさの心持にて打置けり。但初刷の紙面は全部旅順が落ちた心持にて書きし事は紙面に顯然たり。

而して第一面主題の外に『戰局本末研考談』第五十五回が初刷に在り。

バルチック艦隊の前途と露獨密約

と題し。バ艦隊東航上の重要地點の圖解を附して。其必來を警戒し。更に對露戰を丁する根元的靈威を喚起する絶好材料として。雪柳生に命じ。

全宇宙氣力の權化高杉晋作の眞面目

てふ二面打拔きの長文を初刷に入れ。高杉の氣魄を藉りて百萬の戰士に傳へ。以て國家未曾有の國難を濟する所以の精力を照破すべく期せり。

是より先明治三十六年の元旦初刷には。我社特に海軍の偉人阪本龍馬を表彰し。初刷には異例ながら聊か深意を籠めて。其最期の流血淋漓たる所の繪畫を挿めり。而るに翌年正月元旦 皇后陛下の御初

夢に阪本龍馬が顯はれし由にて。 陛下には阪本龍馬の容貌抔一切御存じ無きに拘はらず。餘り歴々と龍馬が見へし爲め侍臣へ御物語に及ばれたれば。侍臣は龍馬の寫眞を尋ねて。之を御目に懸けし所豈圖らむや 陛下の夢に入りし龍馬は實物其まゝなりしとぞ。此事實は宮中府中相傳へて龍馬の靈、陛下に見へ奉れる者と信仰する趣。因て予は。海軍には龍馬、陸軍には晋作、此兩個の靈が顯現して呉れなば。戰局の全勝、平和の速成、倶に疑有る可からず。徹頭徹尾靈界を辿る我東洋日の出新聞にして今高杉晋作を念せば感應は必然なり……と。誠に高杉の靈を呼びて紙上に物言はしめる心持にて之をば擇びし次第なり。

爾れば三十八年元旦の我初刷三枚は。實に東洋日の出社の魂魄を實現した者で。予は自ら之を自己靈魂の寫眞と立て。己レ一人にて日露戰を行ひつつ在るやうなる信行のソノ事境を茲に示した心得で有た。固より營業本位の新聞又は終始俗的にして不靈なる滔々たる學者記者の敢てし得る事で無く。是は日本に於て、否、世界に於て破格例外なる新聞で有た。

願ふに 皇后陛下は。天性至純にして何等私念を以て他界を隔て給はざる故にこそ。阪本龍馬の靈が御心靈に投映したるなれ。是れ至極の實例ならず耶。諸君の中に大乘的機根を有して自己の靈を本然の事境に置く一人有らば。其人は縱令南無妙法蓮華經を唱へずとも。人間同志の靈の感應抔はイト容易なり。而して向上唯一歩にして。人のみならず神にも物にも感應さる可きなり。

其は扨置き。妙法蓮華の啓示に服從して。自己靈魂の照破する所をば。活字に組ませ紙に押させて。一々其を證文とする事は。辯疏、言拔けの個處とては針の尖ほども殘す莫く。確乎、斷然丁々焉。一個の活字が紙に印せらるゝ時は。予の靈魂は丁度其だけ極印を打たるゝ都合にて。若し夫れ言ひし事が幾部分にても外れさうに成る場合には。予は神經の系筋を露出させ砂で揉む程吾身に應ゆる也。而して斯る場合には。予が心理的煩腦は肉的煩腦を反應し來り。事理相即きて齒痛として迹を垂れ。予は爲めに齒科先生の濟度を受けしこと二三回にも及べり。佛敎に所謂、人は一日の內に八萬四千の生死有りとはココなる可し。予の預言は實に予の無量の死活の因たり。而して同時に其果たり。爾れば初刷の第一面に『明治三十八年國家の大開運』を叙するや。予は神物人一切の靈威に縋りて我生命を維ぎし者で。先づ天照皇大神を證人として。太陽を體とする我國の運勢を叙し。國難前途の保險を請負ひ。次に銀相場を基礎として常識上の判斷を示し。項を置きて。見て來た樣に大事件を斷言せり。

▲本年の運勢は波上の旭影

維新の際に人民渴仰の源となり官兵自奮の守本尊と爲りし者は。唯だ一の錦の御旗である。薩長の手に錦旗徽つせば。東北の雄藩長岡會津、東海の勁藩桑名、德川の彰義隊は。與に爭かで阿奴々々筒袍圍袋の裳に屈せむ耶。

討露の血戰に於て日本兵の驍勇無上なるは亦此理に均しく。分てば聯隊旗、括めば唯だ日の丸のお蔭である。

抑々日は日本人の靈性に感孚する先天的極上位の威嚴物にして。亦精力運氣の鑑と立てらるゝこと言ふにや及ぶ。即ち國家大危急と大勃興との岐れ目、娑婆と冥土の界なる明治三十八年一月一日に足蹈掛ける今朝に於て。パット東洋日の出を拔いて。大日本の開運は明治三十八年に在り。今年こそは東洋の初日影が波上に躍りたらむ如き氣勢なり。蹶ると蹶けぬとの合ひを行く樣な戰局てふ自轉車はスラリスッと娑婆に入て冥土へは陷らぬと。保險附の言を聞かば。諸君は決して惡き氣色をば生じまじ。

保險附とは無論、獨斷自稱の保險附である。新聞をも書く者が易者染みた狂人染みた妄想の言、ハテ扨可笑しやと思ふ方は遠慮なく笑ひ給へ。正月の事なり笑ふを上策とす。笑はざるも亦可なり。筆に氣魄有り。意味は取るに足る。

▲戰局收束の時期は本年半期

一倍潮の路の邊は、提燈あれど戀の闇、闇の夜路をとぼ〳〵と云ふ類の心細い悲觀者流は。己歲元旦初刷の本紙を千切つて南無東洋を三遍唱へてクルリと廻つて日の出の威勢に綾かり候へ。嬰兒さへ馬に蹴られいで育つものを。露西亞との戰ヲが何せ先が見えぬと謂ふや

戰サは露西亞と日本許りは爲し居りはせぬ。ロスの蔭に何國か居て足拍子取ると同じく。日本には英も添へば米も後見役に立ち居るに其等の列國は孰れも內心は戰局制限、世界戰豫防に汲々たれば。破格滅法、身代扯き破つて傍迷惑を惹起する迄の極端なる事には雙方の差添が同意する筈が無い。旅順陷落に先だつて北京駐劄の內田公使が歸朝した抔は早戰局は外交時期に進入したる前徵と見る可く。世界の『銀相場』が落著き居る間は列國の異圖深からざるを察するに足るで無いか。ソコデ普通識者の觀察を以てして。日露戰爭は千九百五年の前半期を以て終結すてふことは推斷され得る儀で。ココ迄は筮竹ナヤラ〳〵を雜へざる本當の話で有る。

シカシ我等は思に思を盡して中外の形勢を看取し了りて右の一般觀察を成せども尙は其には滿足せず。御幣も擔けば繰起も取る水垢離取て天に問ふ事も厭はず虛心にして理數の冥感を博し。獨り窃かに語るらく人間の子は厄介なもの哉。天文に歷然たる此氣運が解らず。ヒイ〳〵風車稅々の稅話しで喘息病の如く。此愉快なる正月を神經的に暮す哀れさよと。乃ち惜しき法門。密機天に先だちて天に違はざる活斷を發表す

▲判然と媾和時期を豫言せむ

他人の口より發言する權利或は之無らんも拙者共は敢て之を公言して手頸の脈診らる〳〵義務無からうと思ふ。本來日淸戰爭の砌り。伊藤博文殿も陸奥宗光殿も日淸談判は平和に歸着す可しと信ぜるに拘はらず。拙者共は斷然日淸の國交破裂は免がれずと確信した。確信に伴ふ實行も聊かながら遂げた。次に北淸事變に先だち怪しき雲行を當時の紙上に報じて。却て愚俗より訝られし程なりしが日露戰爭に至りては火の氣の無い中から烟濛々たりと豫言した而して地租增徵、京釜鐵道速成の予輩一本槍の註文等も其間に彩りて予輩が先見の明を成さしめ。本日は京釜全線開通と云ふ目出たい事に迄相成た以上は。今回の媾和時期豫言に對しても諸君は少々耳を假すとも罪ならじと思ふ。

外れりや笑ふ。中りし迚三十錢の新聞を三十五錢拂ふても吳れまいに。此樣な口上は却々不引合である。けれども是も國家の運勢を信じ自ら國家と與に終始しやうと云ふ分外の大望から好んで脊負ふ苦勞の飛沫。扨言ふて仕舞へば短いもの。

日露戰爭は本年五月五日を以て海陸俱に決戰の段落を終了す媾和假條約は七月一日を以て成る

終了せむ、成らむ等の未定語を使用せざる處に興味あり狂味有り狹味有り。三ケウの一を味ふての上取捨は御勝手なり。

預言方式の洒落淡泊は右の如し。シカシ這般の洒落淡泊の中には無量の難行苦行を含む事を。有情の士

は推察せむ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

五月五日とワザ〳〵拔差ならぬ樣に日限を切らずとも。五五の日とでも言ひけむならば。少しくは話に融通の餘地を生じて。予は其れ丈け壽命の伸ぶ可きに。好んで斯く時計の針を指さして時を語る如く判然と預言せし所以は。自己自らが妙法蓮華の主體なりと云ふソノ修行に對して。心身全幅を投出せし結果にて。予は世間に向ふて蚊の涙ほども水臭き點を有せず。拔差ならざる絶對の事境をば自ら發念して現成する也。幸にして。バルチック艦隊全滅てふ戰的異蹟は五月の月、而かも其五五の日に於て日露の決勝本戰に段落を終了せしめ。媾和問題は世上一般の疑惑に拘はらず。七月一日を以て彼我共に異に媾和す可き意志を確立し。同日を以て我は小村を、彼はウヰッテを各全權大使に任命して。之を中間證人たるローズベルト大統領に通告し。翌二日に於て其次第が公表さるゝ運びに至れるが。是は媾和の假條約には非ざれど。本來媾和の性質たるや。米國大統領の精神の渦卷に捲込まれし者にして。渦卷の中心點が定まりし七月一日こそは。媾和成就の準備大成せし所以なれば。之を以て假條約と見做すも苦しからず。蓋し預言てふ者の性質として勿論神髓を主とし形式を客とするが故に。神髓に於ては予が預言全中せる者と謂ふも亦誣ひざるなり。开は恰かも二〇三高地が確實に占領さるゝ耶否やが即旅順の落ちる落ちぬの問題たりしと同じく。日露兩國がローズベルトを中心點として完全なる全權大使を定める耶否やが即ち媾和の成る成らぬの岐レ目であつた者で。此岐レ目が豫言通りに來た以上は。モー事が相濟ミ也。

予は實に戰爭及び平和の絶頂的事境に融合したる予の靈魂を自照せしなり。ソノ證據には。光明赫々たる我第一面は。前項に引續き左の如く項を立てゝ照破せり。

△三七。二六。一七。五。八一。

冥感の土臺と爲つたは一七の數。拙者のは易斷と自家創定の數理斷との併用する故易者の説と異なれど。天、澤、火、雷、風、水、山、地を一から八に割附ける點は純然たる易經通り也。ソコデ一七は卦面を總括すれば風即ち五と爲る。一七を合すれば八と爲る。八は三十八年の八。遡りて考ふれば妙なる哉。開戰は三十七年の二月六日。即ち三七を合して十。十は一に同じ天也。二六を合して八。八は地也。地天は泰と謂ふて平和安泰此上なき吉の卦。風は入るなり即ち收まるの意を主とす戰局の前途。決して無際限に遼遠ならず五と八とを體する時に結着すと判斷す。總別八は陰の極なり。極が來れば變じて通す。九は數の絶頂なり。開戰から二九の十八個月目が恰も本年七月に當り。コヽに一絶頂を成し。絶頂の先は平地なり……

篤と御覽あれ。予が靈魂の證文は右の如く白的的たり明了了たり。

五月に決勝本戰が段落して。八月にはポーツマウス媾和談判が終了して仕舞ふたのは誠に五と八とを體する時に於て結着した者で。是れ實に三十七年の十一月より年末に掛けて。鉄猪口をば日露戰爭の縮寫圖として歸依せし其時。予が靈魂が照せし其まゝの事相なり。妙法蓮華の事上の顯現なり。五五の數をば五月の五日なりと判斷せし予は。少しく意鋭の透明不完全を免かれざりしと雖も。五月と云ふ事は誤らず。決戰の本段落たる日本海海戰は。實に五月の二十七。二十八兩日に了せり。五月二十七八日の此國家存亡戰は。兩日を一日と見る可き連續戰にして。恰かも日清役を二十七八年役と稱ずる如く。始めて五月二十七八日の海戰と稱するを至當とし兩日を別ちて之を擧ぐ可からず。故に『二十七八日と云ふ一個の日』は二七と二八とを合算せる日と見る可く(27)(28)合せて(55)たるが故に是は五五の日で有る。五月の五五の日とは正に神明が定めし者と感佩する予の福い如何ばかりぞ。人知れずこそ思ひ入りけれ。予は實に此初刷を草するに當りて。數に於ては五五を念せしこと殆んど狂の如く。吾心身をば五の數に吻合する事境に置かむとて。ズット前より引續き執筆せる『戰局本末研究談』をば。丁度五十五回の順に來らせ樣とて。年末の終刊日まで同篇を書きて五十四回と迄計上しなる次第。盖し年の暮に初刷の原稿を二面分も三面分も書く役目さへ一方ならねば。普通ならば終刊の分だけは自分が本末談一回休みて精力の餘地を作る筈なれど。全く右通り五五を念ずる行力の一端として强行執筆を行ふた者で有た。

事は些微に似たれど。予の自行としては。必ず五五の數を以て日露戰を決著せしめると云ふ祈願と法力とを籠めての此所作なり。信神の心無き人は笑はむ歟なれど。予は。此念力若し通らずんば其節は大魔王と爲つて露西亞は愚か世界をも破壞せむずとの意氣込。

爾れば予は。此年の暮に限りて急に『梅花の愛人』と爲れり。是れ梅は五輪を體とする因緣上。時の物でもあり旁々之をば『物の方面に立つ吾心の證人』と立てたる次第にて。斯く心身を五の數に攝收する方便とは爲せるなり。梅花は非情。而れども有靈と觀ずるの處即是事上の妙法なり。

是に於て予は。上下共に戰局無際限、前途極めて遼遠と期待せる眞ッ只中に於て。『戰局決著の山は早見へたるぞ』と諭す心持を以て。但し決勝戰が前途に横はり奉天撫順の陸戰とバルチック艦隊來航戰との警戒を凛々しくする意味を以て。同じ初刷の紙上に戰局本末研究談五十五回『バルチック艦隊の前途と露獨密約』の篇中、左の通り書き出せり。

梅が香の芬たる中に箱の心を認めば。氷嚙む下駄の下には天地の春を穿つ可し。來て來ぬ如見ゆるも時。去りて去らぬ如想はるゝも時。時なる者の神髓や只だ達人有りて如是相の裏に如是性を獲得す。哲機兵機倶に是れ皮下、血沸々熟熾々の活境より抉摘するを要す。

旅順が落ちたと落ちぬとは冬至が來たと來ぬとの相違の如し。抑々冬至の節至れば之からが小寒大寒而して後に節分立春あり。冬至が凛烈の時の入口たるに易經は敎へて之を一陽來復

の時と謂ふは何ぞ窮陰の極は冬至にして之を界線として日中が永くなる。即ち目には定かに其と見えねど天地の心は早く既に陽氣を最下層より吹き上げる機會に進むが故に一陽來復なり。神髓を謂ふのと形相を見るのと譯が違ふ事に注意せよ。旅順の運命が定まりし迚早く既に戰局の春を期しもしやうならば。其人は早計なり。臘梅を見て霜の心を讀まざらむに均し。

曰く奉天撫順方面の敵勢優越、曰くバルチック艦隊の東航進捗、凡そ是等の事相は。小寒大寒の眼前に迫りて新曆の元日たる本日に於て新年の山の色長しへに慘憺の冬色を帶ぶるにも似たり。之と同時に小寒大寒が來る可しとて之を畏避し過憂して以て陽春は却々に來らずと沮喪するは亦非なり。陽氣は客臘廿一日(冬至)より刻々に加はり居るなり。微積漸展なれども而れども事は既に順に向ひつゝ在り。

今ぞ猜じ給へや。冒頭に『梅が香の芬たる中に』と書出せし予が心は。全く人にこそ言はね。千萬無量の思を五輪の生物に托し。之に繰りて宇宙の生命を呼吸せばやと祈りし念のソノ影なり。

梅の精が予が神靈に入りけむ。予は後日に於て梅花の奇瑞を實驗すること三回に及べり。其は別問題として。其よりも眞ッ先に。初刷が出來上りて見て。予は肅然正坐、恰も神體たる明鏡に對する心にて。我社の初刷を我邦まむ許りに敬誦せるに。予は段々に五五の數の奇瑞を其中に發見し得たり。开は即ち高杉晋作が大事を舉ぐる際の浪人的變名は『谷梅之助』たりし事が。折も折とて予に感激を與へしに

て。加之も高杉東行が下關に豪遊しつゝ大事を圖りし際。日夕左右に坐せしめつる彼が愛妓阿字野＝其をば落籍せしめし當日の朝には。洗嗽央ばに他を擁して『三千世界の鴉を殺しそして朝寢がして見たい』と豪吟しける此一首と與に。維新の幾多風雲兒に謳はれけるおウノ＝東行の臨終まで看護して。其死後は。剃髮して尼と爲り。墓側に庵を結びて朝夕奉行すること東行生前の如くして今日に至れる可憐の梅月尼＝の言容も亦併せて篇中に活現しければ。予は期せずして梅を體する兩個の知己を咫尺に見る心地して。嗚呼梅之助に梅月尼!!ココにも梅よ、梅に梅よ、五五よと祝した。

況んや。全宇宙氣力の權化として賴みし『高杉晋作』てふ字面を凝視すれば。彼が生命の符號たりし姓字は。明かに三十八を體するぞ奇しき。『杉』の字たるや三に十八たるのみならず。『晋』は即ち易に之有る晋の卦を出處とすること勿論なるに。晋の卦たるや『火地晋』にして。火は三の數。地は八の數たり。アー。三十八年國家の大開運は。高杉晋作の神靈此に關かる也。扨は予の賴みし高杉晋作は。却つて予を賴みて此境此時予が紙上に顯現せしとこそ覺ふれ。晋は進也。日、地上に出るの象。故にススムと訓む。又光明なり。『本年の運勢は波上の旭影』として予が物せる所と同義同境なりけり。然らば則ち高杉在世の時の後輩たる武の山縣、文の伊藤、財の井上、略の兒玉等が廟議を司どるに於て。彼等は彼等の先輩たる高杉が靈來りて投ずる我に對しては。冥々裏に戰事外交の手引きを受らる順序。

斯かる所に。ッイ數週前まで九州日の出新聞の主筆たりし所の、爾して小人的爭奪に敗れし太

田雪松子が。沒落を局外者たる予より救はれし感謝を呈し。『九州日の出に據る間こそ及ばず乍ら拮抗する心有りしも。今や迷は醒めたり。貴下の德や終生忘れじ。因て日の出を貴下に返上する印シとして今迄社に掲げつる之を進呈す』とて文晁筆の日、波上に躍る大幅を贈り來る。予は九州日の出だろうが月の出だろうがソンナ事を念頭に置く餘地は當時無かりしかど。心に秘めて三十八年をば太陽波上に躍る姿と念じ。其をば書き成せし正に此時。斯る秘念を知らざる人より此贈り物を受けやうとは。夢更自ら期せざる事とて靈感森々嗚呼是れ日の本體と擬せらるゝ天照皇太神が予に臨み給ふにも等しと予雀躍せり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

靈界に於ける獻身的修行は。神知り物感じ人通ず。而れども感應の筋道は無形にして微妙なるが爲めの故に。人は之を感得し易からず。從つて空漠無稽の事の如、思ひ做して。只管隔別せる人間力を專らとし。果テは策士、ポン引、世渡り狂言屋の時勢をば作り來り。吾等をば勞せしむ。

吾等。三十七年の除夜前一日初めて新生命を確實に取得せる心地して以爲らく。念力、愈々神物人に通じて。國難前途の收束さへ圖星を指す樣明るふ成りけること。是れ實に國家の大開運なるのみならず。其々、我社の開運なり。我心身の得道なり無量壽佛の顯現なり。來る元旦よりは。予は最早一應の卒業なり。肉上の病累も之にて去る可し。靈の開暢は即是一切事境の開暢なり。軈ては二十年餘浪人せる予が本懷も世に知らる可しと。生來初めて一人前を了する人間に成た心持を生じぬ。

繰りて憶ひ起せば。曩に自ら九州日の出新聞を創建して社運隆盛を致しけるを。予不在中に發行人の名義を變更され遂に惡人等の詐奪する所と爲りし結果。予は則ち。惡人が吾を賊するは世道人心の罪也。即是れ我自行の缺陷と反省し。『予をしてワザ〳〵俗的成功を後にせしめて死地的窮境より眞生命を獲得せしめる天命却つてココに在り』と觀じ。乃ち孺子を捻る事を容捨して。滿足して天の此試驗に應じ。乃ち身に寸鐵を帶びずして千人の敵に向ふ如き精力を我と喚起し。乃ち新聞を以て我法華行と立て。骨を削りて筆と爲し肉を展べて紙と做す底の慘苦を以て。今の東洋日の出を別に創立したる明治三十四年の歳晩。シカも風霜凛々の夜。社内に取別けてガンガラガンたる社長室に。責めて懸圖の一幅も迚。茶人花詠老の掲げ呉れし一軸有りき。何やら月の字が大書されしが。ソノ當時暫らく掲げつる所。予は過勞の爲め吐血するに及び。自奮して曰く。月の字抔を掲げ置く樣な陰を含む氣魄では病氣の奴が增長するこそ當然なれ。我は大陽たらざる可らず。我自身が日日の我新聞たらざる可からずと。之をば修行の方便に活用し乃ち該一軸を撤し去りけり。而して爾後三年は予が床の間は無一物に經過しけるなりけり。

然るに此三年間に於て。曩に吾に背きし孺子數輩は。或は破產し。或は社會の日蔭者と爲り。因果の

理法を實にして。道の爲め苦しみし吾等は反對に天寵を受け　社運漸く伸びつゝ此時なれば。予は此正月こそは人間並に床の間でも飾りて心祝ヒを擧げばや迚。扨日の出の畫幅が欲しふなり。輙ち亭名に因みて其類の珍幅に富む所の迎陽亭主人に囑し。何なりをと所望せしに。主人杉山は。太神宮の鳥居に鷄の一羽棲りて。軀を傾けて東天紅を叫ぶ。彼方には初日半ば露はるゝ畫の一幅を差出し參れり。即ち予は圖らずも鷄と太神宮てふ景物さへ添へる日の出を獲て。心に緣喜を感ずること一方ならず。而して後一日を超へて。斯くと知らぬ雪松子が雄大なる日の出の大幅を贈り越せし次第にて、國の上も身の上も社の上も言ひ合せし如く合致せる時が時なればこそ予は殊に狂喜せる次第にて。顧みれば滿三個年間。無一物なりし我床の間が。今や太廟の日の出と海上の日の出と一初に舞込まるゝ吉境到來しぬ。是に於て予は『吉境の序なり。創業の伴侶たりし月の大字の一軸をも取出でて。昔を偲ぶ料とせばや』と。煤と與に該一軸を筐底より掃ひ出すに。ヤヤッ!! 此は梅月ぢやと。我眼光は爛閃けり。

月の字には梅が伴へけるよ。今にして思へば「春もやゝ氣しきとゞのふ月と梅」の俳句を茶人が擬して此一軸偶然の湊合と言ふて仕舞へば其迄の事なれ共。予が靈魂は其を偶然とは言はしめない。予は肅然として感に撲たれた。高杉晉作の神靈眼前たりと信ずる此境。此時だから正しく不思議を感じた。

曰く、谷梅之進。曰く其伴侶梅月尼。之か既に予の心を動かしつゝ央ばに。滿三年予が創業多難＝恰かも晉作か水砲を以て米利堅軍艦を打攘ふに似たる＝唯だ精力をのみ生命とする當時の予が伴侶は正

に梅月一軸で有たゾレが。今此時に出現したのは。是ぞ高杉晉作の神靈夙に予を誘りしてふ謎ならず耶。高杉が乾坤一擲の場合の伴侶は梅月尼唯だ一人今在り。予は無意識に梅月を此に呼び起せり。

晉作が未了の心事は。不肖ながら吾之を了せしめむ。否。晉作が神靈我紙面に在り。舉國夫れ必ず之に感孚して。戰士悉く全宇宙氣力の權化と爲り。陸海の決勝本戰は必ず五月にて了し。平和亦一七の數を洩るゝ氣遣莫し。神物人は斯くぞ予を圍繞して證人たるよ!!

嗚呼筆にするさへ今尙ほ其場の如し。予が靈魂の寫眞は斯くて世に出てたる也。而して予が鋏猪口が日露戰の縮寫たりし現證茲に成立せる也。

諸君よ。予は諸君と與に。今や漸く旅順堅城を落さむとす。予が當時の靈魂の姿は上述の如きなり。此姿が諸君の心鏡に映らむ一刹那は。即ち諸君自ら當時の天眼たる也。旅順戰の

籠城攻圍二軍の精力と諸君とは。正に隔て無く融一する也。諸君が旅順を開城する也。果然。予が初刷三枚が郵送の帯封を了せし除夜には。此方の事境吻合して。旅順にては日本軍愈々要塞の鼻とも見る望臺を占領せり。如何に金城湯池とは云へ。神物人の靈威一たび發すればボロ〳〵朽木の如く化せむとす。

吁。勞せり矣。望臺占領まで!!

明くれば日本の明治三十八年正月元日。露西亞の千九百四年十二月十八日。

はの〳〵と白むを待たで。籠城軍の都統ステッセル將軍の傳令騎は各方面の主將に聘せ。緊急召集を行ふて曰く。籠城軍全部將官會議!!と。

阿修羅とも鬼神とも見へし旅順兒敵が。案外早くシカも吉相夥しき正月元日に。彼よりして開城の申込とは!!

夢歟。眞歟。幻歟。あらず歟。

眦外の面ヲを凝視つ放視つして。息呑込みつゝ胴震ひし。矢庭に席を蹴立てゝ新聞社の前に駈附け。愈々其と実留めて脚も魂イも有頂天。乃ち還りて家人を叱しつゝ神酒を供へし人は。日本國中夫れ幾何の多數に上りしぞ。

天頂無き勇ミよ。底の知れざる悦ビよ。我が我を知らざる感激よ。嗚呼斯日、此時。人々は自ら意識せざる乍ら。實に神物人一切の靈威に感孚せる也。宇宙の靈魂と融一せる也。靈魂の人たる因緣に動かされし也。

光明は人々の身を圍繞せり。死者も生者も等しく新生命を吸呼せり。

開城の功德は。日露併せて二億の人民に普及したるに止らず。洽ねく世界の一切の衆生に及ぼして茲に平和の第一機を成就し。茲に神物人の靈威の現證を呈して。地球上の世道人心をして清淨なるを得せしめたり。世界の人の靈魂は。淋しき冬枯の姿よりパット春の太陽と變りぬ。諸天善神悉く東海に集來して。有らゆる惡魔は影を隱しぬ。旅順の一角より紫雲立昇りぬ。

* * * * * * * * *

神聖なる我『一七、五五』は。一月一日に旅順を陷れたる靈驗を初發として。爾後は五月の二十七、二十八兩日は。バルチック艦隊を全滅せしめ。七月一日には。北米合衆國大統領の立會保證の下に。日露雙方に正式の講和全權大使を任命せしめた。而してポーツマウス條約を八月中に成就せしめて。明治三十七年二月の開戰より此時の平和克復まで正に一個年と七個月なり即ち一七なりと證した。加之も一七、五五の眼目たる巽の一字は。爾前にも爾後にも。判然として宣告して言ひけらく。『汝等は日露戰の前途遼遠を說きて喧ましいが。是は三十七八年戰役と稱さる可き名實の者ぞや。決して四十年四十一年と繼續する者では無いぞ。三十七年は辰の歲。三十八年は巳の歲。辰巳を合すれば即ち

我なるぞ』と見よ。巽の字たるや之をたつみと訓む。巽の方のソノたつみ也。辰巳也。況んや日本の軍事費が總計十七億圓にて打切と相成たのは。全く一七の當相で有る。

日本の論壇は。戰局の觀察が提燈行列式であり た。軍事と外交との出入相殺に關する識力が不透明でありた。故に兩國全權委員が既に米國へ著しつる時だにも。尙且つ前途遼遠、戰爭繼續の八字を繰返す外に何等の奇なく。相替らず芝居の士ィ然たる戸水博士一輩の豪論を都鄙に祖述して。新聞が一色單調に化し了り。纔かに精神界の告朔の餼羊として。幸德私水西川光次郎等の社會主義者が戰爭狂を冷評した丈が。都門の異彩でありた。實に天下を擧つて『官僚の作り景氣』に魅せられ。意力智力の渾ヲが皮相的の者に陷り了りた。

普通の論評の能力に於てさへ斯く缺如しける論壇に向ふて。戰事及び外交の活消息に加へて。運命＝プロヴヰデンス＝神意天數＝等の事を執りて。如何に我等が春來、二百餘日警告すとも。見識の段が遙ゐ過ぎて。我等はお仲間から省かるゝ外は莫かつた。而して斯かる事態の漸く進みて八月に入らむとする時。米國陸軍卿タフト氏一行は日本觀光の歸途。我長崎に寄港しければ。我等は素信宿論の在る所をば。セメテ此外賓にでも訴へて。多少の感動を博せばやと心得。新聞の約一面を費して。

『佳賓の來港を機として日露媾和の神意天數を明ず』

てふ題の下に。平和媒成は米國の天職なる次第を戒告し。『しッかり頼み申す』との意衷を表明した。

該論文は。一七、五五の本相本用を說明するには。頗る便益を有するが故に。其概要を左に引用せむ。

當世文明の潮流に漂ふ智者學者の腦髓は。天來の綜合(天啓)に合致すべく餘りに精緻で有る。粗雜とは謂はぬ—餘りに人間的である。

故に亞細亞式の思想の精粹と歐羅巴流の精緻との適當なる調和を得たる大腦髓の代表者、昔時のプラトーの如き破格の賢人が歐米に出ざるは。之に由るので有る。

扨然りとて、、、、。東西兩洋の文明の湊合せる渦卷がクル〳〵廻る其中心點たる所の日本國に於て。思索の活法を全有する者＝即ち今人の偏破を凌いで。プラトー式に物を觀る所の一社若しくは一人の存在することを。怪詭なりと目す可き理由は無いので有る。而して東洋日の出は這般の珍しき方式に思索を委ねて。神意天數のメスメリズムに供する一種の小供である。固より此は例外＝恐らく宇宙の投機者と謂ふ可き破格の野心家であらう。けれども亂心者では決して無い。

例外破格なる此思索家は。亞細亞式預言者(咄る意味にて)と謂はるゝ光榮の下に。或は賣卜者の變體乎の觀測の下に。全く何物にも掛られたメスメリズムの發動を演じたこの小供は特に日露戰爭の收束に關して。五里霧中に。ローズベルトの頭上に懸かる神秘の星を指摘した。指摘しても。

何人の眼にも入らぬ。皆々其に意を留めなかつた。

五年戰か十年戰かと憂慮さるゝこそ人間として至當なる觀察たりし昨臘に於て。この小供はビリ〳〵腦天を震はして左の如き熱を吹く可く促された。

日露戰爭は。一七、一八の數にて收まる。

最後の決勝は五月五日（之は五五の數と云ふのが正確なりしを月日と一氣に判斷して仕舞ふた）媾和假條件は七月一日を以て成る

然るに熱は吹き中てた。

陸上大會戰は吉林線に夙に起る可き事。萬人の萬目悉く睨む所たるに拘はらず。到底不可思議にも其が幕を明けず。矢張り陸上の日露最後の決勝は奉天で濟んだ。否濟み相である。五月の廿七、廿八日にて海軍がズバリと最後を遂げ了りた。廿七、廿八、合せて五十五。（五五の數）で有る。

米國大統領閣下が此海戰の結果を機として媾和媒成の勞を執り給ひ。日露兩國は乃ち互ひに人間らしい胸算用と文句との色々の趣構を以て。仰山海外電報料を使ひつ使はせたる末に。大統領閣下の耳に迄。『此邊で折合ます』と云ふ條件が波動し。則ち磁石力を總身と爲す乎の如き大統領が堅實なるソシテ包括的なる綜合、解剖并せて精妙なる精力に訴へて。自ら之にて豫備條件が完成せりと決斷するに至つたのは。正に七月一日で有る。大統領は翌二日に之を公宣したのである。

而して此天使的媒人はメー、フラワーと云ふ自己愛用の快走艇を小村に供して。首尾よく日露の愚爭―若しくは賢爭―を極め樣と待構へ居るがメー、フラワーは日本語に譯すれば五月の花である。五月の花は（五五の五）『バ艦隊全滅の符牒』と小供は吹くのである。

易經には六十四卦ある。その卦中に。平和と云ふ意義の卦目は。唯一つで。

地天泰䷊ 泰。小往大來。吉亨。

としてある。而して地は八の數で。天は一の數に定めてある。泰の講釋に小往き大來るとは面白い。小は陰即ちニゲチーヴの義で。大は陽即ちポヂテーヴの義である。戰爭は全陰である。堅實剛健の陽即ち米國の實力が全陰を抑へて之を調和して。初めて平和が來るので有る。易の本文は斯く日本の全權小村の『小』が往いて合衆國大統領の『大』其に會ふて。其で泰ぢや、、、、と判然敎へてあるので有る。小は日本から米國紐育へ例外的迅速の到著を成した迎米國新聞が特筆して居るのである。奇妙にも十七日で着いたのである。

八月一日（今日は陽曆八月一日で陰曆の七月一日）たる本日の我佳賓は。首賓タフト卿の外六十二名（東洋日の出は本日が一千と六十二號）が正員なりとぞ。六十二は八である。一はタフト卿である。是等は問題外ながら。本場の米國では。八月一日たる本日を以て大と小とが相調和して休戰決行抔の段取に迄進んで居りはせぬ乎。

右だけならば小供は褒美の菓子を強請らない。が。一七、一八の數が此處までではまり居るよ之が神意天數の證明に非ずして何ぞや、、、と謂はずして止む能はざる所以は左の點に在り。

米國の米は我國字に於て。八十八と立てゝある。形チの示す如其まゝ其である。

八十八は八一八である。

八一八は合せて十七である。

北米合衆國は正に平和構成の中軸たる可く天命を負ふ者

である偶然てふ者が斯うも揃ふても。其は揃ふただけだと乾燥無味に解釋して仕舞ふ者は。米國思想界の巨人コンコルドの聖人が指示せる『海岸は海から見れば岸で、岸から見れば海である』ト云ふ語の深味に緣無き人である。

佳賓よ!! 我言を以て之をローズベルト閣下に傳ふべく寛容なれ。我々日本人中の最も熱誠なる楷級は神意天數として米國を信頼すること斯く迄切實なる也。

利害に對する精しき解剖心は。或國家と國家との同盟を利益交換的に支那人流に促すなり。其は尙ほ水臭し。而れども我等の米國に對するは交換の方法のソレ以上也。信頼なり。綜合的靈能の天來的合體なり。而してダフト卿、ローズベルト嬢等は予の此言をば天啓なりと認むる程に神を信ずるの人たる可し (以上三十八年八月一日の立論)

一七、五五の靈が事上に顯現しける次第や實に右の如くで有る。之をして無意味の偶中なりと謂はゞ。弁は稱謂ふ人の餘りに傲慢なるを自證する者で。快く予が言に應諾を與ふる人こそ。常識活用の士であらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さり乍ら。アーさり乍ら。當初、主戰論の最烈なる唱道者の一人として。日露開戰は天命也必然の天數也。と呼號しける事が幸い虛妄ならざりし爲め。聊か言責を立て得たるものゝ。今度は又改めて。戰爭勝敗の山が見へざるソノ內に。戰局收束、平和克復の時限を斷々乎として豫言し。以て在外の我戰士及び後援の同胞を心界に指導せむと欲する此業が。如何に予の心身を苦めけるぞ。丈夫の涙を箇中の獻身的苦衷に濺ぎ給へかし。豫言が後日に中つたからこそ。予は一丁前に口を世間に叩き得れど。其は戰爭起れる當年の暮に於て。ドーして中る者と知り得やうぞ。先つ外れる方が千中の九百九十九で。中らうと云ふ見込は千中の唯だ一であつたものを。爭かで山氣を以て斯る事を敢てし得可き。外れたら最期。予は空しく狂名を負ふて一身も我社も信用滅茶なり。社中の同志は悉く當代の英俊にして前途の有望は予に過ぐる有るに。予は自己の迷信妄想に驅られて同志に迄累を及ぼし。即ち俱々社會上に死する同樣の結果を來さむ曉には。即ち予たる者如何にしてオメ〳〵人間顏を保ちて社中に見へ得やうぞ。然り而して予は敢て滅法の大膽を以て此大危險を冒せり。是れ全く社會上の忠死

を覺期したる上の事にして。予が戰場の士に言を寄せ『お前計り殺しはせぬ、拙者は幾遍も戰死し居る』と云ひしは空理を出て他を奬勵せしに非ず。實地掛直なき所を告げし也。

凡そ名譽、信用、財產、志望、同志の一切を犧牲にせば。人間は死ぬより辛い社會的打死ならず耶。而して予は其を賭して唯だ三枚の三十八年初刷に供せり。彼樣の心事は當時。何人よりも其百分一だに察して賞ふ見込とて有らざりしに。予は偏に妙法蓮華の光明を恃みて爾爲せし也。

識力は靈域に觸れて初めて偉大なる所以をば。時流の士多くは想到せず。從つて『日露戰爭は日本が勝たから勝たのだ。豫言も神靈も要るものか』と言ふならむが。箇中の消息は決して戰時限りの用では無い。凡そ邦人の意力が皮相的なることの弊害は。戰時の旨動と同じき影響を戰後に持込みて在る。今日と雖ども同一狀態に居りて。經濟界教育界共に頭熱足寒的なるを結果しつゝ在る。即ち文部省が國語を無視して假名遣案或は羅馬字を擅き出すなどは。語源、語義及び言語に伴ふ意想心識を度外視して。語の形貌のみを惟れ問ふに至らしめる彼等の皮相的智力意力を彼等が正直に發露せる擧動にして。株式界の狂騰と其に續きし狂落とは。之を政治的現象に例すれば。非講和の燒打と擇ぶ莫く。全く是れ一般の識力が低小なる爲め。輙すく刺擊されて輙すく發作する所以を説明する者なり。則ち因果必然の理法上。無精神の教育界は無精神の財政及び經濟界と相俟ちて。日本の生活面を遠からず七顚八倒の境界に投入せしめむこと明かなり。而して弊根や一なりと。今日を知り明日を憂ふるの士は。須らく先づ昨日に溯りて。戰時に於けりし識力の不用意を悔ゐ。以て發憤一番の心機を獲ざるべからず。蓋し士林が稚心を株守して。銘々お天狗なることを自省せざる限りは。予の所謂『識力は靈域に觸れて初めて偉大なり』てふ眞致に孤負せむこと。今猶昨の如くなるべく。從つて今後に起る國家の內憂に處しても亦。前と同じく書生事後の論に日を送る可ければ也。

危き者は邦人の心理的病症なり。

戰爭は。日本が小口から刻んで。刻み克に克ちたから宜しかつたが。若し中途にして、一遍なりとも敗軍を釀したりしならば。人心の沮喪に伴ふ經濟界の心理的亂調は果して如何であつたらう乎。敗軍までならずとも。若し敵國に陳平張良有りて。內地に妖言蜚語を使用し。巧みに人心を攪亂しつゝ。常陸丸一條の際にでも。敵國が若し房州の沿岸に砲擊を喰はせ。或は箱館等に飛彈せしめたらむには。邦人は狼狽病を自作して商業上の亂脈を好んで惹起したであらう。論より證據。平和の今日すら。經濟界の人々が凡べて物を根柢から成すと云ふ常節常道を缺き平生皮相的人氣に乘じて皮相的形勢に由るの結果として。經濟界の亂脈等は。流言の力だけにても何ン時なりとも。喚起し得るでは無い乎。銀行の將棊倒れを招致し得るでは無い乎。實に過度の萬歲熱は亦過度の氷點思相を反覩する者で。官僚及び官僚式の政黨の註文通り戰捷を謳歌しつる國民は。導師たる官僚及び官僚式の政黨が重大なる實地の內憂に逢著して手も足も出でぬ目に會ふソノ時。彼等亦同じく七顚八倒せざる能はず。而して禍

根は靈活なる識力を平素に拒否して。俗惡にして不信誼なる官僚式に沒入する處に在り。

『日本の戰捷を官僚式萬歳連の誇る如く爾かく容易にして且つ完全なる者に非ざりし』と知る事は。對症の適藥である。敵國露西亞は頗る大國らしき堂々の軍ッを行つたもので。敗退しつゝも立直る中心力をば始終確保した者である。最終の陸戰を更に一回、リネウキッチの手に演せしめたらむには。鐵嶺以北の勝敗は猝かにトす可からざりしと。內外識者の俱に許す所で有る。講和前に露本國より精兵三十萬ばかりリネウキッチの手に集まりし事は確實の沙汰である。奉天戰にすら敵軍諸將の不和無かりせば。我勝利は萬全ならざりしのである。現に黑溝臺の逆襲には。殆んど將に我大事去らむとしたのである。故に露國軍人中の氣力有る者は。毫も過ぎし戰敗を念頭に置かず。落着き拂つて向後の快戰を期待し居る也。現に西比利亞軍團長の子たる由のスポーッ大尉が。ハルビンに於て日本の一志士に語りし『八年後ロシヤ全勝說』の如きは。最も以て他山の石と爲すに足るのである。大尉は徐ろに語りて曰く。

日本人は露西亞が戰鬪に於て負けたりと思惟するに似たり。然れども露西亞陸軍が日本陸軍に打負けたりと云ふ點は。何の點を指さす耶。

如何にも露軍は負けたり。

『軍團戰』に於ては。常に負けたり。

然れども。軍團戰ならざる戰鬪に於て。露軍が負けし場合が果して一回だも之有りしや否や承はしたし。

師團以下の各聯隊戰、大隊戰、中隊戰等に於て。露軍は一回と雖ども敗衂せざりし事は重要なる事實なり。

故に今日より八年の後に到りて。日本と再び干戈相見へむには露軍の全勝は必然也。

何を以て八年と言ふかと云ふに。大戰に習はず、大局運用の軍事的素養に乏しく、且つ老頑にして度し難き現在の軍團長等は。八年の後は悉く退役の年限に達し。今の師團長等が其後を襲ぐが故なり。

是豈邦人の頂門に良き一針ならず耶。

さればなり。戰爭の中途に於て。多感の予が。平生の用意聊か識力の精透に存せし爲め。又官僚式の矯衒以て民を御する風尙を惡むが爲め。將た又實戰に任ずる人々の意衷を想ひ遣ること至れるが爲め。遂に私かに平和克復の天命を請ふて。之を同胞に宣傳するに及びし所以は徒爾ならじ。人心を戰爭に狂せしめて神經を硬化せしめるのも。彼際の一方便たりしとは云へ。开は酒氣を藉る元氣に似て、眞の永續的精力には非ず、忠義の至情と幷せて戰局の眞致を體する識力を備へてこそ、能く不盡の正氣を確保し得可しと。信じたればである。

蓋し如何に忠勇の士たりとも。希望の彼岸有てこそ快く一命を差出し得れ。前面は透す可からざる濃

霧に封じられ前後左右。孰方に向いて船を行るべき乎見當の附かざる樣の場合に。勇氣の鈍らざる者夫れ幾人ぞ。旅順の場合に於てさへも。全滅の犧牲を出せし土州の某郡にては。郡民擧つて怨み且つ憤り聯隊長を差殺せと迄言合へり。是れ何ほど死んでも旅順の落ちると云ふ希望の彼岸が見へぬからの事で。人情、無理も無し。政府の連中は氣休めを職業として人民を弄ぶが故に。戰苦の實感は衆庶に切ならざるを致しつれども。實際、旅順難戰の酣はなる頃には『看々犬死で。土や山と格鬪して無意味に際限なく生命を捨るのだ』と云ふ感想が軍中に起りし故。如何に忠勇ながらも。兵が心理的に沮喪して却々進まざる事と爲つた。此件は曲學阿世の史家や新聞屋の滔々たる今日には誰も發表し得ねど。事實や決して蔽ふ可からず。幹部將校が手古摺り果てゝ。前進强行の手段として背進者をば斬捨る嚴令を下し。前線に於ては日日、幾名かづゝ。此嚴令の犧牲に供されしとは誠なる可し。

右の都合なれば。滿洲本軍が沙河戰の後、奉天撫順の大敵と對抗しつゝ。イデ此度の一戰こそは決勝戰なれココで一命を賭するは我國の全勝、續いて敵國降伏の本なりと希望の的が立ち居つてこそ。士氣旺盛、三軍勇躍すれ。若し夫れ然らずして前途は無際限に遼遠なり、此一戰に打死して勝利せしめたから迚、敵國は更に五十萬も七十萬も新手を繰出してハルピンに盾籠る、其ハルピン迄我が進むには更に一年餘の準備を要す、而してハルピンを攻略する時には。今の現役豫備共に悉く此世から消へて仕舞ふ、其でも未々露西亞が降伏する見込は無し、興安嶺を打越へて烏拉山迄押進む迄には、其上に又五七年を算せざる可からず、則ち我等が躍起して忠死すとも。其は恰も据風呂に鐵瓶を掛ける樣なもので。何の甲斐も無し、アー味氣無や、張合無や、、、、と云ふ段に相成たならば。國家の內外果して奈何ぞ。國民は政府と新聞から客氣を附せられて。烏拉第一峯論抔の太平樂を申し居りたれども。內心の脆さ加減は常陸丸一條の時に於て問ふに落ちず語るに落ちたでは無い乎。故に人々永久戰の覺悟を爲じつれども。开は理上の覺期で事上の信行に非ず。僅かにても戰爭が不利を來す乎、或は『勢イで進む調子』が狂ふて。前途の渾沌茫漠に氣を撲たれたらば最期の介なり。金貸は取立てる一方、質屋は置質御斷はり、株式は賣物溢れ、國庫債券は眞ッ平御免、、、、の時節生じて。戰費の出所どころか銘々の顎が乾揚がる程の經濟的恐惶を釀さむ耶も測り知る可からず。

サー斯る心理的危殆を冥々裏に控へたる昨年の正月而かも人氣の蹈出シ第一步たる所の其元日に於て。吉相嚴そかに。天外、聲有り。曰く。日露戰爭は本年前半期を以て終了す。曰く。バ艦隊は必ず來る。曰く。決勝本戰は五月に在り曰く。媾和は七月一日を以て荒方相定まる。日露開戰が天命たりしと同じく平和も亦神意天數に出で。前途の歸著は天文に昭々たりと。戰場の士並びに國民一統に告ぐる者は。其言の果して中る中らぬは第二の問題として。實に正八幡の使者たる白鳩が陣頭に飛びし と同格なる吉無上、淨無比の靈驗其者に非ずして何ぞ。

予は正に知る。明かに信ず。我社の初刷三枚は。海軍は勿論、奉天撫順の戰線に於けりし尊敬

す可き戰士御一統に對して。常夜の國の北斗七星＝息切レ掛かる競走の時の梅ぼし＝五里霧中の燈明臺＝生き乍らに受けて解脫得道する妙法の引導＝たりし事を知り且つ信ず。此は忠亮なる將士より予に寄せられたる幾多の感謝狀に立證さる。後に驗し得たる事實實際に於て。日露國交破裂以來の大小戰は。悉く敵國降伏てふ唯一乘の妙法で有た。其間に天晴レなる働きを爲しける死者生者與に俱に。決して据風呂に掛けたる鐵瓶では無かつた。賽の河原の小供では無つた。全く日本國をば大陸建國てふ彼岸に濟す所の尊き菩薩的舟筏で有た。即ち御蔭を以て。神功皇后以來氣を籠めし三韓は我手に入りた。數年の後には我日本を立往生せしむ可かりし露西亞太平洋艦隊は消滅した。搆はず差置かば支那及び滿洲の生き血はロスから吸はれ了りて日本五千萬人は爲めに立枯レす可き所の東清鐵道及び旅順大連は首尾よく始末が著いて。國家大開運の端緒は玆に大成し了りた。吁難有し忝けなし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

旅順が開城せしと雖ども。彼我陸戰の主力は本來滿洲の野に在り。況んや海上決戰は。必ず來る可きバルチック艦隊との本勝負に俟たざる可からず。則ち政府當局者が情を矯めて沈著顏を作り相替らず前途遼遠の極り文句を唱へ。國民の自然的なる喜悅と和すること充分ならざりしは無理もない。然らば何故に吾等は。開城の聲と與に最早平和克復の期限が豫言通り成行く事を神明から立說された樣に爾く狂喜したり耶。決勝本戰を經ずんば。日露大局の勝敗如何てふ基本が成らざるに。爭かで勝敗を通り越したる講和成立をまで。ココで見越して。平和酒を酌みたりしぞ。

されば乎。其處が即ち形勢に沒心する者と。神機に透徹する者との差別の存する所である。吾等は只だ靈界の消息より推して事境の體用を照破せる也。

人算は形勢を辿り天算は神機を司とる。

予はコノ時、神機の愈〻明白なるを驗したるが故に。形勢は跡から跟隨て來る者として安心を極めた次第で有る。

神機など云へば抽象的の語で。亞細亞的哲學や兵學の空漠を聯想する人も有らむなれど。予は之を現實的なる表徵として取る者で。決して理上の空談に非ず。

『神機』とは何ぞや。曰く。

神機とは『元神』有りて或局部に投映し來り乃ち活動を顯現するソノ初發的表徵を謂ふ。

元神とは。神靈が或限制されたる局面と、或限制されたる時間とに於て發露する當事を指して爾く名つく。即ち普通に思惟する個人の靈魂てふ樣の者が胎內に宿る場合の如く。宿ると同時に胎兒成形の原機が成る。其姿は各事各物に通じて等しく其である。

平易に詳解すれば。神機とは物や事の『め』である。元神とは『めの精』である。

『め』とは何か？

曰く。實物の上にて謂へば。木の芽＝人間の目＝蛙に成るお王杓子の目＝蛙の目。世事の上にて謂へば。家運の芽が吹いて來たと云ふのも。とんだ目に會ふたと云ふのも。齊しく『め』である。

『め』は活動（生存）若しくは靈的行路（運命）の初發的表徵＝活てふ者が一番先に顯はるゝ當相＝で有て、例へば雛鷄の前生たる玉子に鷄の靈魂が宿りて、ポツリとしてギヨロ〳〵したる俗に所謂卵子の白身の『め』を成したらむ其時こそは、卵子の元神が此『め』に寓してヒヨ子迄の活動の原機を此に成就した者で有る。即ち元神てふ者の當體は捉へ得ざれども。當體の在る處の當相は。即ち此『め』である。而して此『め』に寓する元神が其儘鷄の全生命に迄プロマイド（寫眞術の用語、引伸しの意）されるのである。

繭を絲に繰るに。茹でて箸の先に搔繰れば。絲の『め』が現はれる、其が即ち絲繰りてふ仕事の一番先の神機である。而して繭なる者は蠶てふ生物の變形的生存たるが故に、蠶の元神は其儘繭の元神として繼續したる者で。其故にこそ『め』に從ふて無限の縷が切れずに繰らるゝ。その微妙さに留意するが宜しい。故に溯つて行く時は蠶の前生たる蛾の粒に絹絲の元神は寓しける者である。

故に神機は元神と幷せて『生存のミニマム』である。其がプロマイドされるゝに從ふて、ソノ構成する當體の形、量、力、作、乃至莊嚴威格は次第々々に增大する迄の事で有る。例へば一握の空氣にも元神あり、是が冷却若しくば壓搾を加へられて緊縮の極度に達しつる時は其生存のミニマムで有て。更に最高度の熱度に依りて膨脹の極度に達した時は。其は『生存のマキシマム』である。而して本來一體にして增さず減せざれども。唯だ是れ元神が原機と共にプロマイドされると否との相違ぞと信受せよ。

日露海軍戰に於ける『日本海軍の勝利てふ事』のソノ初發的表徵は旅順閉塞の大業決行が其でありた。此一事が先づ敵作戰の氣勢を死型に陷れつ。我海軍に『活のめ』を與へた者でありた。而してソノ元神は即ち我微々たる一佐官廣瀨武夫の心身を藉りて之に寓したので有た。即ち閉塞事業が海戰の勝利の『め』で有た如くに。彼はその『め』の『精』でありた。即ち廣瀨其人は神機の主體たるべく身心が其に冥合し融一して。彼れの存在ソレ全部が『日本海軍の靈魂の縮寫圖』で有た。

抑々東鄕大將の蔭には、兵機入神の參謀島村氏や秋山氏が在りて。運用の妙を致したので有るが。元神に融合せる東鄕平八郎有てこそ。神機妙算の秋山や島村が何の障りも無く呼吸が東鄕と合ひ得たのである。即ち東鄕は。元神發露の當相たる所の有らゆる神機に對して主體と成て居た者で有るから。海戰に於ける澤山な『活のめ』＝即ち各時各處に起る無數の神機＝をば我海軍が一も逸すること莫つたので有る。活動の表徵に跟隨し來る所の形勢てふ末節に沒心せずして活動の主體即ち元神に直入したから。孰れの『め』にも全中したので有る。而してソノ數多き『め』は。一個づゝに見れば、其時每に海戰勝利てふ事の『生存のミニマム』たりしかど。扨その『め』を繰つて繰返して。幾個も〳〵又何處迄も〳〵積極的に進行して。其都度生存がプロマイドされて。竟に其極點即ち生存のマキシマムに達せし次第で。

該マキシマムは即ち終局の全勝＝日本海海戰の異蹟、バルチック艦隊全滅＝てふ破格滅法言語道斷全く以て神業に等しき大事相こそ其で有た。が。シカシ。この大勝利の最先の元神はと問へば。旅順閉塞決死隊に歸する。而してソノ又奥に溯りて詮議すれば。日露戰ソレ自身が天命に出でしと覺えて。モー神さまの領分に入つて仕舞ふ。

方に知る旅順閉塞てふ事が爾後の八月十日黃海海戰に於けるは。恰かも卵子の白身の中のポツリギヨロ〳〵が雛鷄に於けるが如く。八月十日にはチヨ〳〵と啼いた者で有て。而して其は日本海海戰に及びて。天地を一聲に叫破すべく羽搏するに至りた者である。

故に生命に出入無し去來無し亦大小無し。旅順閉塞決死隊勇士一統が捨し身命は。却りて海軍勝利の神靈を閉塞事業に投映して。その『活のめ』を成就せしめ。海戰勝利てふ靈的行路を此に啓きし者にして彼等の身命は小なる個體の身命ならで其まゝ日本海軍の全部の生命と同化して事上に顯現した者で有る。而して廣瀨武夫其人は。最も著るしく閉塞隊勇士一統の氣魄を代表するが故に。『めの又め』として最も鮮明に意識され。玆に軍神の名を獻げらるゝ所以が成就したのである。

『元神』の戰事に於ける實例は。先つ右の通りで。神機が事件の『め』たる所以は。生き物の活動に於ける『め』と異ならずとして予は扱ふ者である。故に旅順開城を以て平和克復の『め』なりと爲すは。臘梅に咲く小さな芽の中に霜雪の精と春風の情とを同時に感得すると同じい。

缺猪口から日露戰爭の縮寫を感得す抔云ふ事は。當世の科學及び宗教から見れば。誠に突梯至極、滅法千萬の沙汰であらう。けれども。神機以上更に神機の本體たる元神を事上に捉へて。事物を併せて生命の根元を問ふ時は。是が可能である。神機以上直ちに元神を知りて身心之に冥合し融一爲しさへすれば。元神發露の當相に過ぎざる所の神機の如きは。決して二に尋ぬる莫くして而かも自得される。何となれば原神は主體にして。神機は其れに伴ふ表徵なれば。我の影を我が知ると同じければで。而して元神は。本來唯一乘の靈魂が局部に顯現したる者に過ぎざるが故に。日露事件てふ者の靈魂も。一個人間たる天眼生の靈魂も。タネは一つで。體は融合すればで有る。

故に天眼の元神が誠に健全にして能く靈魂を自照する時は。日露事件が日露事件を自照する儀で。預言も糸瓜も有た咄ではない。石油庫に火が點いて石油庫が明るいと石油庫が言ふ樣なもの。去り乍ら此事件の本末終始を究竟して後ならでは自照やら他照やら證據の立たぬ次第で。其は日露平和成立後に爾云ふのみであるが。若し夫の旅順開城の折に。如何にして此は平和克復の『め』ぢやと確かめ得し耶と云ふ段に相成ると。其は名醫が重症を診斷する場合の如しと答へる。

個體に寓する生命てふ者の體用を諦觀せよ。『元神の同化作用』及び『神機生滅の因果』てふ事に達悟する時は。一代の國手とも爲り得れば。兵略家とも爲り得る。大商人とも爲り得れば。大發明家とも大導師とも大經世家とも。好む所に從つて爲り得ること受合で有る。

諦かに個體の生命てふ者の本相本用を觀取せよ。草木の種子が地に入りて嫩葉と割れるのも。女が月經の留りて胎兒を成すのも。ソコに生命の發する神機有て然る所以は相異なる莫く。又手に手を盡して植木が枯れるのも養生を極めた人の死ぬのも。生命に離れ掛かる神機有りて然りてふ事は。人々が其と言はるればナル程先刻承知なりしをと氣の附く沙汰たり。

世俗の語葉に。あの人は別段何とて病症は無けれどドーも影が薄いと云ふ事あり。影が薄いと云ふのは生命の消長には神機有りて左右する所。その大切な神機が死の側に向いて居るてふ事である。

又庸醫等が見て以て不治の難症なりと爲し當人も亦死を待つ時に。傍ちより名醫來りて診斷し。病は重しシカシ助からぬ事は無しと告るのは。是れ名醫は病の形勢に沒心せずして直ちに死生の神機に透徹するからで。對症機能を成すに足る元神の存在を確認して爾云ふ次第である。

病勢の重る時には。或期間までドー手を附けても致し方の無い者だが。扨病勢にも期間の關節が有て。一つの節を越すか越さぬ乎と云ふ處に至りて。茲に轉換の機を看取し。乃ち精を極めて適藥を投じ。以て元神の萎靡を局部若くは全體に救ひ。ウンと一つ其處で喰止め得る傾向に迄最善の力を致す。醫藥の効は只だ其れ丈のもので。病が治るてふ事は。局部なら局部で、全體なら全體に於て。元神が自らその主體を支ゆる樣回復すと云ふ意味である。

抑々生命は總身中の者たる故。元神は局部の總てに在り。而して限制したる各局部と時とに於て。元神が主體たり得ざる故障＝即ち變態＝の生せし所をば病症と名づける儀にて。病症は即ち靈魂の一部的閉塞若くは不透明てふ事なり。故に开は煩腦の實體と謂ふも可なる咄で。世には局部の元神が閉塞されし爲めに。全體の靈魂までを其に誘はせ。以て同化作用を惡い方に逞しくせしめるのが甚だ多く。好んで生命の『め』を死の『め』と交換するが。是れ即ち重症を自作する神經家で。死神の同伴者である。

抑々血は生命の寓なり。體肉の素なり。ツマリ血が骨とも髮の毛とも爪とも爲る。ソノ血が細胞から成立つ通りに。人體の全部は細胞から成立ちて居り。食物が消化すれば細かに微かに圓い粒の汁と爲りて毛細管を潛りて細胞に同化する。是れ即ち食物をば生命に同化する所以である。而して血をば空氣が清淨にする。即ち血も用を成した跡は粕に成て濁る。ソノ濁れる靜脈の黑血をば。肺が引受けて空氣中の酸素が濾過て。黑く成た炭素を燃して空に還らせて。健全に仕直して肺臟から心臟に戻す。而して心臟は又も其をば動脈に傳へてドキ〳〵と送る。其姿は健々不息。同じ事を繰返しつゝ。繰返す中に無量の『め』を各部到る處に藏す。

扨血球は草木の種實と異ならず。種實が最先外防線として厚き皮若しくは刺(栗抔は其なり)を有し。要塞內防線として種の殼(胡桃等は其なり)又は綿の樣な肉(ザボン等は其なり)を有し。其又中に胞を作り。胞の中に又胞から出來た肉を置き。其中心に種子が座る。爾して種子の中に天神樣即ち核があ る。核の中に又候『め』が有る。其通り血球の中には核や仁が有て。其に活素を包含して在る。畢竟す

るに草木の根も幹も皮も枝も心も水を吸ひ揚げ氣を呼び込んで生活する丈の用に過ぎず。其目的はと云へば花を咲かせるのは一寸の洒落で。實を結び種を固めるのが本事たるに歸着し。彼の巨大なる根幹枝條一切は。ッマリ種實を護る要害たるに過ぎず。其種實も亦段々究むればホンの微細なる天神樣の要塞たるに外ならず。即ち生命は根幹、枝條、葉、花、實、皮一切に亘りて在れども。生活てふ事の『め』は種實てふ物の內部の最奥の實體たる『め』と融合す。生るる時が爾で。生れてから亦爾である。其と同じく。人間の生命は身體全部に渉れども。生活する所以の『め』は血液の赤い素質＝即ち血液を組織する細胞の中の核や仁と相一致する。

然り而して。この仁の中に寓する生素こそは眞に生命で有て。其をば予は名稱して元神とは云ふが。そんなら身體全部の生命は如何と云ふに。其は生命のマキシマムたる而已で。生命は比量分別の範圍を超越する靈物にして。大小方圓廣狹等の差別を絶するからこそ生命たる次第たれば。元神は即ち活動の未だ著大ならざる間に爾かく名目する迄の事で。其身體は總身の全生命と異なるなく。只だ其ミニマムに在る故微小なる如く妄感さる次第。

藥脂氏は接ぎ木と云ふ事を爲す。其は甲樹と乙木との生命に二ッ莫く。只だ生命の顯現したる姿に相違ある而已故に出來る事で。樹木の生命即ち靈魂が別種各別の者たらば斯く感應し同化する事が協はざる道理ならず耶。

爾れば人間てふ者は元神を包む所の一個のふくろで有る。

而して元神の人體限りに於けるマキシマムは即ち世俗の千切れる各人私有の靈魂にて。人體の局內に於てこそ此に止まれど。更に之をば積極的に做し將ち行けば。更に第二のマキシマムを成就し第三第四と段々桁が登りて。プロマイドの輪廓が擴延されて行き。家庭の精神と爲り。國家の元氣と爲り。全世界の魂魄と爲りて際限無し。是れ即『元神の能働的同化作用』にして。元氣の主體は偏に此に在るのである。見よ。家庭と云ふは。一のふくろで有る。其中に主人や妻や子や兄弟が恰かも人體に於ける局部有機機關即ち肺臟や心臟や肝臟や手足の如くに元神を寓して居る。即ち椀白小僧抔は小指の如くチョコ〳〵働き。おさんと流し尻は臀部に該當し。玄關は頭部に當り。座敷は胴に當り。借金取は神經痛に當り。勉强運動は酸素に當り。入込む新聞や書籍や客人は世間空氣の呼吸機に當る。畢竟家庭は巨大なる胞なり。活素は人に在り。人が細胞の格で之を組織す。

船舶に生命あり。

汽車にも火鉢にも神社にも石にもゴミにも生命有り。有機、無機、有情、非情、非非情の差こそ有れ。眞に事上に悟證する時は。存在は必ず生命を伴ふ。生命無き存在てふ者は。決して之有らず。

見よ。船舶を行るに。蒸汽力を原動力とする傍ラに。釜も釜焚も舵も帆檣も甲板も運轉士も貨物も。之を總括みて船舶が一體として活動を遂げる。ソノ時には。以上の各要素は。孰れも船舶を組織する

元神の所寓で有て。局部の活素は全局の生命と同じい。ナゼと云ふに。若し船底を綴ぢる釘一本＝平生から馬鹿らしい無意味無能無生命の樣に扱はるゝ＝釘一本が此組織の要素から脱して。イヤ失敬、僕は御免を蒙る迚。ボロ〳〵朽ちて。其處から海水が浸入して。此局部の元神が中廢したならは。扨其時大洋の中央で。其とは知らず益々沖へ乘出したとしたならば。如何でござる。場合に因ては船舶全部の沒落を來さう。即ち船舶の生命が絶やう。

故に無心の船舶も亦元神を寓せるふくろにて。其中の全部を括めて生命とは爲すなり。而して元神たる所以は船底綴ちる針一本も頭腦の位置を占める船長も同格なり。

此事實より推せば。則ち汽車も火鉢も各自に生命を保有する所以は同じきものぞ。と知り得やう。而してふくろの意義や人間と異なる莫し。要は元神に在り。

『感化』てふ事の本來は。一の元神が他の元神を或程度まで左右するの謂にて。左右するとは。兩個の元神が一旦融合しつゝも。一方が能働的に主體を保ち。他方が所動的に客體の位置に立つ。ソノ差別相より假名する儀で。實は被感化の方面を主體として觀れば。感化者が却つて自ら感化され居るのである。

例へば唐辛子の生ふる畠には煙焔が產する。而して二者の成分が同じき故。唐辛子を好む人は性質までが荒びて煙焔に類して來る。砂糖や菓子のみ好む人は性質も自ら和柔に歸し。時として甘い子と爲る。之は煙焔質や砂糖から謂へば。其人を已レに感化した者であるし。又食ふ方より云へば。我體質內に煙焔や砂糖を感化し了る都合である。

又例へば。嬰兒に食餌を含ませるに。親は先つァーと口を開いて感化の方便に供する。嬰兒は之を學びて燕子の如く赤口を開く。此時親以爲らく我は子を感化すと。而して親が自ら口を開きたるソノ瞬間に於て自ら子から感化されたのである。親が子に爲るから子が親に爲るのである。學校の先生達が多勢の腕白を扱ふ御苦勞誠に感謝すべしだが。先生達御當人に在ては自ら少年少女に爲つたッモリで敎へ導くが故に。局外の想ふ程には苦勞で無い。是れが即ち感化は片爲替にあらず簿記帳尻の如くキッと雙方が合一し居る所である。

右の如く感化てふ事の存在を確認し。感化てふ者の本相を識得せば。其時は。一個體と他個體との元神一旦融合して然る後に比較的主體たる方が即ち能力者で。比較的客體たるが所化者たる迄の事で。能化、所化、實は一物たりと諦觀し得む。而して感化の最も精微にして倏發的なる場合には人誤りて不思議がる次第で。卒然としてメスメリズムの藝抔に出會すれば。平生已レは其と異ならざる感化の仕合ヒとてふ事を呱々の聲を揚げし時から。絶へず時時刻々日日歲歲演じ居りて。珍しくも何も無き所以をば顧みるに遑あらで。如何も不思議ぢや妙ぢやと舌を卷く。

眞言秘言、不動の金縛りや火渡りの術抔は固より可能的である。

ブラックと云ふ英人の落語家はメスメリズムの藝人で。高き梢に棲る鴉をば苦もなく睨み落す。長崎の『雀辰ッ子』と云ふ七人は。雀を見込めば必ず外さぬ。

帝國大學に於て。博士連が某メスメリズム家の實驗を請ひしに。試驗の相手たりし五人の學生は。黑闇々たる室内に難澁なる書籍を投與へられ。平生ならば眼を明けても讀み難き該書をば。催眠中に五人が五人揃ふてスラ〳〵朗誦せしとの事。

是も可能的である。

右樣の藝は。當世はメスメリズムと云ふ名稱を有するのみで。未だ精確にして概括せる定義を下し得ざる樣覺ふれど。實は不思議でも幻怪でもなし。

『各個體は元神の所現なり』

と知らば。元神の融合せる時間に於ては。一個體が他個體を支配すること自在なるや當然なり。火渡りの火も鴉も闇夜の書籍も各個に元神を有する。ソノ元神が各演藝者の元神に融合して演藝者が主體と爲るから其時に右樣のワザが成る。即ち開處誦字の場合には。催眠を施す人は被術者の元神を書籍の元神に融同せしめ。被術者を藉りて自ら朗誦する同然たらしめるもので。コンナ事が不思議ならば。之を不思議がるに先だち。宜しく淫水が人間に成て種々無量の藝を成すのは猶更不思議と氣附くべき筈也。人は平生自ら意識せざるなりに身外萬法の感化を受け居るもので。時代の人は何時の時間にか代の方式に合ふ樣變質され。又氣候風土食物等一切の圍繞物から感化され居る者で。本來が元神の同化作用から成立つ者である。

萬物萬事に元神在りて其が他の個體と始終融一するが故に。各個體は斷へず相感化す。這の無量の感化は即ち萬有の活動なり。故に元神以外に『存在の隔相』を認むるは單に活動を認むる者にして。活動の主體を執りて謂ふ者にあらず。主體は彼我融合の元神なり。一にして多にあらず。

能く這個の處を照破し了れば。其時初めて生命問題が解釋さるゝ。

人々の通常思惟する生命は。生命に非ず。身命なり。體軀の有する命數なり。汗は大根や南瓜が品に安處しても。腐る時には腐ると同じき命數なり。

この體軀の命數をすらも加護す可く體軀を最善の狀態に置くのは。法華行の功德なり。シカシ此は俗衆の最も歡迎する所たるに拘はらず。實は未節なり。眞の生命に觸接し靈魂を感得せる人は。體軀の命數を問ふなどは。是れ恰かも春風を待たで碎氷船を詮議する如しと爲す。

爾れば旅順開城てふ非物的にして而して事的なる現象は。一個體で有た。ソノ一個體に寓する元神は。『日露戰爭の本末終始』てふ總括めの事的現象なる一個體のソノ元神と。同物で有た。是に於て同じく他の一個體たる予の元神が。旅順開城の元神と共に融一せば。則ち其まゝ予は。日露戰爭全部の元神と亦融一する所以で有た。

予が元神は。二〇三高地最終の勝負の時、攻圍籠城兩軍と同じく。絶對的事境に歸せる次第は曩に詳述せる所の如し。然るに予の靈境が其歳の除夜に開けたる通りに。旅順方面も除夜の三時に要塞の鼻たる望臺が陷り。予が初刷の出現と與に。開城の議が決した。而して之が平和克復の『め』で有りし事は。予自身が『めの精』と融合せし故。其まゝ其と照破した。

常陸丸一件の時抔は。蒙晦なる衆俗はアワヤ死神に誘はれむと爲した。重症を自作して『活のめ』と距たらむと爲した。けれども幸いにして軍人の元神旺盛にして留國の懦夫を生命の傾向に同化し得て。段々マキシマムの方に導いた。

斯くて旅順攻陷の遲々たる爲めに。國民は再び死活如何を氣遣ふ陰境に沈み。危ふく神經病を起さむとせし絶頂に。開城の飛報天外より來りて神機を感得せしめた。實に此時は日露戰の海陸を一貫して日本の『め』が吹いた者ならずや。

かるが故に方に知る。對露戰事をば日本てふ生物の生存上の疾患と觀せむに。對症の適樂は一に元神の能働的作用に基かざるは莫かつた。但し昧者は神機の分際に屬する精神的効果を讀み得ず。彌次馬的觀客が自己の坐りし方の力士を負する如くに。陸軍を語る者は陸軍の事のみ喋々し。海軍を語る者は海軍のみ褒め立て。只管戰鬪の形體を追ふが故に。一個づゝ千切つて我物顔する癖有り。而して海軍も陸軍も各自其戰捷は。戰鬪面全部に對する精神的功果を同じくする者にして。我が日露戰鬪の主體と爲るべき樣、我の元神を能動的に發展せしめる者たるを知らざる也。

元神の能動的發展とは。例へば茲に醫道と醫術と兼備はる一人ありて庸醫の治し得ざる難病をも治するとせよ。其人は必ず先づ患者の生氣を手繰つて我方に引附ける。即ち

所治者(患者)と能治者(自己)との融一せる生命に於て。自ら其主體と爲り。乃ち或は精神を以て或は醫術藥餌を介して。一向專念、我に歸依せしめ。由りて以て己れの元神をば患者に移し。患者の心身を全く能治者たる本尊に感孚せしめ。局部の元神不良、一部器質の疾患をば。我の元神に同化せしめて。以て恢復の原機を爲す者である。

同化せしめると云ふのは。即ち主體たる元神の能動的發展である。

爾ればなり。奉天の場合に於ても。我陸軍は滅法なる威烈を揮ふて露軍を傾覆せしめたのは。日露戰てふ疾患に重大なる外科手術を施したもので。此時にグンと注ぎ込みたる生氣は。いかで陸軍海軍の差引を謂はうや。正しく我軍人一統の元神が日露戰の主體と爲るべく能動的發展を遂げた者である。即ち敵國と云ふ疾患は之に引附けられて。即ち同化されて。バ艦隊急航の決斷てふ所動的元神(能は主、所は被)を露呈し。恰かも强壯者が右股の横根を切開した爲め。左の股へも横根を誘へば。今度は其さへ切解すれば。全身の梅毒が爲めに治せらるゝ如くなりた。蓋し毒を內臟に引込ませざる簡便法は。成る可く速かに病毒を存分發せしめて其をチョン切るに在り。奉天戰は即ちバ艦隊てふ危險なる潛毒

を誘出せし能動的元神にして。三月十日の此目覺しき荒療治を得ざりしならば。トテも〳〵五月廿八日の唯だ一舉に病源を除く機會は來なかつたで有らう。然る時は戰爭はダラ〳〵延びの、氣はムシ〳〵の。國はヂリ〳〵貧乏の。東洋日の出初刷預言丸外れの。到底は藥が利かぬ永病人と成た乎も知れない。

故に陸軍から謂へば。陸軍が海軍にハ艦隊全滅の功名を爲させたのである。各戰鬪の元神的關聯を深く精しく味へ候へ。精神的効果を嚴しく締上げ候へ。是れ日露戰全部の靈魂に導かるゝ手引きなり。然る上にて神さまが見へる。

以上の如く信解し來りて。『事物同靈』の眞事實を應用する時は。日露戰爭の局部に顯はれたる元神は其まゝ平和克復迄倣し將ち行く所の同じき靈威たりと知られやう。旅順開城が啓示せし元神を感得する程に。人有りて自己の靈魂を自照せば。其人は此時に於て何等の疑惑もなくモー平和克復は手の中に在りと照破する筈。

這般の役廻りに予は生れて居つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

三十八年國家大開運の『め』を。其正月早々に確認し得て。我身命の尺が伸びつる心地しける崎陽の一法華行者が。元神躍々として。公衆の祝捷會に臨み。野營新聞を會場に發刊して盛擧を飾り。又主唱して篤志家より募れる清酒三十樽を。出島新開地に列して。群衆の隨意自酌に供して。ケロリ數分間に埒明けさせける等の壯快を博しけるが。其等の樂境も旬日とは續かざり飛。旅順の降伏將士卒は。大連より長崎に運ばれ。長崎に於て宣誓式を課せられて解放さるゝ事と爲りければ。我等は新聞社としての職業上から目の舞ふ繁忙を來した。而して一月十二日、第一回の上陸降將を見てより。十四日、ステッセル將軍上陸の時及び其後數週間は。彼等に關する事實の探訪に供されて。一刻の緩みも無かつた。斯くて當時の社員雪柳生の深刻精妙なる探訪術は。全天下の記者を驚倒せしむ可く成功して。『旅順開城將官會議活光景』その他戰史上に不朽なる活材料は。我東洋日の出紙上に現はれ。八方に轉載さるゝ光榮をば領した。實に故矢野二郎氏の如きは。該記事を目して戰時文章の絶品と爲し。我社の精力を歎稱して措かず。特に『實業の日本』に命じて是が轉載を我社に請はしめた程で。記者としての愉快は尠なくは莫かつたが。奈何にせむ、予は記者たる記者に止まるソレ以上の精神的修行を本分と立て。旅順降將の意氣、風格、識量、膽略の眞處を此際に識破了する事に向つて。全幅の氣根を供しつゝ。漸くにして彼等の輪廓を知りて。內容に進めば進むほど。痛烈豪壯なる彼等の氣魄と力量とが。一段一段と我心身に壓し冠せ來る樣成行き。竟に何時とも知らず我は彼等に呑まれ了りて。喟然大息。

ア。今更の事ならねども。露人の精力は畏る可し。露人は敗れしとて。彼が元神は健剛不休

なり。日本の軍人の特有の長所は長所として。其短所を思へば。彼等に露人の爪の垢を煎じて飲ませ度やうの處さへ無きに非ず。軍人には限らぬ。文官も新聞屋も。官僚式小細工の萬歳熱ばかり恃む輕薄ヵ加減は何事ぞ。

此分にては。向後の戰局面及び外交面は果して從來の順境襲ぎて。我の豫想通り平和速成に歸するや否や疑はし。不撓の魂性。不盡の根氣、是ぞ露人の本領なるに。五月中に戰局が收束さるなどはいかで人間として想像し得可きと。

我は日本人としての私小なる自負心と離れて。正直、掛直なき精力の比較を執り。瞿然として懼れ。俛乎として自ら屈した。

劈頭に我等は。籠城露軍の模範聯隊と目されし。第五聯隊の聯隊長トリチエコフ大佐の述懐を聽きて。露人の武士道に感激を深ふした。滿腔の感慨は大佐の口より發して曰く。

我々の要塞は夏九月頃一たび精力を挫折せむとし。各隊中には隊を擧つて脱走せむと欲せる隊も無きに非ざりし。而れども貴下よ。我々に同情を賜はゞ。主としてステッセル將軍就中ステッセル夫人の愛撫を紀念せよ。

勿論。軍中の將士悉く心腹せしは。ステッセル將軍の外に。コンドラチエンコ將軍有りき、將軍の死は。確かに我軍の致命傷の一ッなりき。コンドラチエンコ將軍戰死の報傳はるや。旅順中の兵士は。一人殘らず皆泣けり。共に聲を放ちて號泣せり。

而れども。ステッセル將軍無かりせば。我要塞は。夙に勇猛非常なる日本兵に奪はれつらむ。

隊士卒は。糧食の不充分と、極度を超たる勞力との爲めに。今宵なりとも良き機會あらば投降せばやと。念を動かす。恰かも其時に及べば。早くもステッセル將軍夫妻が馬上にて駈廻り。各砲臺を巡回し來る影が見ゆ。

將軍夫妻が馬より下りて。一砲臺毎に。シカモ微小なる副砲臺の守衛等に對しても。一箇毎に巡視し。士官兵卒を問はず握手を與へ。『汝等の勞苦察す可し。汝等はザールの爲めの汝等なり』など。慰撫すると。如何なる日と雖ども缺きしと無く。兵卒等はステッセル夫妻の姿を見。温かき握手を受くる一瞬間に於て。恰かも咽喉渴せる時に冷水を得たる如く。勇氣を復活し。一分間の前迄の思慮を抛ち去り決然として再び銃を執るに至る。是れ毎日の事なり。

ステッセル將軍は。南山の戰に脚部を負傷したり。而して士氣を損せむことを恐れ。傷は繃帶の儘靴を穿つこと平日の如くし。翌日より騎馬にて巡視したり。

將軍は。足の傷容易に癒へず。落馬せしかば。竟に一時は兩脚を馬鞍に結び著け。落馬を防ぐに至れり。

將軍の馬鞍は。劇しき乘廻しの結果として。破れて仕換ゆること六回に及びたり。將軍既に斯の如

きが上に。ステッセル夫人は。良人と與に足まだ馬に跨がり。灰色の夏服の儘にて。毎日各砲臺を巡回し。大抵はコンドラチエンコ將軍と三人同伴にて來りし也、と。

蓋し降伏せる籠城軍が。陸軍は將校五百九十六。下士卒二萬二千四百三十四。海軍は。將校三百四。下士卒四千五百。合計二萬七千八百餘。其外に。傷病非戰鬪員を併せて五萬二千が旅順捕虜の總數たりし事を回顧すれば。攻圍軍の功績たるや絶大非常であるが。彼我の元神の消長を精算する時は。誠に細微を極むるドン詰りの處に於て。恰かも小數の((.1428.57))に對して。((.14.2857.1))と。僅かに極微の1だけが日本の方に多かりし相異に過きじ。此極微の1は靈界に於ける『元原的一』と融合したりければこそ。日本軍は人力以上の權威を帶びつるなれど。唯だ其れ丈けなりてふ事に留意せずに。日本軍の勝利の形相をのみ看て以て矜負するに至りては。增上慢の天罰怖る可きは勿論。萬一、今後に起る滿洲本軍の決戰に於て。這段の極微なる1が我に與みせざらむには。危しとも言ふ許りなし。

『夫れ人の元神を讀むてふ事』は活學の隨一方法なり。書は何ほど讀みても。又文は何ほど書くとも。我の精力を以て他の元神に感孚するに非れば。死文なり。死書なり。當世の學者、文士、記者等概ね自己の精力てふ事を置忘るゝ故に。他人の元神照應する所以のタネ無しにて。從つて旅順開城の事相をば一丁前に聞見し書きも爲しつれど。彼我兩軍の人に依り表徴さるゝソノ元神をば心鋭に投映せしめ得ず。筒中に流露せる敵人の不朽なる精力を文に托して後代に傳ふる抔は。到底望む可からず。縱かに之を能くせるは獨り我社有りし而已。

降將來崎の當時。予は實に聽けば聽く程。露人の精力の淵源深く且つ遠きに歎服せり。豫てより時流とは見を異にしたれば。露人を侮る事毛頭之無かりしと雖ども。親しく血戰揚りの雄群を見ては。感更に新たるを覺へ。彼等が疇昔の恨事を意に經ざる如き風概を持しつゝ有の儘に物語るにつけ。『日本人は勝た。此上尙ほ勝たう。シカシどうも小さい處がある。奥行の短かい所がある。一時的の處がある。銘々天狗の心が强過ぎる。其で勝ちもするが。扨戰時平時を通はしたる永久の角逐に於ては什麽ぞ。又武士道とか軍人精神とか云ふ者は日本人の專賣特許の如自ら許せども。却々露人とて斯の通り忠勇なる所以の根抵を有して居る。爾すれば所持の品物が五分々々ぢやに因て。畢竟は根氣の强い精力の厚い方が終局克つ。扨然る時には。敵人は却々此後の奉天戰を經ても屈し相にも無い。バ艦隊は無論來る。爾して海上決戰に及ぶが。ソノ又後に講和に迄彼が我を折るや否や。どうも露人の精力を考ふると。講和の時期が六かし相にしか思はれない。況んや一方日本人は勝ち誇りて。ウラル山迄も攻め樣と客氣が增す。而して新聞屋は毫も敵人の精力てふ事を讀む心無くて。日本人の力を知りて天力を解せず。乃ち相替らず名譽の戰死を彰揚する而已で。大和魂萬能說を繰返し『軍人全能』の誤信を煽動するに於ては。敵人が少しく我を折るにせよ。日本側の要求が露西亞側の讓歩と折合ふまい。然らば平和克復の時期や容易に必す可からず、ハテ扨一七、五五、の數も少ゝ怪しく成はせぬ歟』と我乍

ら心怯るゝ迄に。予は露人の精力に感歎した。當時予は這間の感慨を在京の一友に寄せしが。其中に左の數節が有た。

▽宇宙の靈と精とに觸接する機會ある者は天の寵兒なり。

▽予は平生書信を送らず送るの要なければなり。新聞紙は予が生命なり。心肺より送る呼氣の蓄料なり。此外に一物無し。天地も亦無し。

▽凡そ愛國と云ひ忠義と云ふ類は。末節のみ。而かも是れ自ら臻り己れを導く所以の楷梯なり。天に迫り行きて。初めて楷梯を除却するも可なり。能く天に迫るの大氣節無くしては國も論も無用なり。死も戰も豈利も共に徒爲のみ。

▽予は露國敗將等の沈鬱にして玄深。簡勁にして無私なる氣風言語情想の總てよりして。實に痛刻、骨髓に入るの教訓を讀み得たり。

▽予は誓つて曰く。ステッセル等は東洋日の出有るが爲めに。長崎に來れり東洋日の出の運氣が彼を吸引せり。

此書信の要は。日本魂と云ひ連撻と云ふも。幷は相對的の沙汰に過ぎず。戰爭の終局は。絶對的の者に埃たざる可からず。然るに幸ひにも我等は旅順降將を透はして絶對的の者即ち宇宙の靈威を讀み得たり。是れ即ち天が我等を寵倖して特に宇宙の靈と精とに觸接せしめた者ぞ。乃ち己れが之を忽疎に附せざる戒めに供するぞ、、、、と云ふ意味なりき。

斯くて予は。一月中旬より二月中旬までの間は。露人の精力を我心鋭に投映せし盡さむ爲めに。心身全幅を供した。爾して投映し盡す迄は。平和克復の期日が頗る疑はしく成り。又もや我心から靈魂を蝕されて。どうも怪しいと思ふ其煩惱の塊まりを作つて。煩悶し苦腦すること。鈌猪口から巽の一字を握りて而して解釋に苦みし前年の冬の如く逆戻りした。アー凡夫なり。死活を出でて復た死活に入りて。確かに本尊の照破が一七、五五、を證せしよと一旦信じ乍ら。又候斯くは疑惑し來ることの淺ましさ。去り乍ちココが却つて自行を積む道行きなり。予は腦の打割れさうに及びて。後自ら慰安して以爲らく。神物人の靈威は最早靈驗を與へて。予を迷ひより去らしむ可し。其れ迄苦むが我の役目也と。果然靈驗が顯はれた!!

如何にも心身の保ち得ざる極點に及びて。絶對的事境は絶對の靈威を顯現した。予は正しく判然たる靈驗を握り得た。一七、五五を現境に感得した。實に此度は。鈌猪口の鷄の脚と。剛硬き糸底とが。一七を啓示した樣な謎的の者でない。全く一七、五五を實物から現證された。

該實物は。今も長崎市中に現存する。場所は何處で。物は何?。

* * * * * * * *

旅順開城前後の籠城軍の活光景から引附けられて。予が感激の高潮に呑まれし所以は。普通の

意義を以てする武士道とか元氣とか。云ふ料物がロスに著るしいから迚。其に予が呑まれたのでは無い。ソンナ物は。予が膽玉に。通り違ふ美形の與ふる程の微震だも與へない。予は武士道以上。彼等の氣魄直ちに天に迫る處に對して。最も痛烈の感激を發した儀で有る。見よ。ステッセルの幕僚マルテンコ中尉の言動。如何にスラヴ族の啓天的眞處を表徴せしめしぞ。本來マルテンコは。大學校の二つも卒業し。國際公法に精通したる文道の傑物である。而かも露國の國情に從ふて武官に志願し。好んで微賤なる位置を取りつゝ。實はステッセルの腹心として。極東露軍の樞機に參した人物で有る。白鼠主義の立身を專念する日本後進抔には夢想だも爲し得ざる自任と抱負とは。彼が中尉に甘んずる一點にて充分察し得可し。爾れば彼が識力高邁にして。氣格雄岩。日露の赳々たる武夫を小兒視する機鋒は。言語の表に顯脱して蔽ふ能はざる者あり。げに心憎き癖物なり。マルテンコは言ひけらく。

▽戰爭に關係せる者共は。血と肉との問題＝占領と奪略との榮辱＝のみ念頭に置くなり。即ち彼等は言語を識る野獸なり。旅順籠城軍中、或は攻圍軍中、幾人の軍人が。果して斯かる大爭鬪より。上帝の冥示せる人類の義務＝寧ろ兩國民の責任＝を研究せる者あり耶。

彼は。斯くて日露戰爭を神聖視す也。彼は執れが勝つ負けるの問題に超越して。戰爭てふ事は勝者敗者共に天に對して責任有りと斷定す也。力の上に道を認むる也。故に彼は一歩を進めて語りて曰く。

▽籠城攻圍雙方の軍人等は。旅順の開城陷落は。總ての問題の終點と思ふなり。而かも余は。眞正の問題は旅順陷落後に萠せるを信ず。

▽余等は何が爲めに蜜柑を喰ふや。蜜柑の味は。厚き皮を剝ぎし中身、其又中身の薄皮をまで剝ぎし所に在るなり。

▽故に眞正の領土擴張は國家中心力の强基に在り。地域の大小は念慮に置く價値無し。斯く言はゞ。日本人は余が敗北を蔭庇する强辯なりと笑はむも知れず。笑はゞ宜しく笑ふべし。今日笑ふ足下は明日笑はる可し。

彼は。正しく國家興隆の本方を解せり。我輩が軍人萬能の謬想を戒め。戰捷に取る所は。因りて以て發揮せる氣魄精魂に在りて。決して武功の形ヲに非ずと苦言已む無き所以と。彼レの意見は符合せり。

嗚呼日本の好友マルテンコ在り。彼は開城光景を語れと要められて答ふる樣。

▽余等は旅順を足下等の軍人に獻上＝惜氣なく獻上せり。今又足下に其狀景を獻上せよと迫らる。日本人は余等に肉と骨との總テを呈せよと云ふなり。然り。承知したり。名譽を以て承知したり。然れども。マルテンコは一物獻上せざる者有り。其をも獻上せよと云はゞ。無理無法。去り乍ら余は猶太人の如く之を吝む者に非ず。足下と余とは心的交際進むにつれて。其を余は獻上せむ。呵々。と。凄い事を言ふ男ならず耶。

旅順開城の交渉に關し。ステッセルの公法顧問として。マルテンコ中尉が苦心慘憺を極めて劃策縱横

せし顚末は。寔に同情するに堪たり。彼は勝誇れる攻圍軍のビスマーク式なる嚴刻に壓伏されて。到底智勇辯力の四ッ、共に以て此期に及びて施す可き莫く。殆んど往生觀念したる末に。名譽の降伏を實にする帶劍許容一條を拒絶され乍ら。セメテ帶劍の革帶だけも許さる事に迄。潸著たる手際と云ひ魂性と云ひ。勝てる味方の中に心有る人々は。誰か予と同じく露人の精力畏る可しと謂はざらむ耶。

開城の交渉が略成立して。日露兩軍の光景一變せる時の彼が感慨に曰く。

▽露軍は悄然、日軍は揚々。

而れども余は日軍の意氣昂れるを可笑とす。何となれば。彼等は。斯旅順をして今日あらしめん爲めに幾許の犧牲を損したりと爲すや。又露軍が如何なる强勇を示したりと爲すや。實に露軍は降伏を申出せり。然れども是れ日軍の勇武のみに因らざるなり。露軍は日軍以外の强敵即ち糧食等の敵と苦戰せり。此等の敵は旅順籠城に取りて今は日軍よりも畏怖す可き者なりし。顧ふに日軍中、斯感を抱く者果して幾人ぞ。若し一人にても之有りとせば。假令露軍が降伏を申出るも。彼等は相驚めて歡喜す可きに非ず。但し日軍の勇武は天下無比なり。彼等は誠に勇武なり。虎の如く獅子の如し。

開城條件覺書提出の條に於て。彼曰く。

▽余は胸中に沸々として起り來れる憤怒を禁ずる能はず。皆を決して日軍委員の態度を視たり。視れば。日軍委員等は。露軍提出の下書を讀みしものか。將た讀まざるものか。惡く空嘯き居たり。察ふに。彼等は露軍の主張を以て。死刑犯人が絞臺に上るに際し。獄吏に求むる贅澤なる最後の饗膳と思惟せしならむ。余は沸き返る腦を鎭めて。日本委員長の顏を讀みしに。彼は濁りたる眼を四方に働かせつゝ。且つ東洋人獨特の嘲笑を鼻端と唇邊に浮べつゝありき。

此は。彼が人間としての强き煩惱なり。而れども活力は煩惱にも存するを知れ。

彼更に日本軍人の嚴格を怪みて曰く。

▽日本人には『笑』無し。

日本人は如何なる事にても。眞面目なり。笑を解せざるは日本人の特長歟。笑を解せざる日本人の伊知地參謀長が。姿勢を正しての發言。彼の眼。彼の唇。彼の頰に於て。彼の顏面に働く神經筋作用は。列座をして彼の言はむとする事柄の重大なるを想見せしめたり、、、、。

彼が氣宇、恰かも柴田勝家に按摩を命ぜられし折の藤吉郎にも似たる哉。

彼は開城締約の光景を叙し了りて。更に自己の感慨を述べて曰く。

▽君よ。旅順は開城降伏せり。露軍は敗亡せり。日本軍は奏捷せり。余等は至上の汚辱を八ヶ月苦戰の報酬として獲たり。此報酬は。孤軍重圍の中に祖國の名譽を完ふせし余等に相當の者に非ず。然れども余等は之を怨まず。何となれば事實の上に於て。余等の受けし報酬は屈辱なり。而かも精

神の上に受けし報酬は大なる教訓なりき。誘導なりき。君よ。世界の事相は總て輪環なり。因果なり。滿韓に於けりし日露關係が今日の戰爭を生みしが如く。旅順開城の屈辱は他日何等かの母と爲るなり、、、、。

然り。余は必ず今日の屈辱に復讐せむ。復讐せざる可からず。復讐は露國民一般の感なり。爾云ふも。余の意は。日本國を敵としての婦女子の嫉妬の如きを云ふに非ず。此の屈辱の復活は他方面に於てす可く。一の鍵は一の得を求むと云ふ意なり。余等は今極東に於て大壓迫を蒙りつゝ在り。其結果に於ても察するに難しとせず。而して此大壓迫は。此儘に終らず。必ず大壓迫より來れる反抗を生ず可し。時によりては。舊地位恢復の反動と爲り。時によりては補塡(埋め合せ)の反動と爲る。此反動を爲す目的次第にて。余等は時に日本と握手し。時に日本と相爭ふに至らむ。如何なる方法を用ゐても。余等は今日の屈辱に報復せざる可からず。必ず報復す可しゝゝゝ。

ア彼は。秦に亡されたる楚國が。三戸と雖ども秦に報復せむと言ひし境遇に在り。而かも氣魂は張子房を凌ぐ者有りて。而して國家の興隆は中心力の强基に在りて敵の如何は第二の問題なりと知り。女々しき怨恨の心を以て日本人を敵視するならで。自國の反抗力は何處に向ふて勃發するにせよ。相手は別問題として。唯だ自有の精力を惟れ恃むなり。國民性格の主眼を此處に置けば开は本もの也。痛快なる中尉は左の如く談を結べり。

▽人自體には頭と脚とあり。書冊には序文と結論と有り。余の談も亦結尾の一段無かる可からず。君よ。余は旅順開城條件協定の際に於て。余等の想像し得ざりし不可思議の現象を目擊せり。

余は。余等雙方委員の署名調印を終りて。相互に打連れて會見所を出で。會見所前に於て相對して整列し。雙方握手を交換せし時。日本軍委員の背後十數間の處に。日本軍壯年將校數十名が駢列しあるを認めたり。彼等は紀念とす可き雙方委員の握手を傍觀しつゝ在り。然かも彼等の眼の注ぐ所何邊にありし乎。彼等は人形の如く整列して。眼をあらぬ方に注ぎたりき。余は。彼等一隊の整列を見て。初め大に恐畏せり。日本軍は、大有爲の將校を有するものかな。彼等は雙方委員殊に露軍委員今日の態度を精察して。其擧動よりして其胸中を讀まんとする者なるらしと。而かも余の目を擧げて熟視せしに。彼等は低聲に私語し。或は四方を顧盼しつゝ在りき。

ア底事ぞ。

余は斷言す。彼等は遂に大器大材の軍人と爲る能はず。只彼等の進歩は好戰士たらむのみ。今日彼等は。其戰友の血と肉とにて購得せる旅順開城の會見を目で視たと云ふ紀念を名譽とするのみ。以て誇りとするのみ。淺墓なる心ならず耶。この目睹に於て。彼等の修得したる者果して何ぞ。

余は之を知る。彼等は故郷への消息に『吾之を見たり』と書する一句を得しのみ。若し夫れ人有りて是れ以外に『如何に之を觀しか』と問ふあらば彼等答ふる能はざらむと。

何ぞ著眼の深刻にして。言辭の剴切なるや。此一段は、實に日本武人の全部が膽に銘す可き苦言良誡にして。豈獨り武人のみならむや。戰捷の形體を目で視た丈けの都鄙一般の人々は。お羞かしい限りならず耶。彼等は土壓から戰爭の眞意義＝國難の眞味が身に泌みて居らず。戰爭をば芝居の如く考へ。勇士をば娘子に於ける役者の如く心得て。面白半分なる也。

抑〻人の精力を讀むと云ふ事が。政界にも學界にも文界にも缺乏して。死書死文と死學の世と爲り。器械的階級思想と明治式官僚風との弊たるや殆んど將に世道人心を朽死せしめむとするソレが。偶々斯る非常絶特の場合に。我尊敬す可き武人の群にまで發して。竟に敵國の孺子をして我壯年將校の膽玉を秤らしめるに至れるぞうたてや。旅順に於ける我勇將等が讀まざりし所をば。幸い我等が長崎に座りて讀み得たから宜かつたが。左もなくば。邦人はマルテンコから紅い舌を出された切で。獨り自ら男を誇り『町内で知らぬは亭主ばかり也』の格に落ちたで有らう。

凡そ古より英傑の士に常師無し。彼等は活ける事物、人間の總テより精力を讀みて身心を收めるを唯一學問とす。書を讀むは書の元神を感得するなり。ページと章句とに我精力を呑まるゝに非ざるなり。書籍をば著者の元神を我に移す中介物に供する而已。故に人を相るや肉眼を以て見ず。我肝膽を以て他の肝膽に感徹せしむ。千古の活學者熊澤蕃山が由比正雪に於けるが如きは適例なり。史に傳ふ。蕃山、紀州頼宣侯の知遇を得て其門に伺候す。一日玄關に於て擯逆ねに。一の容貌魁偉なる壯漢に會ふ。兩人互ひに目と目を含せつゝ相別る。蕃山入て紀州侯に白して曰く。拙者只今御門内に於て一士を見候。彼は何者に候哉存せざれども。容易ならざる癖物と鑑定致し候。以後は構へて御近づけ御無用に候と。翌日正雪來りて侯に謁し。白して曰く。拙者昨日御門内に於て一士を見候。彼は何者に候や存せざれども。容易ならざる癖者と鑑定致し候。以後は構へて御近づけ御無用に候と。紀州侯は兩士が相見て他を評する所の符節を合せしに驚けりと云ふ。人傑は已れの精力を以て他の精力を讀む者なり。故に斯の如し。凡化風潮の當代には此旨頗る獲難しとす。

今、終天の屈辱を受けたる旅順降將の精力も亦。邦人たる者已れの精力を以て之を讀むに非ざれば。畢竟、祭日の觀せ物同然而已。見た時が其でお仕舞なり。實も無ければ味も殘らず。吸ひ枯らした密柑の胞のみ。

ウキッテ有り。ローゼン有り。クロパトキン有り。ミスチエンコ有り。リネウキッチ有り。ステッセル有り。更に別機軸の人物には。革命の名士雲の如く在り。而して眇たる一中尉マルテンコの元神を讀み了るの時は。併せて他の諸英傑の尻毛を數ふるの時と知られかし。命は鴻毛よりも輕しとし義は泰山よりも重しとする決死軍を率ゐて戰サに克つのは。若い男が若い女の手を握りて越歴を掛けるに均しく。此方が攻勢を執れば。先方がビリ〳〵震ふこと別段取り立てゝ。自ら誇る程の沙汰に非らず。武人のみならず。邦人一般の價値は其れ以上に在らざる可らず。即ち我に集中せる精力が以て世界の有

らゆる精力と感受する所に味を持たざる可らず。永久末代まで露人の肝に應ゆる程の元神を惟れ保たざる可らず。

扨斯の如く吾等獨り露人の精力を讀み來りて。更に役人や軍人や新聞抔が戰捷の形體のみ追ふ有樣に對照すればするほど。どうも前途が氣遣はしいと云ふ心に成り。從つて戰局收束平和克復の速成はチト怪しいぞ却々以て一七、五五とは行き相も無しと。予が强固なる意識が信仰方面の靈魂自照を動搖せしめ。玆に無量の煩悶を生せし次第は。是非も無き儀で有たらう。斯くて予は煩悶の極に達せり而して如何にして予は復活したりや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ステッセル等降將の稻佐に來るや。多くの大新聞の通信員は長崎に群集した。而かも彼等は只だタネを取るを本願とす。タネとは香具師の通り符牒たる『タネ』と同じく。觀せ物のタネと同じき意味のタネなり目で覩、耳で聽いて其が紙面の飾りと爲る丈けの材料を此悲慘なる降將に求むる丈なり。安危存亡の彌次郎兵衛が立つ所の繼き軸を無形に讀まむとてには非ざりし也。

其と同時に。我官憲は。ステッセル等を厚遇する趣意を例の器械的に盲作し。降將の意志如何を問はず。只だ命令的に面會禁制を觸れ。行政官が戰場武人も宜しくと云ふ權幕にて。新聞屋を逐捲れり。官僚主義の現金者たる當時の營部長龜山等は。ステッセル一行をば日本武功の抵當品たる如く見做し。之を他人に見せたなら滅るかの如く押込めつ。ステッセルの身邊に伴ふ日本の光榮は軍人と役人との私有物なる故。國民や新聞記者に觀せ難し、と云ふ樣の意味合をば。型の通り奉行し。有らゆる善意の交通を彼より遮斷せるのみならず。無害有益なる記事と雖ども。斯く己が私有するステッセルに關して。新聞屋が我物の如く書くは不都合なりとて歟。原稿檢閲を厲行し。是が抹殺を命ずるに至れりき。敵人の精力を讀む等の氣は毛頭樂にしたくも無くては。ハテ扨困つたもの。國民の身命が廉價なるを恃む許りに勝ち得しとて。开は一時の事のみ。永久を慮かる時は。國を亡ぼす者は必ず此類の役人氣風である。不實無靈、上に媚び下を虐げ。ツノ癖。當方より强く出れば凹込む弱蟲でありながら。動もすれば輒ち公器を私用し。生意氣を振舞ふ所の官僚式で有る。何にせよ。ツイ先日迄も國民が一心籠めし旅順の運命!!其が決著したる曉に。幸い敵將が來たと云へば。役人が新聞社に懇ろに賴んでも。開城前後の光景を聞き得て。之を國民に告ぐる位の事は。官民一致の誠心あらば必ず爾すべかりし筈。然るに底事ぞ。矢竹と逸る國民の精神を無視し我神聖なる記事をすら抹殺に及ぶ。是が國家危急存亡の秋に於ける我役人の氣立とは驚き入れり。彼等が世道に對する留意の乾燥なることや實に甚し。吁。患は外に在らずして內に在り。官僚式は到底死神なり、、、、と。義憤沸沸愛念忡忡たるに淳じて。露人の雄渾偉大が一段と目に附き。愈々以て予は。五五、一七が疑はしく成りて。身心の苦惱に堪へず。とうゝ神氣を轉換して以て自ら安慰する一策として。紅曉近傍の山寺を跋涉しつゝ。天然の清氣

を友とするに至りた。

此際自ら慰めし至大の材料は。恰かも予の山より衢に還る時刻に於て。街上に相遭ふ小學生徒の群で有た。我鍛冶屋町より寺町通りは通學兒女のお成街道で。毎朝彼等の幾千が。嬉々躍々列通し散行する活潑々地の光景たるや。實に新生命を吸はしむるに足りる。予は毎度恍惚として見惚れて立ち。獨語して曰く。是がミンナ人間の子だ。健全なる元神の行列だ。此中には。幾多の東郷や廣瀬や彌太郎や龍馬や。晋作や又日蓮や清正やが在るかも知れない。三十四十に成た小供には度し難き輩多いけれど。この八歳十歳の諸天善神が有さへすれば。國の行末強ち心配に及ばない、、、、と。己が信仰の本地に還りて漸く氣を暢々せしめた。

斯の如き朝が一週間も續きし後の事なり。時恰かも二月中旬。山山を廻り。大音寺てふ寺の境内に降り。我家に戻らむと同寺前を過ぎし際。反對の方向なる街路盡くる處に。見事なる白梅花が今を盛りと塀越しに咲くを瞥見し得た。予は梅を見て徒らに去る程に。自力的勇者では無つた。五輪を證する梅花をば。神物人中の『物の代表者』とし仰ぎつる其頃なれば。誠に心弱くも思はず味方を獲し心地して。之を他力と駈け寄つた!!。

* * * * * * * *

露人の精力を我心鏡に照映し盡す迄は予＝日本側に立てる予＝邦人の精力或は他に缺る莫きを愛ひ。從つて平和速成の不可能を思ひ。乃ち我缺猪口の天桂玆に裂けむ乎と煩悶せしと非常なりしも。扨照映し盡せば其時は其が却りて我有なりけり。露人の精力をば此方に奪つて仕舞ふた樣に成りては。我煩悶は。恰かも川水の薄凍る間は徒らに舟筏を惱ませども。究竟して。全部氷結すれば却つて坦道を成すが如く。吾は倒さに我を濟度せむとす。

實に此邊こそ妙法蓮華の姿ならめ。予が心配で溜らず成れる末にァー此上は只だ天命任かせなりと安心を起しつゝ。朝氣曉色を以て元神を補ふに至れる其時は。早露人の靈魂愈々我に吸引され了りけるを吾未だ其と自覺せざりし也。

爾れば。思はぬ方に清き梅花を發見して。思はず駈寄りし予は。尙ほ露人の精力の海に漂はされける事として。溺るゝ人の枯枝にも縋らむ樣に。我『梅花菩薩』を頼みしなれど。近よりて凝視すれば。滿枝の白瓣は妙絶の常境を呈し。『智を以て知る可からず、像を以て測る可からず、萬物の爲に同じて而して不爲の域に居り。言數の内に處して而して鄉に止まり、有に非ずして無と爲す可からず、無に非ずして有と爲す可からず、寂寞虛曠、能く測る莫き底の佛身』は。吾と爾と同じく其ぞよと。當の口が語るげ也。顧へば基督の言ひける『野の百合を視よソロモンの榮華の極みの時だにも其花一つにも如かざるなり』とは道なりけり。釋迦の臨終に。拈華微笑せしとはこの個處なりけらし。

予暫く仰ぎて梅花と融神す。

折りしも。誰家か雨戸繰る音の我清境を被りければ。予ット立去らむとす。忽ち見る此梅の南枝傾くの處は。即ち是れ一の天滿宮の祠なり。塀を隔てゝ。他人の梅香を流通する當世の天滿宮。迫は經濟家なりと。予一寸天滿宮を窺く。

見れば。規模の小なるには似ず。石の玉垣、二重の鳥居、儼乎たる龕扉の。人間で云へば我等よりも生活の上等なるらしき天神樣なり。我八九歲の折。山を越えて鄉閭の天神樣に參りし事もありしが。此節は打絕果てゝ。天神などは出會ふても氣に留めずなりぬ。今しも心を安め吳れし梅花に因むにつけ。惜しき頭一つ下げやうかと。社內に步を運ぶ。

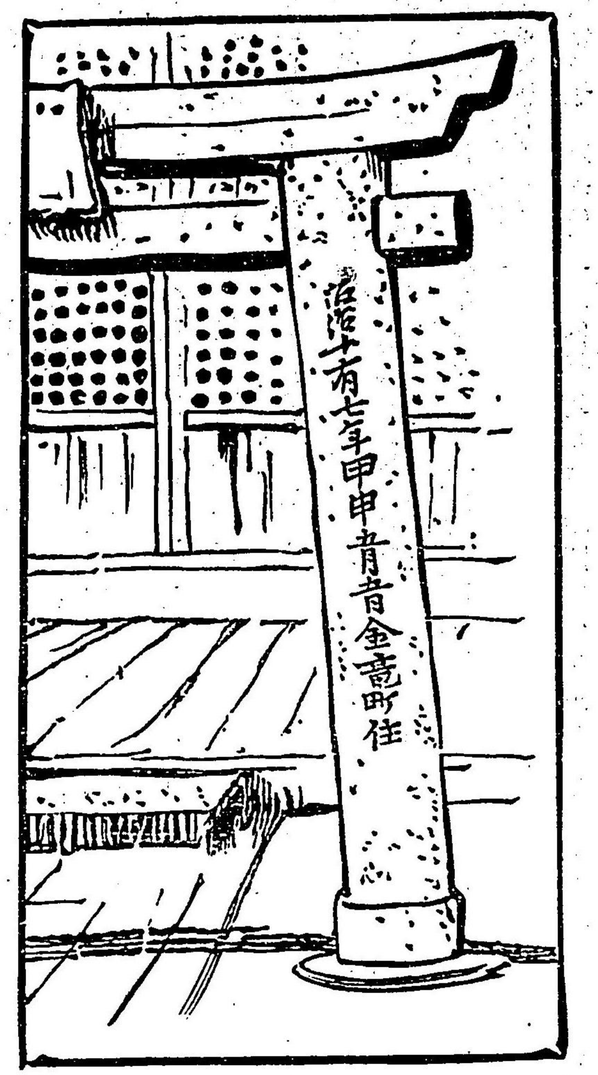
仰げば則ち華表の笠木に垂るゝ『民食元靈億兆靈祠』てふ八字の扁額も床しければ。華表に接して。讀むとも無しに。此石の華表に刻める文字太々なるを見て。遽然として予は駭かされた。實に。踵より腦天に何物か震動を與へて。予の精神の中心力を失はしめたらむ樣に。予は眼を圓にして。刻まれた字から魅入られた。

華表の刻字に曰く。

明治十有七年五月五日今籠町住（右方）

吉田林三郎爲一建（左方）

ア、一七、五五を我生命と念じて。この生命が絕へやせむと。煩悶を極めつゝ。其爲めに心遣るの術もやと。散步を課しげる予なり。ソノ予が、、、、。予の全身の予の天地の、予の靈魂のソノ唯一表徵たる一七、五五と今此處に。斯く歷々と。十有七年五月五日てふ順序正しき、而かも石に彫込みたる文字に因りて。ハタと鉢合せに及ぶこと。偶然としては餘りに偶然過ぎたり。予は。偶然などと當世智識者流が斯る場合に屹度ひねつて考ふる樣の遑あらず。至情直通、靈感全動、嗚呼是れ『我一七



五五』なりと感得せり。讀者よ。予が神物人感應は。斯る夥しき心身の行を經たる上に。初めて梅花に導かれて。天滿宮の鳥居の文字に迄達し。爾る時。初めて之を感應とは心得るなり。之を靈驗とは許す也。此場合に於て。梅花は予に引導を渡せる大善智識なり。石の鳥居は予が往生後に生れし淨土の莊嚴なり。引導とは死者に限りて渡さるゝ者ならじとは此處なり。而して生き乍ら引導を受くる處に他力有り。他力と相即きて自力有り。其邊は上述の實境にて一目瞭然たる可し。

微小なる天眼てふ一箇體が。無邊法海の浪に撲たれて。危く溺れむとせし際に。縋り著きし枯枝は。是なりし乎。哀れのものよと。見るほどの有血兒は。請ふ。予が心理的境遇的幷せ敘しつる處に徵して。脈絡の自然なる事を看取せよ。予は實に『斯く導かれ告げられ、而し今や。導き、且つ告る者』なるよ。判然と一七、五五を石に刻みて迷を拂ひ呉れし者は何ぞ。註文せし迷。此場合に斯く渴仰せる者の全幅に合ふこと容易ならじ。若し靈的見地を離るれば。尋常の梅花、尋常の鳥居。何の曲も妙も無けれど。合ふ工合が實に全中ならずや。予は斯の如く求めて斯の如く獲たり。人若し予の如くに求めば。亦必ず獲可きなり。

要するに當時予が靈魂は。一旦火勢衰へしに。煩悶の末に。再び潛勢を興し。パット照破せし也。而して照破の迹として。影として。石の鳥居をば殘したり。更に自ら客觀すれば。予は石の鳥居の元原神から引附けられし也。ソラ見給へ。神物人一切はソロソロはどけ合ふて來居るぞ。

東洋日の出新聞てふ一個體に寓する元神は其まゝ日露戰爭の全部に寓する元神で有ると。爾ふ一足跳びに言はずに。先づ小口から吟味すれば。予の體軀は即ち元神を包む小胞で。此小胞が其まゝ我新聞社と云ふ胞の『め』で。其から長崎と云ふ依報（佛經に生物の依りて生息する局面を依報と云ひ生物を正報と云ふ）から見れば。國家が巨胞の位置ぢや。爾して更に世界と云ふ巨胞から云へば。日本國家がソレの『め』である故。日露事件と云ふ『世界胞』のゴタ〳〵は。恰かも偶發の病症と同じく。其レの『め』に寓する元神さへ健全ならば外科內科を問はず。快復が迅速なる勘定で。譬へば病人が。看病婦を一寸氣に入た丈でも。其れの生氣に同化して。幾分か全治の早い程に靈妙なるこそ。生存の實相たる故。日本國家の元神（世道人心或は士氣民力）にして健全なる限りは。露西亞てふ惡熱が。何ほど昂進したりとて。結局の處は心配無用なるのみか。更に此大きい方の胞から。順々と下に來て。小さい方の胞に立入つて考ふる時は。長崎の世道人心さへ健全ならば。東洋日の出新聞社も亦元氣旺盛ぢやし。社の元神が健全ならば。天眼の靈魂も亦た確かなる可き道理で。之を今度は又逆に。小さい方から大きい方に順上がりに生命をプロマイド（引延し）して行くと。指の尖を切りし些細の箇處からでも。全身の發熱を催ほす事あると共に。爪の色や眼瞼の血色の良き時は。全身の健全を證する如くに。この最小の胞に寓する元神＝即ち天眼一人の靈魂力（解し易き樣に靈魂力と假名す）の健全は。輙ち移して以て日本國家の生命を確實ならしめる原機で。爾して其と同時に。此小さい『め』が。ウンと

氣張りて其と念じたならば。譬へば精液の一滴に先祖以來の本能を遺傳する如く。此元神は國家の生命に同化作用を起す故に、戰局收束、平和克復は。念じた。通りに成行きも致す。次第で。一七、五五の預言が全中するかせぬかと云ふ問題の燒點は。單に。天眼の靈力は完く健全なりし耶、其れ果して國家の生命と融一せし耶、但しは、さうでないかと云ふ微點に歸著する。

斯ういふ風に考へて來ると。天眼は。飯と筆と酒とから使はれて居る五尺四寸の一個體たるに止まらず。彼が生存の實體は。この小胞の上の社といふに二番型の中胞や。其上の長崎と云ふ。一番型の中胞や、其又上の日本と云ふ大胞や、更に世界と云ふ圖抜けの巨胞やらに。等しく微妙に行亘りて。到らぬ隈なき大入道で有る。

然る時は假妄の隔別を離れて。大中小の胞連中をして一齊に『明けなんこ』を行はしめたらむならば。クロパトキンや。ウキッテや。ニコラス二世や。ローズベルトや。西太后婆州や。昔の狂介どんや。病身の壽太ちやんや。凡そ日露事件の『め』と相成る各個體はトロ〳〵に鎔けて各個體の元神同志が。恰かも朝歸りに大門の口で落合ふた連中の何やら物を遺失した樣な氣色で。イヤ失敬君も同行者ぢやつた乎と語り合ふにも似たり。而して其が進めば。柳のお柳が三十三間堂の棟と鎔け合ふた樣に相成りて、、、、。扨之からが大變。元神同志は。なんだ馬鹿々々しい、田舍記者の天眼めは乃公の影法師ぢやつた乎。アラ可笑しい、君も同じく乎、ソラお手前も乎と。鏡鋪に紛れ込んだ黃金蟲の八方に衝突する如くに。孰れが已レの本體なりや判らず相成る。其ぢやもの。中胞の一番形たる長崎局面中に。一七、五五を判然明白に寫し出す實物が顯現して。拙者は天眼の身內にて候と名告る位の事は何で不思議の有らうぞ。

今龍町天滿宮の石の鳥居は。天眼と云ふ生存物の片割レとして。本來之在りしを。平太郎がお柳と乳繰り合ふ間は。柳の化生と氣附かざりけるソノ通りに。彼レ天眼は。生命界の同志として鳥居を看破し得ざりしので有る。

ソコで鳥居が彼を氣の毒がりて。楚々たる梅花を詫書の使として。優しふ呼込み呉れたのである。是に至りて天眼は。お花夫人やお鯉の方を黃金萬縊を以て購ふ所の『桂の太ッ子』よりも。ズット色男で。爾して大福長者である。

釋迦は人の方面より。唯我獨尊を說いて曰く。

今此三界。皆是我有
其中衆生。悉是吾子

日蓮は宇宙の方面と人の方面とを併せて。即身即佛を誨へて曰く。

今此三界は。三災を出で四切を離れたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず。未來にも生せず。所化以て同體なり。

今とは。事上の悟證の獲たるソノ今なり。扨て此今ぞ。天眼は日露事件と同體なり。既に然り。然らば則ち我は海水と同體なる時は。いかで河水と同體ならざらむ。全局に融一せば。ソレの局部たる鷄の盃や、石の鳥居抔が、骨も性もなく。吾身に鎔け來らむは。當然而已。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『滑つた轉んだ』が無くば。起き直る腰の力が劃然と思ひ知られまい。故に靈魂を主體と立てゝ精進勇往する途上に。主體の障礙たる心身の煩惱が時に起りて時に滅するも亦。妙行の因にして。清月、飛雲に沮まれて輪際却て風趣を呈し。一脱して光輝、前に倍するが如く。我の主體たに壞れずんば。結局、障礙は良友なり。あゝら面白の春雨や花を散さぬ程に降れとは這種の情とす。爾れば露軍が強かりし故日本軍もお蔭で強く成り得た通り。元神は互ひに相同化して。旅順降將の精力が予を壓倒せし故に。予は亦お蔭で露軍の元神を我に收め得た都合で。全宇宙の靈威は特にステッセル等を予に遣はして。心鋭の研磨に資けしめたるぞ難有き。予は煩悶の極に。一七、五五の判然たる靈驗に接して。乃ち心の比量分別に還りて人算を立てゝ以爲らく。

露人の精力や斯の如し。則ちバルチック艦隊東航の上は絶特の決勝戰あらむ。

奉天陸戰も亦太だ重し。クロパトキンは邦人が侮る如く逃ゲ腰ならじ。我攻めざれば彼レ攻勢を挑らむ。是れ陸上の決勝戰也。

而して二戰は戰局を終らしめむ。バ艦隊來ること遲くば却て平和を遲ふすと。

乃ちバ艦隊必ず來れ早く來れと念ずるに至りて。予は實に戰局上の全剛至烈なる元神と化し去りぬ。

予は。世人が二月中旬に至りても尙ほ露人の虛喝を疑ひ。バルチック艦隊が來得るもの乎と冷笑するを見て。之を憫むに堪へず。あゝら面白の春雨や花を散さぬ程に降れ。ドーゼ露艦隊が東京灣か何處かに數十發の巨彈を投じ。都門の放心者流を七顚八倒せしめて。之をして己れに克ち禮に復らしめ。而る後に東鄕大將から全滅されよかし、、、、と。隨分慾過ぎたる註文迄も妄想に描きつゝ。獨り莞爾として天文を眺めたり。

故に此時ぞ。予は凡夫として退轉せざる樣。自ら心に鎹を打つ手段として。特に二月十八日を以て。長崎市の巨刹本蓮寺に。佛敎同志會の聘に應じて演舌を爲し。公衆の前に一七、五五を斷言し。天滿宮鳥居の話まで打明けて。平和來を豫言し。乃ち之に由りて。自己の心身を拔差ならぬ境界に箝め。以て起誓文に代へた。即ち新聞紙上の文に加ふるに。入念にも演舌を以てせる此豫言が。若し間違ふたならば天眼は社と與に社會的に死す可く甘んず迚。斯くは言責の證文を公衆に渡して。爾して予は此日を以て。『平和克復根本談』の豫告を草し。翌日の紙上に之を發表した。

予が靈的新生涯に於て紀念す可き明治三十八年二月十八日。此日を界線として。予は死活以上の死活より脫して。事上成佛の域にこそ入りけれ。他力を恃む自行殆んと成りて自力を主とする化導の位置

にぞ立ちける。

支那臨濟の古名僧、禪門化導の奥旨を說いて曰く。我れ有時は先照後用。我れ有時は先用後照。有時は照用同時。有時は照用不同時。先照後用は人有て在り。先用後照は法有て在り。照用同時は。耕夫之牛を奪ひ飢人之食を奪ひ。骨を敲き髓を取り。痛く針錐を下す。照用不同時は問有り答有り。主を立て賓を立て。水に合し泥に和し。機に應じ物に接すと。文字簡勁にして直ちに能化者の活機を說示し盡せり。予は既に元旦初刷に於て先照せりき。此時に至りて將に後用を了せむとす。譬へば前には咤の氣にして。後には啊の息なるが如し。武道の型より轉じて實地眞劍の仕合ひに入りぬ。平和克復の期は。天算に定まれりと。他力的に信仰するに搗てゝ加へて。唯我一人、之を信じて。斯く爲さねばならず之念せむには。其が必ず爾成るとまで。自力的に任じ。『最早日露事件は我有也』と。歸依的主我的併せ行極めず了りた。

此時の天眼は。旧月が天の眼たるが如くに亦天と人間との眼でありた。

陸海の勇將烈士乃至列國の君相は。靈界に於て天眼と融一せるのみか。後に起れる日本海海戰の時の强風も。黑海艦隊クロパトキンの謀叛も。八幡大菩薩も。諸天善神も。神物人の靈威一切が天眼を透はして。此時早く既に神機を顯現した者で有る。天を畏れざる豪傑の士の所謂『屈辱的講和』は此時既に天眼てふ細胞中に其生命のミニマムを生じたものである。平和克復の元神を成形して『め』即ち玉子の白身の中の黑點を鮮明ならしめた者で有る。

されば。予自體が此二月十八日に於て。如何に接神的高潮に達したるよ。初刷を物せる時は。尙は他力七分に。自力の三分たりしも。今や自力的元神は他力的元神より同化されて。予は主體愈々健かに。自力七分、他力三分と轉せり。恰も火力の絕頂は全燒全光の時に在らず。却つて炭が火に同化すること七分にして三分の自力を留むる時に在る如く。此時の靈魂力は。不動常住なる北極の位置をもユラ〳〵搖かす可ふ覺へたり。

是に於て予は是より先昨年十月、依頼に應せる妙法の護符を物すべき時節到來せり。妙法の護符と云ふは。高柳老大尉の切なる囑望に由りて。大尉出征の際。是非とも書きて與へねばならぬ義理合なりしを。幾回の催促狀やら。出陣間際には態々使者を遣はしての要求さへ有りしに拘はらず。ドーしても神氣が乘らで。唯だ僅かの數文字を書くに忍びざりし護符＝。正月をも越へたれば。猶更に書きて送らねば。斯く剛正有德なる老武士に對して。約言を食むてふ罪の如何にも心苦しけれども。何分にも自己の元神が尙は他力七分の境に居りては。護符を書く事の相濟まざる心地に堪へず。ァー致し方なし。何なり代りの者を高柳氏に屆け。以て責を塞かばやゝ、、と幾たびか煩悶しつゝ。ッイ〳〵其日に至りし。先約動かし得ざる妙法の護符＝其をば今ぞ＝此二月十八日接神的高潮に達せる今＝ぞ。愉快に。何等忸怩かむ心どころか。神物人の靈威は七字を藉りて事上に顯現し。ロスが百億の

彈丸も之に刻ね飛されもやせむ。兎角は軈ての靈驗ぞ迚。此時初めて之を書く安心立命を獲了りぬ。ァー。該お守こそは。尊敬す可き六十三歳の志願出征大尉(後に少佐に進めらる)今實盛の稱有る我高柳氏の命數を妙不可思議に加護せしと。後日證明されけるぞ忝なき。該護符の靈驗は。此に細叙するの餘地なけれど。後日。高柳老少佐が一命を不思議に助かること二回に及びし紀念として。護符が身代りに立ちし現形を寫眞に撮り。之を知友に配附せし事實は。鄕黨の知る所に屬す。是等の予が事迹を以て。單に至誠天を動かすてふ陳套語に弊る勿れ。予は至誠など云ふ形容詞をば夙に通り越して。吾身心の全幅をば獻げながらも。尙ほ已れが確然として已れの主體たる樣漕著ける後迄は。實に南無妙法蓮華經の唯つた七字を書く事を憚り、愼み、畏れる程に。宇宙の絕對的權威に對して服從しつゝ。自行を積みけるなり。眞如の月晴れて心に懸かる雲も無しと云ふ位の理上の境にあらず。其をば超絕して雲月兩つながら我と融合する元原の事境に立ち得て。初めて五尺四寸の此予が書くならで。宇宙一切の靈威が書くてふ現證を實成する也。即ち靈魂の人と成り了りた一刹那が。我自ら意識を離れて自然と其を書くべく我心我手が其處へ導かれ行くにて。新聞屋の天眼が活菩薩のお門違いを顧みず。乃公の書いた護符は御利益が有らうなどと了見的に書く儀に非ず。

* * * * * * * *

但し此法華行者は。出世間的に構へて。獨斷的空想に耽り以て活事活勢をお留守にする迷信家では莫かつた。彼は戰局の推移に對して。鋭き且つ確かなる著目を怠らなかつた。彼は戰局收束てふ歸著を念ずるに止まらず。當面の經行にも入神した。

旅順開城の本末を通じて靈的消息を感得せる予。平和克復の『め』既に此に萠せりと爲し。更に愈々自己を以て之に融合し了せりと安心立命を成せる三十八年二月十八日。イザ近日中に平和克復談を物せむと迚。翌日の紙上に豫告せしが。此時奉天の大戰が目睫の間に迫れるぞと。予が心身に電氣が掛り予同日の紙上に戰局本末研究談第六十三回—を掲げ左の通り言ふて在る。

有効なる日露の決戰は之から也。

世間の新聞が何と傳へ樣とも。又多少の擬局が戰域に現はれたにせよ。東洋日の出は曩に一たび斷言したる通り大決戰の期は。三月上旬を越さねば熟せじと確信し。一向に心を動さず。筆を曲折しない。、、、、中略、、、、

玆に注意を惹く箇條は

1。露軍は沙河の會戰後總勢四十萬を整へて對抗し。再び攻勢を執らむと擬し。前回の通り咸廠方面より運動を起さむと示しつゝ。後方增遣隊の到着を待ちたり。

2。之に對する日本軍はァワャ勝に乘じて長驅せむかと思はれしが。どッこい爾うせないで防禦工事を各方面に施し。飜りて守勢を執りた。露軍亦守勢に變じ兩軍は四ッに渡りた大相撲の如く成りた。

3。是れ雙方が兵の補充を要する爲めのみならず。彈丸供給の關係が有る。某外國從軍武官の言へらく。彈丸の夥多に要されし事兩軍共に極度に達し。力竭きたるよりは彈丸の關係より已むを得ず一時雙方が打龍みし事情を多しとすと。雙方勁いのと勁いのとのガッチリ叩き合ふた會戰なれば然る樣の事もあらう。此邊を考ふる時は實に怖る可き大激戰で有たもので。其後の睨合こそ如何に今の戰後が猶更に激烈なる事を含み居る者と知らねばならぬ。

4。敵は斯くて咸廠前面より撫順迄輕便鐵道を敷設し。更に奉天より渾河右岸を經て咸廠撫順街道に到る道路改築及び要處々々の輕便鐵道等の工事に精勵し。例の如く工事的長所を揮ふて聯絡を密にしたるらし。故に敵は我右翼即ち咸廠前面其他より兵數を動移する間も無く我左翼の最左翼即ち牛莊襲擊に著手し。其後忽ち黑溝臺の大襲擊を行へるが黑溝臺襲擊は敵將の逸り男が斷行したる者たるに關せず。我中央軍は一向に動搖せざるなりに保ち得た。是れ彼が聯絡の密なる爲めに陣形壞亂を防ぎ得て、我軍が機に乘じて攻進する勝手宜しからざる者と解す可く。左も無くば。黑溝臺敗戰の如きは敵總軍の陣形に破綻を與ふる者にして。我軍は右翼或は中央孰れよりか此瞬間の機會を捉へて打つて出る筈なりとす。

要するに陸戰は今愈々日露の勝劣を定む可き眞の決戰に近よる者にして。戰機全く熟して急發するの時は戰鬪に力を入れること最大猛たる可く。且つ方面の廣濶なること意想外たることあらむ。

若し夫れ海戰に至りては。浦鹽港の三艦既に修繕を了し。バルチック艦隊は斷じて本國に歸航せざるが故に。彼等が日本海軍の靈を衝いて東西相呼應せむと圖ること益々熟せり邦人必ず悠々たる勿れ。

奉天戰切迫當時の活勢は實に斯くの如し。

追懐せよ諸君。勝たから宜かつたが若し此大戰に我運命拙かりせば什麼ぞ。

續いて我軍は二十二日迄に太子河左岸の地を占領し。二十三日降雪紛々地形の險峻と太子河融氷等の困難を冒して盛化を攻擊す。敵は天險に築城し。頑固に抵抗せしも。廿四日遂に城を燒きて走る。其他各方面共に漸次敵を追捲りて。イヨ〳〵三月一日より酣戰に入る。此日の紙上。予『戰局に對する質感を新たにせよ』と題し。左の通り奉天戰は陸上決戰の本職たるを警告す。

日露戰爭の大活劇は今や將に大詰々の舞臺に入らむとしつゝ在り。

實に三月の聲を聞いて後の戰局は此戰爭開始以來の最大無上なる大切の事で。彼レ强敵露西亞の力量根機がいよ〳〵我に屈して最早此儘戰爭を繼續するとも克ク目無しと觀念する乎。但し彼が連敗の局面を轉換し、以て我滿州軍及び朝鮮を危殆ならしめ。海上には臺灣澎湖島より此方さへ我艦船が航海ラシプを消して通行する程の開濟たる景象に歸す可き乎の岐レ目は。實に今月一日より二箇月

以上を越すまじき現在の活勢ぞよ。

此時斯境、出征勇士の感奮れ果して如何。國民たる者動もすれば心弛むとも無しに自然と安堵しつゝむ樣の傾向を謝却し。今日よりは新たに又神前に燈明を添へ候へ。伊勢大神八幡宮日蓮上人清正公等有ゆる武運の神に一念を献げ候へ。而して潔齋して滿州の寒空に回向し候へ氣合の必要は今正に其時也。

予輩は固より今回の大決戰が最後に日本の勝利に歸す可き理由を研究し得たり。乃ち此研究と外交面の研究とを綜合して露國の致命傷コヽに在り平和克復の原機早成れりと推斷し。大段落は五月五日を期する日迄切りて豫言さへ致せり。之をば平和克復の根本、戰事外交兩面談」てふ大大的標題の下に近日世に發表する心得なれども。高山の雲は時として一人の叫ビより波動して雨を呼起す事さへ有る微妙の奥機を思ふ時は、斯境、斯時、我戰士我邦人の氣合に一分一厘の隙だも生せば。折角大數に於て必勝と定まれる今回の決戰も微細なる機ミよりくれる無きを保せざる故。今ぞ傍目を觸らず。黙地にクロパトキンの首を狙ふ可き大切の時に付き。予輩は先づ敵の與みし易からざる所以と此戰の性質が絶大非常なる所以とを特筆して。以て軍國内外の人心に一喝を與ふる所以なり。

右三月一日の論談は。奉天戰の重大を說き得て盡せり。是れ此陸戰ソレ自體が重大なるに止まらず。此陸戰の結果が平和を喚起するソノ神機に於て重大なるなり。蓮の實は蓮の咲く間に太りつゝ在り。戰勝と平和との因果同時も亦其也。

奉天の決勝本戰に際しで。最も懸念されしは敵主將クロパトの戰略如何てふ問題で有たが。予三月二日の紙上左の如く論す。

賽馬集の前面十二三里の地に於て我軍が敵兵一萬七千の据籠れる牢永久堡壘を攻奪したりてふ公電は左の肝要なる事項を示す。

1。敵が一千四五百の損害の爲めに堅城を捨去りしは。兵數一萬七千の割には脆過ぎたり、是れ敵は或程度迄苦守したる末、我軍此方面に優勢なりと見て退却したる者たる事

2。此方面に於て我軍は攻勢の初一著を成せし者にして。昨年の沙河會戰後務めて守勢を執りし日本軍の態度茲に始めて豹變の徵候を呈せし事

3。敵が機關砲三門を委捨したると同時に少數乍ら捕虜を出せしは。此戰が頗る激戰の性質を帶び。敵砲兵陣地の一部は本軍より遮斷されたる可き事

是に於て揣摩するに。クロパトキンの軍は曩に屢々賽馬集咸廠(我の右翼)方面に大軍を向け。我を

脅かせしも。我は彼が手段に乘らず。宜しくおしらへ居りしなり。彼は一旦咸廠前面より兵數を減じ之と同時に牛莊襲擊、黑溝臺攻擊を行ひし爲め。予輩は及び敵の戰畧の裏面を計り。是れ或は敵が我の左翼方面を牽制しつゝ。喞嗟の間に中央或は我の右翼に主力を盛り立て。以て大攻勢を執る下地ならず耶と疑ひし所。今に至りては賽馬集前面の此戰の模樣に因て察する時は。敵の戰略は此に在らず、矢張り主力をば中央及び我の左翼に傾けつゝ在る者の如し。扨は駈引の影チラと見へたり。彼は依然として攻守の二形を兩存して好適の戰機を待つ者なり。殿しふ奉天を氣にして居る也。每度逃べし如く。戰ヵの秘訣は主力の巧みなる運轉を以て敵の弱點を衝き。敵の頭に打ッ附からずに尾より捲き立て。敵の首力が應じて救ふ迄の時間を奪ふて大體の陣形を攪亂し。以て彼を奔命に疲れしめ。以て敵の力が十ならば七ッか六ッに外使ひ得ざらしむるに在り。此方が爾う謀れば敵も同じく爾う謀る。其處が即ち虛々實々の活味の存する所で。之をば曾て二ッ巴のクル〳〵搦み合ふに譬へたり。

而して今や敵の巴の頭は。我の中央から左翼に向き居るらしく。我は其際に乘じて右翼の巴に頭を向けしや否や未だ詳かならずと雖も。過般左り手なる黑溝臺に頭を打込みし敵の失敗とは事異り。我が今回右手の方にグント差込みし力は。慥かに成功したる事だけは明瞭なり。

戰略の彼樣なる姿をば。之を蛇の喧嘩とも謂はう歟。場合によりては尻尾を以てハタキ合ふて。隨分對手を惱ましし得ることの面白や。此邊の趣味を解して戰報を讀めば。いよ〳〵の本戰は之からの事で。賽馬集方面のは小手調べたる事と。敵の應じ方に從つて我の首力が何方にドー向いて。扨決戰の本格に入る乎と云ふ所の、此三月上旬中旬の舞臺こそ大切至極と悟證し得るであらう。

斯る間に。戰局の實地は愈々酣戰と相成り。三日と經ち五日と送りて。竟に三月十日午前十時奉天を占領するに至れるが。予は當時爲めに大大的論評を三日書き續け。奉天戰の神髓を解說す。概要に曰く。

今回の日露大決戰は從來の諸戰を總べて一括したるものよりも尙ほ性質に於て重要で分量に於て巨大である。

昨年三月卅一日鴨綠江會戰より引續きし幾多の大戰小戰が。今回の唯一戰の輸贏に因て全部有効と決さるゝ乎將た無効と化する乎でふ危機殺々たる此奉天包圍戰を精觀せよ。是れ尋常一樣の意味を以て謂ふ所の奉天占領に非ず。實に敵總軍の塵殺殲滅戰である。

極めて簡單に此戰を說明せむか

1。我戰略か精妙の絕頂を行きし事

凡そ戰爭シカモ斯る大局面の戰爭に於て完全に包圍攻擊の目的を達すてふ程の事は却却戰史上實例稀なる事で。兎の毛ほどの違算我に在らば。敵は一方面を突破して我の聯絡を斷ち。一角を開いて退却の活路を得むこと言ふ迄もあらず。而して其が爾う出來無いで。嫌應なしに奉天方面に壓迫され。其處にて甕叩きに叩かれ了り。敵の總軍は譬へばキビナ、鰯の類が網に押詰められて甕口に潰れ合ふ如くバタ狂ひしこと。箭りも箭ッたり。我戰略の註文に徹頭徹尾箭ッたり。

2。敵軍は進退全く窮まりし理由

戰ヤは二ッ巴の狂ふに似て。我の首力を以て敵の測らざる弱點を衝き。尻尾より捲り立てゝ他の陣形を崩し。潰亂に乘じて叩き伏せること極意とす。是れ本談屢々說ける所なるが。クロパトキンが運の竭きたるか。彼は正に我軍首力の存在點を看誤まッた彼は決戰開始に先だちて我軍の作戰を斯う解した。

日本軍は二月中旬咸廠に於て〇圍集中を行ひ老城方面に向つて突出の勢ひ有り續いて寬甸方面にも〇圍集中を行へり是れ一方は長驅して懷仁を陷れ一方は更に興京方面に突進する準備にして又本溪湖方面に於ける盛んなる勢力增加の形勢を參酌するに日本軍は其の左翼及び中央を以て奉天及び塔山荒山等(露軍首力の在りし處)を牽制しつゝ。右翼に大勢力を附して直ちに撫順城を陷れ撫順鐵嶺間の軍道に由りて鐵嶺へ先廻りを爲し以て露軍の第二根據(奉天は第一根據)たる鐵嶺を脅かし露軍の退路を絕ち露軍が之を患へて力を分つに及び初めて左翼及び中央の進擊を行ふの計謀なりと。

彼樣に我の攻擊主方をば右翼に專らにせりとクロパトキンは鑑定した者らしい。

是より先。我軍の戰略はクロパトが爾う思ふも無理ならぬ樣に實際中央から右翼に亘りて首力を向けたればこそ。我の左翼即ち牛莊方面及び黑溝臺手薄を來し。敵將ミスチエンコ及びグリッペンベルッの大襲擊を速いた者で。一旦黑溝臺を攻略しながらクロパトの本軍が動かず。佯攻だに得爲さずしは强ち敵將不和に原因する許りでは無く。ウカと中央軍を動かせば。對戰酣はなる間に我右翼軍が咸廠董子峪より前進して撫順に迫り。彼の左翼を側攻せむかと云ふ憂を抱きしに因る可く。兎角梶原景季の逆櫓主義の癖あるクロパトとしては彼際の持重は當然であつた。然るに黑溝臺襲擊に於て擊退を蒙りしもの丶。此に於て露軍は充分の大仕掛なる强行偵察を實行した樣なもので日本軍が辛うじて黑溝臺を回復した許りで。之を機として直ぐに露軍を追擊し奉天に向ふことを得爲さぬのは。之ぞ日本軍が左翼には兵方大ならず。ヨシムば增加するにもせよ。急速には六かしさ爲めで。日本軍が左翼を以て進擊開始の先鋒と爲す抔は暫時之有らじ。此方面は依然牽制に止めて中央及び右翼に首力を注がむこと必せりと斯うクロパトは鑑定しつらむ。

然るに二月下旬に至るや。我軍は一方右翼に活動を起しつゝ。敵將が中央の勢力を割いて撫順及び

馬群丹方面に致すに乗じ。我左翼は誠に疾風の如く渾遼二河の間に突入し。直ちに新民廳を略取し。奉天の側面に出顯し。左翼の最左翼は更に迅雷の如く奉天の西北方に進んだ。此方面の苦戰惡闘は固より言語同斷にて敵將報告の如く幾度か擊退され或は中隊全滅等が數度起りもしつらむが竟に百難を排して本月五、六、七の三日を以て首尾よく奉天背後の鐵道を破壞し該附近を占領するに至りた。蓋し敵帥は二月末日或は三月一日迄も此方面の我軍勢が斯く迄有力の大部隊を有せりとは思惟せざりし者に相違なく。我々日本人と雖も今日尚ほ左翼は意外千萬なる大勢力より成れる者よと舌を卷く都合にて。ドー考へても此の方面は牽制が目的にて。ワザと猛進して見せて露軍を回顧せしめ、爾らして右翼より突進する日本軍の戰略ぞとクロパトは本三月四日迄も高を括り居つたであらう。されば乞彼は我の左翼が突進するこそ好機會なれ。此間に中央を突破して左翼と中央との聯絡を斷ち切り呉れむずと。塔山荒山＝渾河右岸より沙河に亘りて群屯せる彼が首力を以て沙河堡其他沙河以東に追擊を行ひ。非常の損害を賭しつゝ唯此一方面を破らむと試みた。

けれども我中央軍がガッチリ堅守して動かず。毎回敵の大進襲を擊退しつゝ。順順に左翼との聯絡を引締め。更に右翼の猛進を待ちて左右兩軍の根軸を保ちた。即ちクロパトは中央逆襲の失敗の時既に負けて居たので有る。大局の戰略に於て見込違ひを爲したのである。

三月十二日の紙上は右の如く活氣滿々として奉天戰を解說せり。而して翌十三日の紙上も亦左の如く。此戰況の眞處を紹介す。

▽最後の追擊戰と特稱す可き段落

戰闘面が非常に廣大で。各所の戰闘が一として重要の極ならざるなく。各部の士卒悉く一以て百に當らざる莫き此戰なるを以て此處を取立てゝ何と書かうも出來ず。從つて記者も讀者も。只だ山の如き潮の逆捲く瀬戸を觀る時に女波男波、飛沫浪頭の區別を爲す遑あらで。アッと氣を引入らるゝ前已たる樣に。壯絶の觀に目もチラつく許りなれど强いて心を靜めて見渡さむに。戰闘には三箇の段落ありて識別に便ならしむる所が即ち

○一は。左翼軍が奉天の背後に出て右翼軍が一面興京より一面本溪湖清河城より馬群丹、地塔、撫順に掛けて壓迫を切にし中央軍始めて進襲の形ちに轉せし本月五日迄の枝戰。

○二は。右翼軍が撫順を挾擊し左翼及び中央が奉天を包圍せる幹戰。

○三は。九日の夜撫順城陷落し。十日の午前十時奉天占領されて後の追擊戰。

と斯く三段落に別ちて考ふる時は。敵の陣形隊形は第一段より二段三段と順々に崩れ立ちて。最初は半永久堡たる持場持場を支へ切れずして漸次大砲輜重の過半を整へつゝ退却し。次には進退究ま

りてゴテ〳〵落合ふた所を息をも吳れず擊ち做されて。三つの砲彈に辛と一つ應戰し或は一條の血路を開かむと逆襲吶喊の數々を演じ。而かも包圍勢ヒシ〳〵と引締まる爲めに意を果すこと協はで銃は折け隊は亡びて死途路亡途路に逃延び。粗秣は燒け。重砲は置去にし。粗食縱列は續かで。幾かに逸出を試みる。此時が即ち奉天撫順の占領で。此後が即ち最後の追擊戰と云ふ幕に入る。この最後の追擊と云ふ最後の二字に注意せよ。敵の敗走する時に追擊するは當り前の事なれど。此場合の追擊は敵が百計竭き果て振向く暇さへ無き折の追擊也。滅茶々々の追擊也。包圍攻擊の際は敵たる者尙は氣勢轉換に一縷の望を抱き。殊死奮鬪の覺悟尙は存する時ながら。最早此第三段に移りては決死奮戰しやうにも空腹が許さず。疲憊困頓味方を雜踩しつゝ殆んど無意識より出る本能的潛勢力を惟恃みて機かに應戰しつゝ逃避するの時である。是に至りては日本軍も亦困苦非常なれども。ツコが勢いと云ふ者で。追般の追擊は南洋の島にて阿房鳥を打つよりも尙は存分擊ち得る也。爾れば隊形の崩れ立つ程度を數字に示さば第一段が二の自乘として二二が四の崩れ方ならば。第二段は四四十六の狼狽。扨其次は急に騷動の桁を上げて。十六の自乘。即ち二百五十六と云ふ混亂の度に進む都合で最初兩軍相抗せる時には二と二の牾角の力ありても。退却の次に包圍せられ其又次に潰亂するに及べば敵我の戰鬪力は幾何級數を以て隔たり。竟に二と二百五十六との差を生じて全軍覆沒に歸す次第なり。最後の追擊が如何に絕大の威力を有する乎を篤と味ふべし。

若し夫れ此大戰が世界の兵學界に垂示せる敎訓に至りては寧ろ畏る可き者あり。予當時(三月十五日)該敎訓の梗概を左の如く列擧す。蓋し軍隊精神の參考資料たる可きは勿論。國民をして又の時を顧念せしめる最良の藥は是ならむ歟。

一。凡そ戰爭は。攻防共に如何なる場合に於ても各隊全滅迄戰ふの決心に非れば克ち得ざる事。

一。野戰と要塞戰との性質の距離漸く近接し。大口徑の攻城砲は。戰術上。常に必用の者と化せる事。

一。通常の野砲は。佛蘭西式の二或は夫れ以上の機關砲と全部變更さる可き運命。既に定まれる事。

一。騎兵は。智識及び勇氣に於て他の兵科よりも一層重きを置き。選拔兵を以て組織する必要を認めし事。

一。砲兵科に自動車應用の必要愈々緊切なる事。

一。自轉車隊は。時に泥中を行く迄車體の頑丈を要し。從つて斤量を增すに因り平生膂力絕倫なる倔强の勇者に自轉車妙技を訓練し。或は騎兵の副科と爲す必要の事。

一。偵察は決死獨行の士を先とするに因り。破格の恩賞及び登用法を偵察の一科に設くる必要の事。

一。大元帥の統一を飽迄密にし功名競爭の私念より軍勢の敏活を缺ぐ大官彈劾の途を開く必要ある事。

一。戰爭は軍隊の士氣と國民の信念と一致するを以て第一要義とする事。
一。强者と强者との戰鬪は寧ろ殺戮に近し。慘毒は從來世界が期せしよりも一層大なり。
列國仲裁干涉の勢力に向後國際に增進す可き事。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

平和の『め』は正月の旅順開城に成りて。三月の奉天大勝に卵子の殼を出でた。
是れ予が心鋭も戰局も外交面も等しく其通りで有た。二月十九日に平和克復談の豫告を爲せる其日かピッタリ滿洲軍進擊開始の日なりし如きは。正に靈境融一の結果にして。戰事面が進捗するに準じて外交面は平和の斤目を增しつゝ在たから其が又予の心鋭に投映し。遂に四月九日に至りて『平和克復根本論』の立言の初日たらしめた次第で。三月中は予主として戰局本末研究談を草せりと雖も。是れ平和克復談の豫備行爲とも見るべく。予が奉天戰に重きを置きし所以の眼目は獨り該戰捷が陸戰として重要なりてふ點に在らず。實は其影響がバルチック艦隊の東航決行を急ならしめ從つて海上決勝の期を早める而して其さへ濟めば後は平和に經まるに因り豫言の五五が中り平和は速成す。と云ふ點こそ更に大切で有た。

故に予三月十八日の紙上戰局本末研究談七十一回に於て左の通り說いた。

五月五日と云へば本日より僅々四十九日に過ぎない。其樣な短日月に露西亞が海陸俱に往生して仕舞ふ樣な戰爭の經過が行はれ得可しとは誰人も思ふまじ。人間の智慧を以て謂ふ時には我々と雖ども其とは斷定し得ない。けれども我々は思を盡したる末は神頼みである。其れ故誠を致すの至りに於て倏忽冥感する所あるに於ては。其にも重きを置く。爾して人事は人事として研究に弛みが無い。乃ち戰局の本末に關して鐵嶺攻奪が存外速かに行はれたるソノ影響をば。御幣擔ぎの念を除いて而して考ふるに。矢張り『戰サは此方面に相濟ミ』と見る外なく。此上は浦鹽港攻略と薩哈連島占領(バルチック艦隊始末の儀は重大を極れど今は言ひ難し)を剩すのみで有る、、、、

浦鹽港立往生と同時に。バルチック艦隊東航の絕望てふ偉大なる影響を生ずるを記憶せよ。而してバルチック艦隊がヂブチーに退航せしは。本國へ召喚されし也抔と小供瞞しの歐電に欺むかるゝ勿れ。バルチック艦隊は浦鹽陷落前、而して解氷後、早々浦港を目指し惡地に進まむと。詐略縱橫、機心萬緒今や死物狂ひの眞ッ最中なるぞ。彼はヂブチーに戻ると見せて。日本艦隊を印度洋方面か南洋方面の孰れかに釣寄せ。爾して鬼の居ぬ洋面を一直線に乘切らむと苦心慘憺たる者ぞ。

露艦隊の此註文が幾分にても中れば。戰局は尙ほ永引く可し。此註文が外るれば彼は最後の最後なり。而して彼や此やが埒明いて仕舞ふて。露西亞が世界から笑ひ倒さるゝのが。五月五日と極

まる次第である。

當時世人がバ艦隊の來ると云ふ事をば疑ひ切て居りし際中。予一人其必來を其礎として立論せし事頗る大膽なりき。殊にバルチック艦隊始末の儀は重大を極むれども今は言ひ難しと斷りつゝ『彼や此やが埒明いて仕舞ふて露西亞が世界から笑倒さるゝ』と言ふ處は。天眼多少の秘意を藏せるよ。人は奉天大勝利の祝慶に氣を奪られて陸戰の記事のみ渴仰し。海の上や外交面には目が行かざりし央ばに。予直ちに奉天戰を過去の者として葬り。主として是が影響即ちバ艦隊の急航を專念し。加ふるに全滅迄とは思はねど。其必ず日本艦隊に敗られて竟に露西亞が世界から笑ひ倒さるゝをば。手に取る如く見透はした乎の樣に。右引用の文章から買はれず耶。

爾れば平和を告ぐる文壇の雛鷄は。三月には既にチョ〳〵と鳴き。四月に至りて初めて羽叩き致し。太皷の上ぐらゐには飛び登り得た。即ち雛鷄初めて搏たさせる羽音は左の如し。

人間の眼より觀れば日本は方に克てり而れども神の眼に於ては如何。

國家生存の主要條件は。精力集中の强剛に在り。武裝の平和に由りて關稅政策及び國民の生產力を發展せしめ。或は戰鬪を行ふて權域利分を擴張せしめる。二者の形チ相似ずと雖ども其は即ち惟れ一。要は國民の集團に伴ふ精力が能く他界の物質及び心意を我に集注せしむるに足り、我の實體及び氣魄が他に吸引せられざらしむるに在り。

世界の第二等國は各々道般の精力の根礎を有す。故に互に劣弱の方面を風靡し吸收して。而して未だ獨り太だ優りて他の列强を抑壓する者無きが爲めに彼等は各自宇內の覇業候補者を以て任じ乃ち刻意精行誓つて精力集中の拔群的强剛を期して已まず。即ち國家ソレ自體に存するの精力を以て世界の第一等國と角逐するに足る者有りて而して是が健全なる發達を確かめ得る耶否やが國家興廢の岐點にして。國家自有の精力とは。一に曰く人種。二に曰く人口。三に曰く國魂。四に曰く氣力。此他歷史と云ひ國體と云ひ生產と云ひ腦力と云ふ類は總て此四者に包含す。是れ國家が他國と戰ふと戰はざるとを問はず先天的に素有する者にして其內容は絕對的也。

國と國との勝敗は精力の優劣を實驗する結果にして。占領し打壞せし方が勝で、退却し潰敗せし方が負ケとは限らず。德川家康は三形ヶ原で信玄坊から滅茶々々に打做されても、三河勢の精力は此敗潰中に不滅且つ不盡なる所以の實を留め。やがて天下一統の偉力を茲に胚胎せり。日露の今日も亦日本軍が克ちし許りで日本國が其儘露西亞を壓伏し得ると限らず。日本國が他を屈伏せしめ了るは今日及び今後の精力が露西亞の其を壓倒し得るや否耶に繫がるのみ。何となれば軍事的勢力てふ者の一要素に過ぎざればなり。而して滔々たる天下の群新聞が或は敵國の執拗を警め或

は其亡滅の理勢を說くが如きは孰れも矮人の觀場。未だ眞秘を穿たざる者。

平和克復を主唱せむには。國民に自有の精力てふ事を解せしめる必要有り。兎角邦人は戰時の戰に對して銳敏に偏し。平時の戰を藐視す。彼等は連戰連勝を無造作に考へ。何時までも大日本萬歲を唱へ居るを好み。且つ官僚の拵へ事に欺かれて浮かれ調子と爲り。戰禍の怖る可く危機の戒む可きを忘れ。若し平和論でも持出せば其が不愛國の者の樣に思ふほど熱せり。是れ國家自由の精力に自賴すと云ふ深大なる器局想念の缺如して。只管一遍勝負で他を叩き倒すを目的とし。「同胞を死せしめる戰爭に依りて意外の巨利を博せむと欲する卑劣心を加へ。而して勝敗の形體以外に於て自他の運命を支配する宇宙の靈威在るを失念するに由れり。故に予は先づ上の如く自有の精力を釋義して。以て『露西亞に勝たから日本が初めて光榮有りと云ふ譯のものならず。國家生存の主要條件を諦觀して精力集中の强剛を成すの適切なる方法をコゝと認めば。今日、露と戰ふて大ひに克ち明日は滿洲を淸に還すも可なり。將に久戰の大策を立てて百年兇露と對峙するも亦可なり。和も戰も我の根抵力如何と顧みるのみ』と論ずるの前提に供した。即ち國が勝ちし迚。我の精力の貫目だけに買はるゝ迄で。決して掛ケ値は利かぬぞ。和せし迚日本が小さくも成らぬぞとの意で有た。後日に至りて見れば。邦人は露人の精力を適當に鑑識せず。又自國の精力をも其正味の處を辨知せず。乃ち貫目以上に買はる可く妄想し。且つなまじひに田舍流の掛ケ引を演じて。以爲らく戰爭繼續、非講和の氣勢を盛んならしめば露國は腰を折るべし償金も差出す可しと。遂にポーツマウス條約の蓋を明けて悔しき玉手箱。我心から頭髮一朝に白かる恨を釀すに至りた。彼樣の不用なる失望を生じさせまじ迚。予は斯く國家自有の精力を標榜として平和を唱道せしなれど。何分、世間は予に馴染薄かりし故予の苦衷は貫徹せず。舊知の面々が東京暴動の首魁として嫌疑されお上のお繩頂戴仕る樣のアベコベの沙汰と相成たるこそ逆緣なりけれ。予は。是等の愛國者を敬すると同時に。世間が一氣呵成的名士たる七博士等を過信することをば。當初より懸念し。乃ち大いに政界少年の迷夢を警醒せむと欲し。縱論橫說。曲さに大國難に處する本方を指示す。即ち『平和克復根本談』の初期。既に左の痛論を發しぬ。

▽日本海を呑む露國海軍人の精力と故マカロフ露軍敗戰の原因は。露國人の精力不調和、不集中に在り。我は結集力に於て克つのみ。故に勝敗は形勢の一出一沒と解せば則ち當れるに庶幾し。敗者必ずしも精力を銷盡せず。勝者亦必ずしも獨步ならず。露軍潰へたり迚露人の精力も亦竭くと速斷せば我に悔あらむ、邦人動もすれば輙ち他の士氣沮喪を謂ふ。然れども沮喪あればこそ振作もあり。裏と表の差は時の問題なり。漢學者の常用する士氣沮喪抔の句を每度擔ぎ出すは。時てふ觀念の極めて短促せる舊時代の筆法である。百尺竿頭に一步を進めて。敵國の素養せる性格と人口、氣力、人種とに包括さるゝ彼が精力を通觀し候へ。

昨年九月の交、旅順市街に日本砲彈が亂下しつゝ在りと邦人が獨斷せる事が。今日より見れば當方の自惚に過ぎず。旅順は十一月迄安泰至極にて。兒童街上に嬉戯せし始末なりし如く。當方の心を以て敵を推せし迚敵たる彼は腮で茶を沸かし居るやも知れぬを。軍陣の敵雜兵の不元氣位ひを標準として彼我終局の勝負を議すること淺墓の至りである。

論より證據、露國海軍軍人が蓄積せる精力の程度を表明す可き事實を提供して世人の三省を請はむ。八月十日の黄海大劇戰を經て巧みに突出を遂げ南洋面を迂回して北海に出で遂に樺太コルサコフ港に遁入の目的を遂したるソウキック艦長の手柄を視ば。艦の操縱、洋面の案内に於て如何に露國海軍軍人が練達せる乎の素養を推測し得るで有らう。而して之と同時に『素養なる者は。精力の繼續し漸加せる傳承の謂』にしてソーウキック艦長の如き傑物の出るは彼一人の天才乃ち然らしむるに非ず。寧に敵國海軍に具備する自有の精力が偶々之有らしむる所以を識り。彼の前には海軍史上、千古の奇才故提督マカロフ有り。マカロフの前に幾多無名のマカロフ有りて露人が日本海を視ること坦途の如くなるに至りし次第を味はねばならぬ。此精力や。マカロフ死すとも露國海軍に磅礴し。バルチック艦隊が門外漢の嘲笑を心に嘲笑して日本一揉みと健氣にも進前する所以の氣魄に變形すと承知あれ。畏る可きマカロフが。客年二月彼れの從來の任用たる鎮守府を去るに臨み。佐官以上の同僚を集め。日本海の潮流に關する一場の講話を爲せしことは。宇内の海軍軍人が注視非常なるに拘はらず。講話の内容は極秘にして。未だ十分判明せざるが。當時マカロフの秘密演舌中に左の事項ありしは確實なりと傳へらる。只だ此數行中に露人の精力の餘師ありと知れ。

マカロフ曰く。津軽海峡には緩急二條の潮流有り急流には水雷布設無効なり。水雷艇の用も亦不可行なり。而して海峡の砲臺は總て緩流に向けて据附けらる。此缺點に乘すれば同海峡の通過易々たり。

凡そ潮流の觀測は月毎に行ふて六十一箇年の繼續せる觀測を經て初めて確實に達すと。如何にも津軽海峡の急潮たるや舷頭より展望すれば只だ屬目した丈で目の舞ふ程で此處には常に巨鯨と猛き鮫とが群集して鬪爭する其凄さは格別なる由なるが。斯かる六かしき險流を悠然乘切る樣に潮流の調査を完成し無數の瀬の數々を我の魂ィに刻み附けて激浪の中に心の水標を建て了たる其精力たるや如何に偉烈なるぞ。浦鹽艦隊がノッサ〳〵此海峡を往返して東京灣の門とも謂ふ可き沖合迄進襲し外國船を擊沈して悠然、上村艦隊を翻弄せし心憎き振舞は敵ながら天晴れの手際は一に這般精力の發現である。既に然り、然らば即ちバルチック艦隊の物質的勢力は遙かに我現在海軍に軒輊すと雖ども。然るにも拘はらず敵將ロゼストウエンスキーが支那海迄進みて我の鼻を擦する刻下の壯舉は露國海軍が假そめならざる自信の發動と見れば大過無き儀にて精力なる者の姿は此邊にて解し得ずや。予は刻下此好敵手を歡迎する充分の理由を有す。而れども开は我海軍の精力を精査し

且つ外交方面に照合して海上最後の決戰を喜び且つ我の必勝を卜するに由る者にして泛々者流が敵國人の精力を算外に置き我海軍の苦心を無視してワイ〳〵然たるとは全く選を異にす。（平和克復根本談第六回の內）

馬を烏拉の第一峰に立てゝ。スラヴ侵略の潮勢を此に堰止めむと議する人士の如きは。前面に氣を奪られて背面を疎かにし。尖頭の氣鋒を專念して自家內容の精力却て對敵以外の者に窺窬さるゝことを警めざる客氣の徒たり。滿州論の戶水博士其他諸君往々此病あり。博士輩の信徒よ心せよ。

戰ヒは外交の執達吏なり

外交は戰ヒの辯護士なり

法理に合ひて局外に立つ裁判官の心證に一致せざる時は。差押への後に解除在り反訴有り。露西亞は日本よりも大なるが故に負けるのである。大なるが故に其精力制限の度も亦大なり。故に重さに困んで舉り難し。ソノ所を日本が乘じて以て戰事外交兩面より其弱點を衝ぐから日本が克つのである。萬々一、外交の形勢急變して露が其全力を我に加へむ曉には。日本が西比利亞全部を占領し居れり迚果して何の詮があらむ『烏拉第一峰論者』は宜しく黑海艦隊の封印てふ事を念頭に置きて。扨陸上以外。海上に神經を通はすべし。爾る時は列國と云ふ裁判官の日露事件原被兩造に對する心證如何を窺知し得て。露西亞屈伏の時はココ也と云ふ其ココを發見し。併せて『陸上平押し主義』の迂濶を悟らむ。

露艦隊は敗北せむ。而れども彼ロスキーなる者は曾て陸上縱貫の大鐵道を建設して。指の尖で日本と清韓を掬揚し今は又歐亞兩面の海軍を一括して勢力不較の艦隊を送り以て我と血戰せむと欲する其意氣と力量即ち一括してロスキーの精力と稱す可き者に至りては不朽に値す也。（平和克復根本談第七回の內）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

概を揭げて以て世人を警醒せざる能はず。之が要に曰く。

非常の功有る者は非常の事無くて協はじ。非常の事有る者は非常の精力無かる可からず。而して非常の精力は沈々深々、宇宙の夜を心裏に閉づると同時に毎も一番鷄の朝風を一念に點ずる底の大腹中無かる可からず。

大凡そ國民が小成に安んずる心を以て平和を希望すること墮地獄の根元なり。世に永久の平和てふ者無し。無きが故。國民は常に精力の向上と增進を怠る可からず對露戰爭は箱庭を火山灰で補綴る樣な消極的整齊の爲めにあらず。正に世界の餓火及び算數の競爭場裏に躍進して、智慧と力と精神

との重荷を彌が上にも引脊負ふ爲めの首途である。

故に露人の放射口を太平洋に塞かねば平和克復後彼が海軍の新擴張を誘ふて遠からざる內に復讐軍を起さしめる恐あり迚。之を封じる爲め浦鹽を取るてふ事は一時の政策としては可なれど。千年の大計としては誠に淺墓なり。

其樣な『萬里長城式』の心持ヲを以て平和を欲するならば。十年の平和は。却て五十年後の亡國を原因せむ。

心は堅く保て、氣は廣く保て!!

露人には或程度まで。永久に我と競爭せしめて。我は折角勵ミの材料と爲さば。例の家康流儀を以て安逸し得ず。太閤流儀を以て積極的に進む種と爲りて。大日本が眞の發展を期し得るで無い乎。亞米利加の大富豪ならば一人で慈善事業に寄附する位の金額を。五千萬人總掛りで漸く戰費公債に應募して誇る迚。實際愧かしい沙汰では無い乎。小敵の堅は大敵の檎と云ふ兵法の語がある。只だ小規模にて堅き家康流儀は。治め易き人民を作るので『偉いなる將來』を喚起すること莫し。

之と同時に金も富も大切なれど。去り迚蟻には爲るな。白耳義が日本の十分一の國で有り乍ら其輸出貿易額は日本に幾倍す迚。白耳義を學べよと芳川內相等が云ふは。丁稚小僧に曉す話柄のみ。本來國家としての生存の意義は總ての事物に標準が高大に趨くを目的とするに在り。個人が偉人たるを目的とするに均し。故に白耳義如何に富みたり迚。凡そ世界民衆を攝收するに足る所の崇高なる國魂と深大なる精力とを念掛けず只管錢の一方に凝るは。畢竟貯蓄勤儉を生命とする蟻と云ふ昆蟲の屬のみ。政府者が蟻を本尊とする樣なケチな腹中では到底世界の大雄國に迄出世は六かしい。

日本には天の岩戸の始よりチヤント明るい大きい本尊が在る。無始の久遠劫より無終の本來際まで毅然たり儼乎たり孜々たり堂々たり活運して息む無き日輪と云ふ本尊が在る。何處まで行ても屈せず休まず公明にして健剛なる我國の姿として太陽が國旗に迄顯はれて居る。此處を體して扨見渡せば。同じく日輪に緣深き一天四海皆歸妙法の日蓮、四海一握の日吉丸事豐臣太閤此二人こそ今日以後の大舞臺に相應する大腹中の龜鑑なれ。、、、、償金取て美服買ふて三井吳服店に儲けさせて其でお仕舞!! 殘るは大和魂の蒸發而已と云ふ樣な日清戰爭後の如き不覺悟を來すと。否とは。只今の根性如何に因れり。

無事主義の爲めに浦鹽分割を主張する勿れ。寧ろ浦鹽をば露人の息ヰ拔き場所として存置し。倒まに之を西比利亞開拓の蹈臺と爲せよと謂ふが。予の本意である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

平和克復の根本、戰爭外交兩面談の第一聲を擧げし四月九日は。恰かも敵國露西亞の極力を表するバルチツク艦隊が。俄然として姿をシンガポールに近き洋面に現はしたりてふ急電來り。日本の

朝野を震撼せしッノ當日なりけるぞ妙なる。同日の我紙上欄外は東電を錄して曰く。

外務省著電に據れば。シンガポール沿岸航海船はスマトラ東北五十哩にて六日の夜二十八隻の軍艦に遭遇せり一英國船は又七日シンンポール西北百三十哩にて露艦三隻の水雷及び給炭船を伴ふに追及せりと報告す

後日に至りて精觀すれば。敵國バルチック艦隊は。露西亞の精力を極めて日本と決勝する爲めに東航した者で。爾して彼は。イヨ〳〵露西亞の不撓の魂性を挫き。遂に講和を欲するの已む無きに至らしめる役目として。ワザ〳〵東鄕艦隊から全滅される爲め遙々參りし者で有た。彼が決勝の犧牲と爲らざりせば。戰局は未々永引きて。當時世人の期せし通り。前途遼遠を釀し。乃ち天眼の預言も凡眼の寢言と化し了る都合で有た。則ち天地の大舞臺より觀る時には。冥々の裏に主宰者有りて露國バ艦隊を海上一萬二千哩の長程に導き。とう〳〵日本海に於て。日本艦隊と出はねばならぬ樣に仕做し。東鄕や片岡や上村抔の忠直なる小供に。神さまが手柄を爲させ給ふ順序と相成た儀である。平和克復の元神が事上に自照する爲め。敵艦三十幾隻は。靈魂の火の燃料に供された者で有る。而して神明が天眼に告げて。『汝が五五の期日は差許す。去り乍ら汝が元旦の紙上に書きし通り五月五日と迄ホックリ中らせては。衆愚は誤りて汝凡夫を拜まむ。是れ愛ふべし。殊に汝が其爲め增長心を起せば。折角出來し靈魂の『め』や絕べなむ。因て五月の二十七八日即ち27 28—58に止めて汝に活路を與へ。併せて天道を現證するぞよ。汝此上とも勉强せよと、、、、』奬勵し給ふ者と。予が受取り得る成行をば呈し。乃ち予は。ロヂエストヴエンスト艦隊は天眼の一念に引附けられたるよと。內輪同志には氣焰を吐き申す。

抑々バ艦隊は。予當時細說せし如く。

前年の十月十三日。バルチック海なるリバウ要港を發して。苦航七十日にして。一月七日。亞非利加マダスカル島の南端に著し。其より北西端なる一港ノシベを以て東航作戰の本據地と爲し。遂に此歲三月十六日。ノシベを出發して。印度洋橫斷の途に上りし者で。新嘉坡の南東沖に顯はれたるは四月八日の午後なりし也。即ち本國出發より此日まで。正に一百八十日なりとす。

予當時心竊かに祝すらく。『來たぞ。バ艦隊が丁度一八〇日目に出現したのは。面白ひ。彼がマ島に著いた日時は。實に進行上の巨節を成す大切な者ぢやに。其時は七十日目で。一月の七日とは妙ぢや。是は一七の數。爾して今度の出現は。一八の數にピッタリ符りた。扨々一七、一八の瑞相顯然たり。戰爭は必ず此奴が片附くと同時にお仕舞ぢや。而して其は五月ぢや』と。更に思へば。バ艦がノシベを出發した三月十六日は。恰かも予が

バルチック艦隊は浦鹽の陷落前而して解氷後早々浦鹽を目指し蕊地に進まむと詐略縱橫、機心萬

端今や死物狂ひの眞ッ最中なるぞ云々。

を草せる時日と符合したるぞ嬉しや。』此は慈々神さまが予が筆を導くなり。戰局の活勢が。予の靈魂

に投映して。我知らず爾成り行く儀なり。マー〳〵内證で。海戰の發展を待たう。之さへ其通り相成らば。平和は手の内ぢや』と。初心の戀に艶章を隱す樣に。人に告ぐるさへ惜しいふ思ふて暮した。

然れども。戰爭外交兩面談に於て。予は神秘的言辭を弄ぶことを爲さゞりき。予の立言や正大にして確實なりき。予は先づ。邦人の新聞紙が總て浮調子にして。婆艦隊の爺艦隊のと。茶番的に戰事を記述し。來ない〳〵と獨り極めした末に。新嘉坡沖に出現すと聞きて。腰拔かせしザマを叱咤し。抑々天下の群新聞は。勢力を知りて『精力』を解せず。故に彼等は敵國人の精力を計る能はず。而して精力には既發の者有り。未發未了の者有り。細かに之を打算せざれば敵作戰の根基を洞察し得ず。從つて論每に事後に落る而已と喝破し。以て盛んに邦人の肝膽を刺衝し。敵艦が堂々として潮を捲いて攻勢を挑るは。日露海上決戰の遺直し也。元寇以上の危機なりと警醒せり。蓋し是れ雛鷄漸く羽翼を長じて天地の間を叫破せる東天紅の第一聲!!

十五。成道後の位置＝立命の消息一端

日露戰の本末終始を全宇宙の如く觀じて。之に全心身を投捨じ。因て以て神靈を箇中に感得しつゝ信行を成就し。信行成就の因果を豫言全中の頗末に驗證す。と云ふ事の次第は。大略、前のページにて絶頂を成し了りた。而して其さへ會得されむには。著者は半生の心血を之に濺ぎし効果を即、地に博する幸運の境に立つ者である。

されど著者の役目は尙ほ未了である。

予は。成道の餘を一層練縮して。讀者のハートに容れられ易かるべき樣に寫し出さねばならぬ。成道後の位置と責務とを解示して。讀者と與に共に任ずべき事を誓ひ。以て如上の効果を永存させねばならぬ。

蓋し吾々人間には死生の理を悟るさへ容易でない。況して悟りしとて死生一如の事境を實成するは。猶更難い安心立命と云ふは。人間の死生は猶天地の晝夜の如しなど。只管自己の智慧、意識の範圍にて捌ぐを謂ふにあらず。『神佛と我と融一なるが故に死生は絶對靈の顯現の手續きのみ。眞生命は無量也』てふ信仰を心身の上に實成するに在り。故に單一味自力の安心はあらず。單一味他力の立命も亦無し。他力は即ち全宇宙の元原的靈威にして。自力は即ち個體を中心とする自我の元神なり。斯くて人間は死に關する安慰を獲。安慰よりして向上の希望を生じ。社會は因て以て『永久』てふ事やら『天道』てふ事やらの意義を生じ。茲に道念理性の原力は成る。

故に死生の悟りを身に行ふは。宗教の消極的本用にて。因て得たる立命が中心點と爲りて。宇宙の精力をしてクル〳〵旋りて我に集中せしめ。ソコで膽力やら氣節やら妙智やら靈識やらを併せて。獲たる

上に。我自ら他の生命に關渉し。靈威を現實にすべく成就する即ち他を成道成佛せしめる。ソコに至りて宗教の積極的本體で有る。

然るに人が死生の悟りを體得したりてふ自覺或は表證は。大病の時、戰場の時、不慮の危難の時、或は絶望に瀕する絶對絶命の窮困の時ならでは。これを現實に驗する能はず。無事平穩なる壘の上の坐談には。安心立命に關する美なる巧みなる趣味津々たる文句は。書藉からも禪語からもお經からも續々引出されて。娯樂半分、自慢半分に語り合はるれども。扨本講、本眞劍の事境には。其が何處かへ飛んで了まうて。シーザル陣頭の白面隊の如く脆く挫敗するが常で。大抵は臆病から困窮を增大し病症を昂上させ流丸を速く者である。

宗教の消極的本用すらも體得し果決せずに爭かで清濁併せ濟し、窮通兩つながら度し、世道人心を根こそげ洗ふて。世界同胞をして共榮共存の本事に感孚して清淨なるを得せしめる所の大大積極なる菩薩的本用を期すべし。

故に成道に次第有り。死生の悟りを體得了する品行＝是れ成道の本果にして。大乘的能働的功業＝是れ成道の全用なり。

本果は己れに在り。全用は衆に施す。而して一旦は本果に住しても。孤處自足すれば忽ち小乘に退轉す。只だ全用を期する大乘の機根にして初めて向上無限なり。故に成道を慕ふ人は宜しく先づ本果を獲得するを努め。同時に成道の自覺後に於て更に自行化他幷せ成就すべく精進波羅密を要する。

是に於て予は。予自身成道の際の事境を執りて。之を讀者の心鏡に投映せしめねばならぬ。而して其をば。讀者が予に同じく本果と併せて全用を達するの栞に供さねばならぬ。

予が自ら成道を自覺して。自覺に伴ふ氣丈夫の處を持しつゝ。一切の交友を我一乘の法門に化すべく決意せるは。實に三十八年の七月初旬。一七の豫言が其本體を露はして。日露兩國の講和大使が七月一日に任命されけるソノ頃であつた。而して當時の予か俾を練締せる寫圖としては。予が在戰地の病友野田兵二郎に與へし書信がソノ隨一である。野田兵は予が少年時代よりの生死の友で。爾して當時の交友中、最も深く予の憂念を惹ける者で有たが。末段に掲ぐるは即ち該書信の全部で。元は卷紙に七間半も書き續けた丹精の跡である。讀者之に依りて成道前後の事境を會得せば予の本懷は至極なり。

夫れ天に門無く地に戸無し。而して動有り靜有り文有り理有り力有り作有り神有り人有りて。天地の間に彌漫して流行無礙、造次も曾て息む莫し。則ち感應の實在は言ふだけ既に蛇足なり。則ち蛇足なりと雖ども。而かも頂門の眼、天際に通せず脚下の止、地底の軸に接せざる踢蹴の徒天下に充滿するが爲めに。他の低頭を扶け他の弱腰を叩いて天地に參せしめむと欲して。眼前に感應の現證を展ること如上の幾千萬言に及ぶ。是に至りては誰か心眼爛然として月の如ならざらむ。

千虛は一實に苦かず。苟くも一身即無量身一佛即一切神物人と信解せば。即ち人々先づ自家身邊の俗

事職業、係累等に照して信解の事を應用せよ。次に隣人に及ぼし遠朋に施し遂に天下に加へなば。ソハ時は即ち大乘の成道なり。

身屈し心窮するの時、忽然として本有の靈感を念せよ。然る時我知らず肚底に力の著くを覺へ又妙智自ら生じて紛糾を釋くを見む。是れ感應の功德也。

抑々今代の士の世に處するや。四圍の外界ばかりキヨロ〳〵瞻廻して己が脚下をば忘れ去れり。故に學者識者の立言すらも營業式興行式なるが多く。大抵、時の執權者やら。其隨從の勢力やら。親の金以て娯樂的に本や新聞を買ふ青年やらの機嫌を標準として言ひ且つ書く。彼等は世間をば何ほど畏い者と思ふや殆んど底知れず恰かも俗吏が長上官を送迎するが如き態度にて己れの應に感化す可き讀者、聽衆に對する也。

是れ即ち能化と所化との顚倒也。神人混合の偶像が本尊本佛の上位に居る同然也。頭を地に著け足を天に朝せる也。

這般の顚倒は。予之を正さゝる可からず。而して之を正すの首途には。予自ら予が成道後の位置と責務とを明かにするを要す。

顧ふに智識勝ちて我執强き明治式士林に。信仰の芽を吹かしめる事は。石に種子蒔くほど困難たるを免かれず。シカシ石と雖ども之を碎いて粉にして土分を混ずれば。水分も空氣も之に和して。稚子を成育せしめるに至るが如く。當代の世道人心も亦。日露戰てふ國難に因りて。生命問題を回顧せずに居られず。勝敗死活の眞機を實驗する因緣に住し。乃ち形式と器械力と智力と財力との外に。靈に屬する或物を認め掛つて來たのは。是れ即ち個人的我執の石が國家的生命の槌に碎かれて。人生の土分と混じて掛かりたもので。此際、思想界に適正なる宗敎の金剛杵を下す時は。勢は古賢に半ばして功は則ち之に倍すること機運實に然り。

是れ此機運は。即ち國家大開運の原力にして。這般の深大なる悟證。靈魂的立命を程よく扶掖し長養せば。即ち規摸、志望、品性の正大にして氣力の無限なる人格は。是より追々出現すること北米合衆國民が淸敎徒の信念が原力として勃興せしと均しき者あらむ。何分にも人間極まる元老や役人や從來の成功者の小智小才小功を標的として。之を學び之に媚び。島界に自足して妻妾に誇る時勢にては。チト幅の有る人物は直ぐと持餘され。遠き歲月の濶き場合の事を思ひ且つ企つる者は。少々足を伸せば直ぐと海に閊へて邪魔物扱ひさるゝ所に。この度實驗に於て人間本有の精力の無限（天力と合一し得る故）なることを承知して見れば。元老や役人から手拵へされて寸尺の小なりし昨非を悔ゐざる能はず。ソコで精力無限なる世界的人格も庶幾し難からじ。ルーズベルトもカーネギーも東鄕大將も其功業を成す所以の原力は。本有の精力の向上的發揮に外ならざれば。我等日本人は。之を國民としては。更めて世界を一統する雄族たる事も望みて不可ならじ。之を個人としては。お互ひに世道

人心を支持する大乘漢たり得るぞと。精神が擴大せむには其効果は國家を振起せずには居らぬ。此機運を代表する者は。即ち予也。

宗教をば愚夫愚婦の專有物と見做す社會には世道人心の廓清を斯す可からざれども。兎も角教育有り位置有る階級に信仰心さへ芽を吹かば。跡は爲し易し。宗旨の撰擇は第二段として。這般の機運に乘じて。宗教の實用と必須とを思想界に打込み。飄然として維新以來の無靈不信の大過失を悔ゐ改めしめる事は。實に吾輩立言者の當面の大責務にて。延ゐて之を教育界に及ぼし修身教科書を改造せしめる迄行かば。其が日蓮の時の立正安國より一層進みて『立正興國の本事』で有る。

而して道段の觀念は。予を驅りて神物人感應如是を叫ばしめし動機を成せる者で。予は之に由りて。先づ自ら身に獲たる感應の現證を示し。以て世の宗教をば笑談講に或は偏理的に說きもし聽きもする所の風習を破し。傍ラ人々が實驗せし神佛の靈威は斯く〳〵なるを。人々氣附かぬのみで。事實は絕對靈の本用本體を否定し得ず。ト云ふ事を論證し。予自身がソノ證人たるのみならず。天事人事がソレ也と告ぐる次第。故に本談は信仰心を喚起する爲めに。予自身の位置と實驗とを明かにするを主張として。嚴格に謂ふ予が宗旨を主張する事客位とせり。

蓋し予の獲たる日蓮直傳無上第一義の妙法は。往々古來の同宗僧侶が未だ道破せざる所に迄進入し在りて。予の信解を以てする日蓮宗は。之を『一乘新教』と特稱するも可なりと思ふ。然れども所は予が大いに學德を積みて後に。奮つて天下に標榜して。都鄙に傳道す可き事に屬し。本談に於ては。予は主眼の處を述べて己むが。若し夫れ日露戰を信行の對象に立て〻獻身するに至る以前の予がドー迷ふて來てドーいふ工合で成道した乎と云ふ曲折順序を御話致さば。其は必ず讀者の深き趣味に値し。又何人と雖とも免かれざる精神上の煩悶時代即ち一旦は色々悟つた樣であり乍ら。何時の間にか復た我ながら不可解に遷る半結半解の時代の人には。別けて指南の効益を呈するで有らう。蓋し予は多感の士が大概一度は通る悲觀に陷りて。人間は何の爲めに生れしか不可解なり苦樂の差引は零なり。馬鹿らしい、太く短かく遣附けて死んで呉れやう抔考へし場合もあり。病院の醫師が予の咯血を試驗して夥多のバチルス有りと云ひ。マー三年は六かしいと告ぐるを聞きては。顏面蒼白幽靈の動き居る如き心持と爲りし場合も有り。或は斷見我見の焔を燃して投機的大山に身を投じト筮に淫しつる迷信火の如き時節もあり。或は戰場等にて萬々活路無き機會に一生を拾ひし事も有り。或は理性道德性の發動が我を提斯し。母の生命我に代りしと實感せし事もあり。惡人からホド〳〵酷い目に會はされつ〻。是れ却つて予が成道の本因なりと悟りし節も有り。將た又若き女のエレキは精力の本なりと教へられて一生懸命も之を實行せし時もあり。萬病は腦力と腸胃との調否如何に在り。養生は鹽と水分の適用に歸すとし。破天荒の自家流養生活學を發見した場合もあり。杜康を命の親と立て〻其弊や失策を極めし事も多々なり。迷ヒの路筯は多岐にして萬化なりければ。終に自ら成道を自覺せし時。振回つて過去三十餘年

を想へば。只々自分は斯く迷ヒの道を蹈みつゝドーして今日まで生存し得たもの乎。と我ながら呆然とし。更に又沈思冥想としてァー吉凶禍福併せて佛天の導キなり、罪障悉滅、功德無量、我こそは天の寵兒なりと。感謝に堪へざるに及びたる者で。次に掲ぐる立命の消息一端は。聊か予が生涯の前世紀をも說明する個處を含んで在る。

△立命の消息一端＝戰地の一友野田氏に與へて

成道の發心を促かせし書簡

拜復今予は戶町の奥の玉蟬園と云ふに在り此ところ不思議に涼し（市中は百度以上に上ることあり）山勢左右より迫り谷地の田園の茅屋を構ふるに嵐氣襲へば風の性が街衢のと違ふと見ゆ客月初旬初めて此家に來り炎氣異格なるを發見せり福島、星等は夙にお馴染の處と聞けど予は初めて也壯剛の徒は此涼境の眞價を感せず從つて予に紹介せざりしてそ憾なれ兎角體軀輕弱、肉力が精神に副はざるシカモ烈々たる意志往々にして肉力の企及し得ざる所に迄我を拉し去る底の性癖予が如き者にして初めて天然と肉力との眞の難有味を全收し得可し凡者或は冗肉の爲めに却て累はさるゝを致す蓋し一得亦一失也。

予は客臘我心肺を極度に强張して日露戰爭の終局如何を念じたり。

殆ど將に有ちゆる細胞が神經に化したらむ如き情況に迄根氣を壓搾し了たり。

予は『必の字』を解して曰く

必は心を貫いて（ノで）餘す無きを義とす誠なる者の果也是れ賢人の必也

知巧力量に由りて斷ずるは西洋科學の主用たる解剖方式、實驗歸納方式に偏する當世學風の犧牲と爲る者にして我見、偏執從つて生じ我の境遇を我自ら盡かむとして却て境遇に醜轉し去られ曾て宇宙の靈氣に觸るゝ無き爲めに其期する所差へば則ち懊惱す是れ心を以て形の役と爲す徒輩の所爲なり。

期すと云ふこと敢て絕對的に不可なりと云ふにあらず期す所以の心持が己れの意志を注ぐ標的を作りて全幅の誠を致す所以の方便に供するに在れば是れ己が精神の修業を主とするもの故宜し

期する所差ふも悔ゆる筈なし

這般の標的を最終の歸著と心得なば开は人生を短かく視る者の事なり人は死後までも不滅なり

故に必に小人の必有り

小人とは我の心を以て宇宙、人生、大道、運命等を簿記法的に限りを附けキチンと差引を合せやふとする者是れ也

廣い世界を狹く窮屈に暮して我の智識やら分別やらで自ら領分を創るは小人の必、然らしむ

小人の必を破るは戰爭の勝敗が實例なり

戰時には死生存亡の觀念切なる爲めに人々必要上、誠を生ず故に必の本義漸く顯はる

而して予は『賢人の必』を體することと異數なる者也

去ればだァ

日本國の人間達が戰勝ぢや戰費ぢやと腦中炎々たる昨冬より予は扨戰ヵは克つとも一時の事なり我の弱點を審にすればするほど前途遼遠の間に胸を冷すこと多し（其は予は彼我の實勢を知ること審なる故）と獨り以爲らく

此戰爭の本末を通して日本國の負ふ所以の天命如何

を觀じて天命てふ者の眞處に透徹せば場合に因りては我一人の力を以て之を亡滅（一歩進へば甚だ）より救ふの道も出づ可し又愈々ダメならば我の責務も別に存せんと

之を胸中に啓く可く志した

斷りて置くが予は天性極めて臆病なり予の二歳の時戍辰の亂を米澤藩赤湯と云ふに避けたる母は予に語りて云ふ

赤湯に入れべいと思へば何人掛かりでも入れ得なかつたのだよ湯の底が無いから這入つて沈んで仕舞ふべいーッて畏れて泣いたんだよ

後年修め且つ進んで氣膽漸く成れりと雖とも性癖斯くの如きは矢張り何時とは無しに偶發して凡そ事物の

端を畏れ

機先を敬ふ

こと人として異數なる可くあり而して其端に於て戰々兢々小心翼々たること殆んど神經病者に類して而して病的ならず健剛なるを得たるは弱の極、還つて天に安んずるの眞靈氣を丹田に收め了りたればにて端を畏るゝの至りには思念精力を盡し了りて後に於ては吉凶窮通共に一如たり（心中にて）殆んだ大膽不敵無神經の如き迄に達す

故に日露戰爭の場合もだァ

予の眼中には戰勝なし

戰捷を致せる元氣唯だ在り之と同時に露人の元氣精魂を看取することに至れるが故に『刧一目の打違』にて勢ィ逆轉する盤面上の奇變有らむを畏れ且つ日本人の根氣は予が如く爲る能はざらむと畏るゝ爲に廟堂の將相在外の勇士を併せて予は心配す

是れ日清戰役前後のザマで分かる次第で經綸の本方は明治式の人物に敎ゆ可からず

況んや一敗でも爲した折をや

予は實に怖れたり

『戰捷大好望の央バに』怖れたり

怖るゝの極に於て（戰敗、否、國勢滅裂の端を怖る）心身の精を竭して天命を觀じ天數を念じ

妙法に歸依したり

是れ十一月十二月末迄を初期とし初期に於て天數を直覺し得るに至りても尙ほ本年一月より引續き

七月九日迄は所謂直覺せる靈機をば獨斷に證かざらむと務め其適中如何をば日として察し刻として

驗せざるなし

這般の工合にて予は心法を萬有に冥合せしむ可く期する者たり

期するは修業の標的を作る爲め也

私に必して而して先見てふ樣の者を成す野心に由るに非ず

即ち賢人の必たる所以也

科學（サイエンス）と云ふ者を目の子算用的に學び行きて智識を貨物排列的に腦中に詰め行くのが『誤れる歐化的

教育及世風』なる結果として赤門空氣は小人の必を習染せしむるを免かれず

而して近來は一般に成功てふ事とを崇拜すること滔々たり

是ぞ病根は一なり

亦只小人の必の弊而已

予が日露事件に對する

獻身的妙法の行

を玩味し給へ。

日露事件に關しての予が獻身的妙法の行たるや智慧も學識も一丁前に有る天眼として何だか變ぢやド

ーも意志偏向の結果から迷信に魅入られたので無からう乎と遠地の知己が危ぶむ程ながら是れ予が亡

き母―邑人（むらびと）から佛けと稱されし馬鹿正直極まりし仁慈なる予が亡母―の遺傳性に依りて道と信ずる所

をば正直に務めずに居られぬ予の癖にて此癖の爲めにこそ予は私心多き藩閥の搦まる明治政府の粟を

ば貪まず從つて友達が公使や博士に爲るのを傍觀しつゝ我は快よく物の乏しき民間半浪人の分を守る

次第は足下の平生熟知する通りで天下總ての人心や人評やに背くとも唯一人の清淨なる亡き母の神靈

に背く事は予の忍びざる所なり而して誠を以て心の全部を貫き去りて絶對靈（神佛）の體用に合せしめ

る本因は此癖に存す絶對靈の體用とは即ち妙法蓮華也。俗の處世方。修身法に比すれば殆んど狂的なり

と雖とも其だからつて仕樣が無いぢやない乎斯うせねば天眼は肉血の生命を母より貰ひし恩に背きて

生きながら死骸同然と爲つて了ふ如畏れて堪らず斯うする外は至情が許さぬから是非は無からうよゾ

コで我意我見からでは無く全く至心よりして明治式の學風思潮世情に根輪際逆行して

人間染み過ぎたる＝其が流れて器械の奴雑識の隷、理窟と私智小計との服從者と爲る＝婆羅門式。

パリサイの人の方式

の有ゆる高貴者、智者、學者、勇者、富者、成功者の心理及び行爲をば唯我一人超越して。

人は小なり天は大なり道は天に在り識に在らず

と云ふ破天荒の現證（理や識は古來書物に多し而れども活事物を執りて其まゝ現證する眞實の菩薩行は六百年來此上に顯れず唯だ我祖師日蓮は其を獲たりし者也）

・此信條は日蓮を祖とす。予は妄事に非ず心底より日蓮の傳承者也（日蓮は事の一念三千を宗旨とす天台は理の一念三千を宗旨とす、事とは現實なり物心一樣に融貫する實際也）

この信條の現證を示さんと欲する發願と其實行とに過ぎず

サテ此氣組と信條だテ

現證だよ、理窟や哲學や智識ぢやないヨ

之は日露事件の爲めに言ふので無い

斯かる一種の予が宗教心の決定を示す方法として引用するのである

道般の信條を有すると否とが

天眼と野田兵との差

なりてふ根本義に回顧を望む儀である

野田兵自有の靈氣發動して凡人の頭上を行きしこと數回

而して往々我知らず退轉する有り

退轉の時は即ち畜策稍々成りて夫子頗る得意の時なりけるよ

息を屏け巧を致して。或る程度まで當世式を利用し。乃ち期し乃ち必す。而しで竹の曲げて入るは。風の自ら入ると同じからざる如く。曾て圓通無礙の活味（自ら先づ局し、限り、斷じ、意を立て、我を貫くが故に）を體せざるの致す處折角の處世成功の苦計も畢竟するに半上落下、木梢接竹、且つ期する所を愆り且つ必するに違ふ。

其根源や夫子自己に在り

而して自業自得を思はず不如意に會ふて且つ嗟し且つ憤り拂亂焦慮して而して今度こそ〳〵はと再び又三たび又四五六七たび。例の如く新なる畜を自ら描いて此通りに〳〵と期し且つ必するを復習す。而して遂に獲る無き也

ア、獲る無きこそ幸なれ

若し夫れ獲て而して安んせば野田兵到底タヾの人間のみ。福なる哉獲ざるに因て煩悶し激勵するの處正に是れ靈氣を喚び來る唯だ是れ此個處のみが我黨との深緣已む能はざる所以なり

なまじ西洋方式に沒して學識を呑みしが病なり好んで生帳面にし窮窟に做す去り迚器械的處世及び心法に終始して年の將に老ひむとするを忘るゝ迚の博士や村夫子の如く良民的習慣を成す迚にも格らず三分の覇氣三分の正經而して四分の煩悶

是に於て豪傑の賦性は肉に發して滿々脂肪徒らに饒く血氣乃ち心を衝いて燥氣と獨斷とに偏せしめ

打捨て置けばドーかなる

明日は又明日の風が吹く

と云ふ餘裕を留めず

ドーかなるの意義と明日の風とが解る迄には獵犬の如く山野を周走して而して後の事と爲る、、、ココまで書いて休むこと三日、此三日は予が謹慎の時間なりき所以は云何といふに予成道を自覺して吾と同じく成道す可く發心せよと促がす此書ながら成道のホヤ〳〵に付能化者命令者の口氣を以て此上書き進む事に聊か氣怯れを生じ此三日間に千思萬考せり

更に書き續けるぞ

戸町カル、ス温泉に猶臥して嵐氣に身を撲たせ

38年七月十四、五日

初て一佛成道の格を以て汝野田兵に告ぐ

鈴木天眼

釋迦は三十成道、予は三十九成道、九年は天才の差也汝予を信せよ

手短かに謂へば

予は今日始めて自己を證人として野田兵を濟度す可く手紙を書くの氣に爲れり時間を得たり時が來れり

新聞は是れ予が精神なり

只だ俗を攝するの意を先とするが故に詳說して却て頓語を誘ふの妙文を缺く

而して已む能はず

只管に予が一心能めし所の眞處を知れかし全幅の氣力ココだ此外に言なしと云ふの處を享けかしと祈るのみ

社の景氣がドーだコーだ抔は實は世間にお附合に考へたヤネを爲し居るのみ

實は天に由りて晏如たりコノ究竟の處を同じくせば足下が遊び居る位の資は其儘苦なしに出るワケなりし也

初めて手紙を書きに掛かれり予は故郷の養父にも東京の姉にも戰地の福島にも星にも本年未だ一本の手紙を書かず

酒のむ暇あり妓に從ふの時あり而して皆養生の一法なり務メとしては手紙抔書かぬ程に心法上盡瘁

を極め居る也

新聞は其面影なり

手紙を足下に書くの時は即ち足下の病を治するの時也

病や遠し

而れども深からず

先づ書生時代に薫習せる

赤門式博士式良民的明治婆羅門式パリサイ式

凡そ以て日本人に感心さるゝ全部を否拒せよ而して心靈現實主義に復せよ人は天地なり心身は一なり

是れ現實の事なり血多ければ時に一發放つを要す是れ南無妙法蓮華經也

小人の必は足下の心臓の周圍に時ならず血氣を激張せしめ又時ならず冷却せしめて健全の調和を破る

根本なる[illegible]

足下は先づ

オラア寝て居て喰ふ位ゐの權利を天地間殊に長崎界隈に有す

といふ安心立命を立てゝソシて此處へ轉がり込む氣に成て見よ一々にして自ら必し自ら期するならで

終始天道に安んじて働く是れ成道なり

後に立づ立たぬは問ふ所にあらず爲す爲さぬも構はぬ只だ

成功拙いふ小さい事を意に經ずに面白半分遣て居る氣なら滿洲の野でも病は出ぬ筈ぢやつたが、、

シカシ今や足下の時も漸く來るものゝ如しグル〳〵廻て後ならでは予が宗旨を說くもダメと思ふて予

は足下の去るを見たり福島に對しても同じ樣なりき

予は人の決心に干渉ケ敷しき自己の意見てふ事を强く言はず先任セ也

『必せざれば也斯せざれば也』の發動なり

而して予は明かに知れり

足下等が到底戰地に無事なるを知れり其邊に至りては

予は神の如し人の生命を鑑定し得

足下去るの時病は夙に在りしなり予善く之を知る而かも足下には明言せざりき

予は私かに左右に語りて曰く

猛獸檻に在れば蚤死す

田中侍郎が長崎の如きポカ〳〵する土地に在て油氣のみ喰ふた結果で死んだかと思へば田中はイッ

ツ滿洲にでも行き居れば脂肪と寒氣と折衷されて壽命永かりしやも知れずと常に予は悔む因て野田

も新聞社の机上仕事に屈托したなら屹度心臓が病む

屈托せずに悠々として居れば宜しいがアのセッカチと物を氣にする性分は未々他所で採んだ後ならでは治せず從つて彼を留むるは病を誘ふに均し滿洲戰地が健康の爲め宜しいかも知れない因て留めずと

而して今や成道の後に於て觀見するに

田中の死は天數なりき

我等と與に俱にせしは最好の死處を得る所以なりき

然るに滿洲の冷氣と肉削りの運動は可なれども、、、予は忘れた滿洲の黃塵萬丈の害を算外に置いた

東京に居れば多く心臟病が起るのは主としてゴミと齷齪の祟り也

長崎は此禍根を有せず

野田が長崎に居るは養生の第一方法なり

今や斯くと切に考へたり思ひ當れり

ソレも足下の氣持が一年前のでは何處に居るとも同じく病は根に寓するナレド今や足下は病めり病みては心も折れなむ折れて却て達せよ

成道の大機緣はココだよ

安心立命とは心と俱に肉體が安處する謂也我が神佛と一所になる事也

足下今や病が發したからには之ゞ段々悟る時機に達したる者也

冗肉愚血の累を捨てゝ漸く予が宗旨に近よる可き因緣方に成れり

來れアセラズに來れ

來らむとすればすぐにアセる之も亦病なり沈々として辭任の道を爲せ

『念』として而して意を用ゐず必せず期せず』この信條をば先づ今回の辭任歸崎の仕振からして實驗して見給へ

天啓的と云ふ事の味は此手紙と同時に知る可し春來予が確乎として豫言したる戰局收束の一條は足下が此手紙を受取りて左思右考しつゝ予を信せよてふ語を疑ふ時日中に現證は愈鮮かと爲りナルほど天啓なんテ事も實在する乎ナーと氣が附くに至る可し

この手紙は妙法連華なり

急ぐにも及ばねど自然に足下は我方面に來り得可し

平和はモー出來たと同し

天數の上より見て日露戰爭はスミ也

今日にも大陸戰起らねばならぬに拘はらず

其は起るも可可起らざる亦可

奉天戰と日本海々戰と此二ツが日露の決勝戰なり其レ以上は餘戰なり我の効果を收むる所以の方便戰なり戰線如何に廣し迚开は巨戰なり而して大戰に非ず

足下はモー一度彈丸を潛るも可なりシカシ潛らずに講和が成りさうだ

精力集中の大義の爲めに否大業の爲めに必ず我社を本とせよ

單行獨意ア、是れ小人の必に驅られたる狹量の結果なり是非とも命をとる病ならば吾等の傍にて愉快に死ね

予が妙法主義に學ぶこと五年なれ而して後に

大自在力を得む

予は之を獲たり今や得たり今後は世俗の目に見ゆる

『成功』と雖ども

我辭せじ

其は此方が別段好きずとても勃焉として成功が持上がる也

是からは金も少々は寄つて來て都人士に田舍の仕揚げを示す事も出來やう決して病軀を搖ぎ込んで厄介を掛けては抔と例の窮屈主義を抱く莫れ人は生れ乍時に生存の權利と義務と兼帶し來るなり一所に生存じて食ふて行ける迄行かうと決心を起せばどこ迄も行ける也

講和談判はチト揉まうけれど世人の意外にハタ〳〵片附くさ予は八月二十二日大半落著すと期す

畢竟我等の任務は是から也

精力集中主義に由りて教育、世風を新興の活方に革むるに非ずんば如何に巨大なる戰果を收むとも开は伐なり

王者の師は我黨在焉

予陰裏に瀕する三十年、色を漁するは肉を御して神を長するだけの事で實は、、、、而かも漸く肉の方面を整理し得る時も來らむとす足下の肥大豪壯と正反對の予が日に日に健剛を加ふるは精神力の現證ならずや亦一考を要す

連すれば万々也以て衆を攝するに足る況んや自己の心身を攝理して常命だけ生きるくらひの事をや器質の病症と雖とも之を轉換し得る處に妙法在り

但し衆生は多疑なり現證せざれば受用せず足下も亦衆生の一人也

今日は所化たれ

明日は能化たれ

娑婆即寂光淨土てふ現證獲得するに專心せよ予は其證人なり

證人としての予の面影も精神も言語も事實も總て吾新聞が其なり

春來の吾新聞が念力籠めし通りに戰局及び平和が成行いたならばッ〻時は神靈實在の證人たる予の无虚妄を認めて宜からう認めたら予と俱に拜め唯一絶對靈に歸依せよ予が成道に私淑して發願と實行とを成就し給へ唯だ一の信字は即無量の神力なり

向後は着々事實の上に示す許り也予は再び講釋せじ、する要も無し、、、。(以下は普通の私信に屬する故略す)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上の書簡は。原文の冗長なる所を二三箇處削除し。又第三者に示すに當りて難解なる處へ數句挿めり。吾等立命の姿は讀者の心に會すべしと信ず

世上近來、惰弱書生の煩悶てふ事流行し。學者亦流行的に濟度の文を作る。而かも書生には受敎の敬心なく學者は能化者たるの眞氣、確信、權威及び『世相の如實知見』を有せず。作文的賣理的に云々する而已。俗惡なる平等の氣習は斯くの如く童蒙の放縱に徇へて。器械的の講釋を再三して。以て天道眞理を潰す。

惰弱書生の自稱する煩悶は。說明の限りにあらず。宜しく先づ彼等に痛棒を下して後申聞けべき事に屬す。然らずんば宗敎も亦軟派文學の如く娛樂淫戲の具と同視されむ。宗敎の立言者には所化に對する精神的莊嚴及び權威なかる可からず。

剛毅にして有爲なる親友野田氏の煩悶を救はむ迚。成道の發心を勸告せる予が文は。立命より出つる化導の標本也。徹頭徹尾。本氣の筆なり。一々にして事上の方法書なり。當世流行の作文的賣理的立言とは全く選を異にす。則ち識有る人の眼には。此文蓋し野田と鈴木との間の私書にあらず道此に含まれむ。故に錄す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて如上の手紙を友人に送る程に。心身の寛ろぎし三十八年の七月は去りて。早八月上旬。ポーツマウの小村ウキッテ會見の期日如何と待焦がれつ〻。戰爭繼續論が紛々として政論上を賑はせる時と爲りぬ。時に予は縣下大村聯隊の催はせる招魂祭にと赴く。蓋し予は。世間が如何に戰熱に搦むに拘はらず。沈々乎として此月(八月)中には平和必ず成立すと確信し。所謂地天泰は一八の數なり。

一七より云へば。八月一杯にて。開戰以來一年と七個月此は正に合ふ筈。月の數は十九個月。

一八は合せて九。故に十九個月の此九を外すまじ。

八月二十九日は。八二九合せて一九なり。亦此九と合ふ。

因て一七、一八、雙方ガッチリ合ふ所の此八月二十九日を以て平和談判成立の期日たる事は天算なりとすと。

獨り心中に定め。恰かも『一七、一八の亡者』たる如くにて。八月一杯が待ち遠くて堪ちず。乃ち心道りを兼ねて大村へは赴きし次第にて。モー其時は忠死者に對し。諸君の力にて平和は大丈夫克復する

よと告げたる心情で有たのである。

爾れば此時は。若し豫言が遂はぬ乎抔憂悶すること無く。愉快に祭場たる放虎ヶ原を倘徉したるが。心柄にや平和必成の靈驗が此時色々と予が眼前に現はれた。

放虎ヶ原兵營の廣場に。觀せ物駢びて喧すし。取別けて日露戰爭の覗き目鏡に人群がる。カラクリの主は夫婦者にて。婦なる者の口上誠に節面白く。聲の續くこと夥し。爽むれば玻璃珠を戸板に轉がす碗喇とも謂ふ可きか。延べ續けに喋ることと。カナリヤに勝る音樂家なり。吾一時間ほど聽きて佇立めり。然るに翌日は此カラクリが予の旅寓乾物屋の前面なる大神宮入口に店を出す。相替らず大入なり。予樓上より望み見て再び此音樂を聽かむと。之に趨く。聽けば矢張り新たに面白し。東京なちは差向き掏奴に狙はるゝ顏容にて拜聽す。

斯くの如きもの三十分にして戻る。

戻りて路を跨げば我宿なり。美音の婦が張上げし文句に引かれて背ロを顧み。始めて奥なる大神宮に心行きぬ。唯見れば大神宮の御鳥居は明治十年七月の建立と銘打たせ給ふ。是なむ予が念せる一七の註文に符れり。這度我其正面なる家に宿りしも。何等かの因緣にやと。爰に里ごころが附きて。神殿に詣づ可く引戻す。

鳥居より神殿までは、一町餘にて。神殿近く內門立つ。內門下に到りし時。背後に餘興の出し物來る。顧みれば長崎名物支那傳來の蛇踊りにぞある。蛇か龍か。青鱗銀爪紫晴襄髯の姿容纔かに雲雨を闕くのみ。一騰一伏地を動かし。空を弄び。早く既に予に追及す。

蛇踊りと云ふもの。予長崎に住むこと久しき割には御無沙汰なりき。此日初めて大村にて實物に逢著す。

唐人姿の者、張籠の龍蛇の腹に支柱を具して手に手に持つ。龍の前に珠持ありて揶揄す。珠を取らむと龍の飛躍する趣搏なり。珠持の珠或は低く。又高く。時に左りし又右す。其都度龍は頭を挺して追隨す。故に珠が忽ち丈餘の高さより土塊に來れば。龍頭も又土を掠めて。己が腹を潛り尾を蟠かさせて。縱橫屈伸す。一緩一急毎に。銅鑼叩き附添ふて音調を擒縱す。其振舞却々に凄さしい。

予之を望み見る間に。龍は近づくに從つて昂然たり。一飛冲天の氣概太だ物々し。早一二間の彼方に仰ぐ頃。予猶然として懼る。斗は龍蛇の猛勢は戰氣の餘烈を表する如思はれ。此分にては八月一杯にて平和完成すること如何にやと妙に緣喜を取りし故なり。乃ち正視して以爲らく。龍蛇め不屈なり我面前に斯く逞しげに飛騰するは平和の祈願者を無視する乎と。之を睥睨するソノ瞬間に早眉間先きに來る。來れば則ち豈測らむや亢龍は忽然として地に伏す。予訝かり見れば、ウハヲ內門を通るには。上の問へる恐あり。便ち龍頭を垂れしめざる可からず。何の意味も無し。

珠持は其爲めにこそ急に他を地上に導きしにてぞありける。

猶躊躇なく龍は進む。予追はれて急き神殿に上る。殿前の廣馬場に蛇踊り初まる。開闔轉合の妙は珠持の手練に在り。幾十巡の間鑼鼓の響を和して。轉た耳目を娛しむ。予之を觀つゝ。不圖龍腹を支ゆる唐子を數ふるに。正に八人なり。珠持は則ち獨り離れて一人なり予茫爾として獨語すらく。爰にも亦一と八!!

乃ち大神宮を拜みて還る。

又旅館かんぶつ屋の前に戻れば我社員山口氏長崎新報特派員久保田南畝を伴ひ予を訪ふに會ふ。南畝新に上布の羽織を著し紋殊に目立つ。蓋し九曜星の崩しか●●●外邊は八星、中心は傑れて巨大なる一星なり又としても一と八。予に取ては此場に於ける誂へ向きの縁喜とす。乃ち兩氏を拉して當地の旗亭平木屋に赴き與に大に飲む。予言らく是れ平和克復必成を祝する前祝ひなり。二君請ふ予の微衷を憫れめと。乃ち例の一七、一八を說き夏の夜の未だ宵ながら明くるを知らざりき。

餘興の蛇踊りすらも我信念に引附けて解釋する程に平和に凝れり。而して贓に斯るタワイ無き事をも靈驗と心得つゝ八月の下旬の到來を待てり。嬉しい方の一日千秋の思は。す生來、此時が初めて也。斯くて歷史上の巨大なる關節は來りぬ。日露兩大帝國の戰爭を終熄せしめるポーツマウス條約は成立しぬ。神靈の實驗=靈魂の自照=宇宙の元原的生命の證明=事上成佛に到る獻身的信行の大段落を成就すべく。予の瑞言通りに平和克復は成形しぬ。時正に明治三十八年八月二十九日。

* * * * * * * * * *

十六。二十世紀軍人の最剛絕眞の精神

ポーツマウス條約成立後の國論沸騰は。永久に同胞の腦底に刻み込まれて。今日も尙ほ眼前に視る如くなるべし。當時の予は定めて扇の要メを射貫きしソノ瞬間の那須與市と相似たるべふ。渾身の氣力は我知らず弛みしならむも奈何せむ目前の非講和騷擾に對しては。單騎にて長板橋上百萬の敵を防ぐの勇を學ばざる能はず。乃ち予は斐然として平和克復の擁護者を以て自任し。天下と逆行して立言の天權を貫き爲めに執筆は十段以上に及ぶこと日を連ぬるに至れり。此は平和克復を妙法蓮華經として體しける當時の予として。此經難持の佛戒をば親しく驗證する所以にして。縣下聯合の四新聞が念佛、禪、眞言、律の四宗が日蓮上人を包圍攻擊せし如くに。予を攻擊し。予一人を目蒐けて誹謗讒搆の焦點とし。或惡黨は。横濱から神戸まで傳染しける燒打騷動をば長崎に再演せしめて。東洋日の出新聞社を大地に迄破壞せむと意圖しつゝも。予の法力に得敵す可くもあらで。折角長崎に開きける。非講和九州大會は無意味に歸し去りしぞ佛天加護の現證歟。彼等九州政界の愚なる智謀家等は。却つ

て徒らに天眼の名を成さしめしとは結搆なれ。

此際の予が氣魄の壓迫は。十數篇の大論文として遺れるが。是れ亦成道後の予の位置と行力とを證する者に付。之が中の三篇を左に引いて以て日露戰對法華行者の事境の大圓圓を此に約めむ。

三篇の中の第一は。本章に冠せる『二十世紀軍人の最剛絶眞の精神』と題せる者

（九月七日の社說）是れ也。全文左の如し。

日本の同胞よ。

殊に海陸軍の全部よ。

天が日露戰爭を藉りて折角賦與せる大教訓を讀む莫くんば。爾は復た戰を謂ふ勿れ。平和の何たるを謂ふの權利なるを自省せよ。天は日清戰役の如く國民の稚驕心と華美心と小局自貧の陋風とを生するの爲めに艱苦痛大なる對露決戰を課したるに非ざるよ。償金割地の小榮譽に醉ふて大日本を誇稱し乃ち愚なる華族、頑なる軍人、不實なる實業家、信念なき文章家に小成小爲の明治式官僚氣風を沒入して太平樂を謳はしめむ迚露兵を破らしめたるに非ざるよ。戰局は未了の了也。了の未了也十八箇月の成蹟を標準として物言はゞ爾が自負心も亦甚し。事實上敵國人の規模は鐵道經營に於ても、要塞建築に於ても、大砲の射力に於ても、軍馬に於ても、外交に於ても、鑛業に於ても、巨大なりし也。今日我の和するは。心理的物質的共に一層大規模の國是を確立して酷烈なる努力を將來に傾注しての上ならでは彼れ露國を屈服可することゝ易からざるに由れり。勿論此を繼續戰せば我の精力不盡なるの致す處幾層の打擊を彼に加へ得ること必せり。而れども和して而して戰の志を持さば我の精力は長發の途に適するが故に。過大の犧牲を今日に急とするは智ならずとする而已。

援々の徒が非講和を說くは腐の下より出る聲としも覺へず。恐らく平和病より生ずる一時の悔恨と自負病に根ざす客氣の發露のみ。議論より實を行へなまけ武士、國の大事を餘所に見る馬鹿』誠に大陸建國の神髓を解して之に全幅の精氣を集注せば。患は寧ろ內地に在りて必ずしも外敵に在らずと開悟せむに。不實の政論、不實の官民を此儘看過して國家及び敎育と社會氣風との大革新とを范々に附する白痴輩、畢竟何の邦家に益する者ぞ。外交失敗が口惜しくば先づ一鄕一村より淸めよ。日本人銘々が世界的規模に副ふべく道義と生活と智識と努力との標準を向上せよ。賢を拜し道に聽け。外交の失敗は日本魂の蒸發を防ぐ最良の淸涼劑なりと覺悟する程に眞摯なれ。戰時に限れる士氣の興奮はお殿婆的愛國婦人會に一任するも足れり。和戰の兩時を一貫して國民的精力の全剛を持するは小學の敎員も市町村吏も學生も我輩平生の主張を眞面目に讀みて心より感愛し己れに克ち禮に復るの時ならでは期す可からず。曰く奉公、曰く忠義。斉は國民が國家に對する限りの事のみ未以て自足す可からず。國家が世界に對して我の志業を貫くの道は決して爾く單純ならじ。縣廳より

賞杯等を頂戴する以上。更に世界列國の金と智識とを我に集注せしめて而して世界の人より畏敬されざる可からず。是れ國民個々の務めなり。

世界の馬數は八千萬餘。而して東洋は内一千五百萬を有するに過ぎず。餘は皆歐米人の使用する所に係る。一例以て萬般の規模の大小を知る可し。我軍若し騎馬に富まば。奉化のリネウキヤを今日迄は活かして置くまじかりしをと回顧せよ。

臓に精力集中の大道を理解して國民將來の大發展に献身する決心あらば。今日更に、新たに、大いに戰ふも亦可なり。而して和するも亦可なり。我等は前後左右八面を見透して此際の平和克復を智者の計と爲す迄なり。平和を獲て姑息せむが爲めに非ず。平和の後には内國の大革新無かる可らず。軍人なるが故に武骨一邊にて可なりとふ樣の稚想は最早世界が許さじ。軍人最も新智識を蓄へざる可からず。平時なるが故に外交軍事の思想を沒却して新聞屋が殼騒ぎする者と心得るは。國家生存の本方と危險を度外視せる無精神學問の餘風のみ斷じて之を排斥せざる可からず。

和戰の論は空談のみ。和戰兩つながら可なり。只だ本氣本腰に大陸建國の本方を知れ。而して實行に努力せよ。

西洋の新聞ならでは手にせざる習慣なり迚自ら誇る樣な崇外自屈、無精神極まる伊藤博文の徒より無殘に感化され拔きさる滔々たる都門人士は東洋日の出の立論が西洋大家の說てふ銘を打たざる爲め左程にも信仰せざる也。而れども時は今や日本唯一の此立言家に聽かざるからず。眞の文は時として武以上なり。

我輩は便宜上、此に歐米軍人の最新思潮を紹介し並せて外國人が如何に日本人の外交に於ける地步を觀る乎を傳ふ可し。我輩は講和談判成立迄は務めて邦人の弱點を謂ふを避け。只だ平和成立の曉には必ず日本人が日清戰爭當時に得たる癖を再發す可しと憂へ。乃ち平和克復談に於て切々隱々に外交軍事の綫を說示し以て邦人の心眼を啓かむと丹精を供したり。而して都門の人士は。未だ之に聽いて深く省みるに至らず和報到りて滿都騒然。而して。沈勇の概を缺き我輩をして其稚弱を憫ましむること依然たり。今は默過するの時に非ず。因て我輩は忌憚なく茲に宣明す。

客月中旬米國軍用船セーリダン號は當港に來れり。該船はマニラより米國への歸還兵を搭載せる者にして。之が指揮官は聯隊長ソーガモウン大佐なりき。我輩は當時特に氏を長崎ホテルに訪問し。恭しく氏の意見を請へり。我輩の眞意は北米合衆國が日露講和を周旋しつゝ在る此機に於て殊に米國の陸軍卿タフト氏等が日本を觀察し去りたる此時に於て米國軍人の意向を察せむとするに在りき即ち我輩は

タフト氏等が如何に日本を讀みし乎を大佐の談話より讀まむと欲するに在りき

ソーガモウン大佐は語りて曰く

今日以後の世界的問題は。人種融合か人種對立かにあり。畢竟國家の主義も社會の目的も人間生存の理由も。共に此二問題の何れかを解決せんが爲に益々其勢を增大し。非常なる混亂騷擾を起さずんば非す。而して世界列國は國是として斯主義を標榜するとせざるとに係らず。各國特殊の正面或は關聯的解釋を斯問題に試みんと期しつゝ大競爭を爲す可し。凡そ國家と稱するものは。人種若くは種族部分の歷史結合を爲すものなれば。其結合上の歷史を系統ならしむるに力を盡すなり而して。其力を盡す結果は

最初に於ては平和上の戰爭を爲し繼ぐに戰爭上の平和を爲す最後に戰爭上の戰爭を爲す

斯三提議の中に就て前二者は。何人も容易に解し得んが。戰爭上の戰爭てふ辭に至りては米國人若くは古代羅馬人に非ざれば十分に解し得ざるなる可し。戰爭上の戰爭とは一點の慈悲も無く。敵を最後迄其敵か絶滅する迄急迫せよ降服を許す勿れ殺せと云ふ事なり。即ち一厘一絲の差を一分一秒にても已レに對して有する者は。決して其者が屈服の後迄も許す勿れと云ふ事なり。是レ或は野蠻の言の如くなるも。世界今後の問題を決する爲には是非已むを得ざるの事なり。然れば此目的を達せんが爲には。世界各國は一面自衛すると共に。一面反對者を併呑せん爲に益々武備を講ずなる可し。

大佐は斯く語りてシガーを濟し記者に批評の一言を促す者に似たりき。記者は應えて曰く。

然り。將來は歷史以上の歷史無かる可からず。此意見に於て軍人以上の軍人は記者以上の記者を滿足せしめたりと

斯くなむ理解を表せりき。

嗚呼『戰爭以上の戰爭』!! 何ぞ其言の雄大にして深刻なるの至れるや。之を理想として極力事業に盡瘁する米國人や眞に欽す可し。彼が人道と平和とを標榜するは世界を呑の氣を藏しての上なり。之と同時に先天的精力强靱にして善く米人の這般の抱負を無意味に實行しつゝ在る者は露西亞人是なり而して轉てや維新開國の際、西洋文物の輸入を國是としたる餘波として國民生存の第一義までも動搖せしめむとし。外人の口吻たる平和人道を眞似して其精神に及ばず。戰爭は他國人の爲めに商業の路を拓ぐお先棒たるに止まりて怪まず。外人の我武功に對する賞讃と多少の償金割地とを獲れば則ち輙ち滿足して國家の利權と占領地とを國際法の生學者が手習草紙に供し去りて怪まざる所の明治式日本人は這般の雄大なる『戰爭定義』に關かる莫し。

伊藤山縣井上松方大隈等が平和戰爭に沒心して而かも其眞効力を擧ぐる能はず、往々已むを得ず他動的に戰爭の戰爭を試みつゝ、戰爭の目的が手前の名譽と外人の同情てふ者に在りて、國民の精神的戰爭をば第二の必要と立つるこそ明治式官僚の套局なるが。學者も記者も這般の套局を躍脫する能はざる爲め。戰爭と云へば必ず平和の爲めてふ口上と與に根性迄が平和に腐るゝを免かれず。甘

柔にして迂疎なる所以の根源なり。若し夫れ戰爭以上の戰爭てふ事を終局の大責任と覺悟する程に智見開けなば。モット話が大きく意見が世界的なる可き道理なり。日露戰爭の和局如何の如きはコリヤ些細の內證で國民前途の志業はトテモ〳〵リネウキヤを遣附けるの、遣附けぬ內に講和するのと云ふ小さな場面と仕事が孰方に轉ぶにせよ硬の軟のと差別する程の價値なき者ぞと悟るらむ。

我輩は現時の群論が戰爭てふ者を土臺から輕視する癖あるを知る。此癖は國家の歷史と生存を系統的ならしめる點に冷淡なる所の支那人と云ふ弱敵に對して生憎勝利したりし其餘映なり。而して今や戰爭以上の戰爭を祖先以來の魂性に刻みたる露西亞人を相手としても尙は輕々しく非講和を叫々する所以は。眞に永遠終局の人種的全勝を念すること至らざるある爲め却て造作なく强がりを謂ふ者と思はる。左も無くば今日を外にしては最早戰爭の期無からむと惜む筈なく。又一層眞摯沈痛に立論する筈也。

元老と大臣とは政黨の使ひ易きが爲めに政黨の罪惡を恕し且つ助長す。野心家は亦新聞の使ひ易きが爲めに新聞の不實無誠意なる賣文記事の賑かなるを利用す。斯くて朝野共に和戰を金切聲以て議し。軍人は即ち剛處厚きが爲めに剛味有る世論を喜びて。未だ武力とを國力とを擧げて世界を圖る所以の全剛に迄達せしめむにはこの時は和するを以て長計とすと深慮するは稀なり。彼等は體面と意氣との爲めに切齒し泣憤す。而れども感情を容れ得る間は尙は餘地有る思想なり。戰爭以上の戰爭は絕對的に力量の問題なり。精力集中の極に非ざれば克つ可からず。而して前途に之を念するの時は口尖ばかりの新聞論に煽動さるゝ暇ある可からず。和議成るの日は即ち氣魄却て百倍するの時たる可し。

國家興亡の大機たる和戰の決をば正しき而して深大なる戰爭の定義だも心得ずして左否し右諾する徒輩は武運の神に見離さる可し。即ち元老閣臣を首め有らゆる官僚の和に醉ふと同じく。民間群論が主戰の熱を吹くも亦同罪なり。彼等はワザヤ氣味なり。大臣の首にして斬る可くんば。妄りに國亂を煽動し大臣暗殺を誘導し商賣敵キの國民新聞打壞しを紙上に慫慂せし萬朝報黑岩周六の如きは眞つ先に身首處を異にせしめざる可らず。

讀者よ米國大佐の戰爭定義は戰爭を安買する人々に至極の啓發を與へずや。而して大佐の談が更に適切なる近事に及ぶに於て讀者は我輩と同じく感興を深ふせむ。

大佐は更に語りて曰く。

解し得ざるは日本人なり予輩は極手近に其例を有す。

一箇月前ならざる時タフト卿は日本に來り此長崎を通過せり。

而して日本は今露國に勝ちて世界に雄飛せむとする首途に在りながら。精細なる觀察をタフト一行の目的に致さゞるなり其證としては第一に日本の新聞氏の總てを見よ。タフト卿一行の著前よ

り卿とローズベルト嬢との傳記逸話を紹介し。其來るや。二人者及び二人に同伴せる人々の晩餐に出席せし事と、二人が贈られし花瑕の種類とを記するに止まりて。一切、二人が何が爲めに比律賓に赴くやを觀察せざりき。彼等一行六十人は滿洲に勝利しつゝ在る日本人は斯くの如き者とは豫想せざりしなる可し。米國は日本の面積に二十倍大なるも。日本人の如き人を容るゝ一インチの土を有せざるなり。

タフト卿の乘船は二十一個の船室を空虛に殘せりき。東京より一人の伴ひ來らざるを怪まずとも神戸以西には日本人の同船してタフト卿を觀察する者無きは奇なり。

予の此說は＝日本長崎より直航三晝夜半にして達し＝日本と滿洲と＝又日本と亞非利加と＝日本と南洋との中心點たる比律賓に對し日本が何等の關係を有せずとならば幷は不要の說なり。

然れども日本人は兎に角に。世界の人は日本と比律賓なる二名詞を解釋して古代の希臘とクリート島の如き關聯に在る者と爲すなり。然らば人心を啓發指導すと稱せらるゝ日本の新聞紙にしてタフト卿一行を迎へたる態度中に

ヤンキーガールの畵を揭げる外能事なかりしは日本人の心を知るに苦む所なり。

扨日本人は外軟にして內剛なり。と云はば予は何事も言はざる可きか。今後の世界文明は取りつゝ守る堅實の者にして突飛の者に非ざるを予は日本人に告げ度きなり。

タフト一行中の元老院議員比律賓に著するや其親友に（大佐自身を指す也）語りて云へり。

予は日本に於て眞の友とす可き一人を見出さゝりき。今日日本の地位にて吾等に世辭を呈せざる者は吾等の眞の友なりと

是を以て予は云ふ日本人は飽まで藝人なり。其技妙に入るも總ての人に媚を呈するを忘れずと這は侮辱の言なり。誹謗なり。怨せよ

之に對して記者は。

日本は新進國にして若き人の多くが事務に當る故。タフト卿等に接せる彼等はローズベルト嬢の美に呑まれしならむ。美は文明の要素ならずや

と謔語一番して。纔かに他の機鋒を轉じたり。然れども大佐が剛語は眞實より出たる述懷なりき。大佐はヤーンキー、ガールと云へり。此は亞米利加娘と言放せるなり。而かも嬢の寫眞と言はずして畵と云へり。日本がジャラクラと取捲く狀の如何に苦々しく此武人には聞えしよ!!

要するに日本は餘りに『拵へ事』を好めり。元老宰臣と役人と婦人共と人民とが餘りに形式と標致とに心醉する結果として彼等は己れを以て人の心を推し。行列と御神輿とゴテ〳〵の手數とおべッか連勵とは己レの心に＝否恐らく心迄にも及ばず單に感感或は視感に於て＝觸り方宜しきを以て他人にも外國人にも一樣に然る可しと思惟する通有性有り。其邊を宜しくする小才が成功とか出世とか

云ふ事と爲りて明治式套局茲に凝成せり。此套局は渾ての事業と言論とに無精神を誘致す。而して新聞が戰時に於ける財政及び外交問題をお留守にして女學生問題を專門とせし所以の輕薄は亦此に根ざせり。

閣臣も元老も民間實業家も拵へ事には國際の大難を左右し得可しと思ひし其が即ち外交軟＝否。實は無外交＝の本因なり。大事と恃む米國人から斯く迄安く見らるゝ以上は。小村全權一人が如何に奮勵すとも米國の援助は或程度以上なる能はず。從つて出發の際とアテが違ふも亦自然の結果ならずや。日本國民は自省せざる可からず。伊藤井上大隈等の作りし『虛僞の取做しが出世の種』と云ふ處世方針を根柢より否認して個人も國家も唯だ自己の精力に由るてふ信念の下に。教育、世風、事業、外交萬般を振作せざる可からず。

大佐の一言を聞きし時の我輩の心中如何なりしと諸君は想像するや。霜を履むで堅氷到る、嗚呼ポーツマウスの舞臺も已みぬる哉と迄我輩は歎息したりし也。

日本人よ祖先傳來の金剛を心裏に喚起せよ。爾る後和戰共に可なり。這間の眞氣魄は西鄕南洲等之を武に於て維がむと欲して而して志未了に終り。我輩初めて『非明治套局』を喝破して此志を文に於て繼がむと欲するの實際事也。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

十七、官僚政治打壞と和戰是非の本末（九月十日の我社說）

ソロ〳〵而白き時節に成りました。

輩穀の下が無警察の闇境に陷り。近衛兵を以て宮城の四門を固め。乘馬兵が大道を巡邏して纔かに放火爭鬪の取締を爲すに至れる抔は近來の怪事です。

東京の人間には良き樂です。

上野の戰爭を大戰爭の如く語り詭る東京人には過日來の騷動が鬼の首を取た程の自慢の種と爲り同時に狼狽錯愕して今にも天地が覆る樣に感じたで有らう。

就中、舊幕の太平武士の驕奢と縟禮と格式とを、其儘明治に傳へて。內閣の役人等が殿樣然とし。元老が大老然とし。能樂ぢや金溜ぢや密妾ぢやに耽り。已レに媚び我に賄賂する小才子や黨派や商人のみを味方として世道人心の汚隆てふ事に一點の用意を拂はず。可憐なる軍人の血と骨とを以て獲たる戰捷をば自己の功名榮達の材料に供するに汲々とし。其癖外國人から愚弄され乍ら。恥を恥として自ら天下に謝するの誠意を有せず。凡そ敎育、經濟、世風等國家の根抵力に關する主義と施設とは極めて淺薄にして。其日暮しに甘んじ。猶且つ國民に氣休めを與へて大日本てふ自負熱のみを增長させ。而して皇室に忠なる所以の民心を己が政權私握に利用して。官僚崇拜の陋習を積成し。

傍ラ政黨及び新聞の自墮落、險猾無精神を馴致し。以て天下は私意私計の拵へ事を以て永久に左右し得る如く心得し彼等明治式の官僚。及び之に半ば同化せる民間知名の士てふ者等は。嘸や喫驚仰天して今更の如く呆然たりしならむ。誠に善き戒メ也

土臺、薩長の元老等は誰彼と選ぶ迄もなく。根本の精神が不屈です。心の持ヶ方が新興國民を率ゆべく出來て居らぬです。爲す事がウソです。

而して閥臣は元老を見習ひ。庶僚は大臣を學び。實業家と稱する輩は。彼等の陋風を利用して儲け口を作り。政黨と稱する徒輩は元老の下風に立ち。慈悲を恃みて成立し。新聞と云ふ者が當座の風潮を商賣に轉用するを主眼とする故。外交と財政と產業とは眞の力有る發達をせず。日本人同志では水掛論にて長短を別つ場合もあり。偉い人物と映る事もあらうけれど。元來標準を島國の中に置いて一是一非すること故。到底團栗の脊競べで。毎度、外交の大失敗が起つてから後に憤慨したり言譯したり爲す次第で。

只だ當路者を攻擊すれば其人はエラさうに爲るが。扨誰に任かせたなら。何人の經綸に聽いたなら。國政が本當に立直る乎と云ふ實際事には及ばず。只だ事後に紛々として相議する丈です。

戰時の財政、軍事、外交をば殆んど全く不用意、無詮議に委して何等の意見も立たざりし政客や新聞屋が何の顏せ有て國民を此上にも多く殺す論を唱へ得るや。彼等が已レを省みずして猖々として吠ゆるは。不實、無誠意も亦極まれり。ココで更に新たに大戰を實行する時は。戰費二十億、死傷三十萬を出すこと必然たるに。斯くて今度は外交に必勝し償金割地共に充分なり得可しと云ふ見込が有て。其見込が筋の立ち居る見込たる事を精しく示しもせず。否。示す迄の識量を持たぬ癖に。何を恃みて國民の血を要求する耶。

死ぬ者は軍人計りぢや。

政客と新聞屋は遠吠ぢや。

屈辱的講和は死者の忠魂を慰むるに道なし迚彼等は神の如き戰死者を引合に出して云々すれど。然らば此先き戰ふて今迄の三倍の人が損じるソノ大痛、慘絕の成行に對して今後の死者が浮び得る程の外交上の方策は何乎と問はれて。其邊は何等の考案も御座らぬと言ふて。其で是から死ぬ人々に申譯相立つ耶。

元老も不屈なりや閥臣も政黨も新聞も一切不屈である。彼等はフザケ腐る。

元老閥臣の責任を問ひ彼等をして政權返上を行ふこと德川慶喜の維新當時の如くならしめるは至極結構なり必ず之有らしめざる可からず。シカシ此は此なり。和戰の議は國家が外に對する問題にて內輪の問題とは違ふなり。

元老や閥臣の爲めに國家の體面利益を誤られ外國人から馬鹿にされたから此儘に捨置く能はずと憤

るは國民の至情なり。這般國民的精神の彈力だも喪ひなば日本は戰捷後に亡滅せむ。我輩誠に之に同情し之を悅ぶ。

而れども民間の躍起組は大義名分を誤りて居る。非講和と云ふ如き弱い音を吹きては達人與みせじ識者笑ふ。

惜む可し彼等は後と先を取違へたり。討幕の實力實勢を後として攘夷の空論を先とせり攘夷を謂はねば弱しとされて。事が行はれざる恐もあらう。けれども开は考へが古し。而して小さし。露國の有志は自國の敗戰が官僚政治の積弊に基く所以を自覺し。先づ內に根本を洗ふて而して後に外に向はむと期して居る。彼等は却々强い。彼等曰く。

官僚政治を打斃して皇帝と國民と直接一致して後に大いに戰はむ。其迄は馬鹿らしい人命を捨つ可からずと。

日本の憂國者も亦。今度の外交大失敗は薩長元老及び之に學べる惡き官僚が國政を私するに在りと信じ乍ら。何故に先づ崇外自屈、無精神の明治官僚套局（忠勇即ち戰事に關する美處は別なり日本は軍隊丈が本もの也）の一切を破壞するの急を叫び。其方面に實行を遂げ眞正國民的政府に仕換へて後に對外の本事に取掛ると云ふ勇氣と自信を發揮せざる耶。

誠に深く屈辱を感じて外交も國政も此儘では如何樣の破滅に陷るやも測り難しと憂慮して國政の革新を自任せむ曉には。外より內が急務に付き。又此儘戰はゞ人を殺して多く勝ちて却て結末が怪しいから。猶更以て講和が先な筈。是は維新の英雄が範を垂れし通り國家の中心力を固める方が對外の第一急務に付き討幕が主眼たりしと同じ。

今回の平和克復は恰かも維新當時の開國で有る。國家の精力集中の大機を啓く根元である。平和克復は同時に內政の總洗ひを意味せねばならぬので有る。

投票を買收される人民と良心を買收される代議士とを平氣で暮す樣な連中が何を贅澤申し居るや。政府が惡ければ政府から化され居る者も惡い。日本今日の絕頂問題は世道人心の廓淸に在り。人々が本氣に爲る樣政界を立直すに在り。而して其は政府政黨を併せて否認し天下を以て。天下の健全なる人民の天下と爲し。上　天皇陛下の御本意に副ふに在り。

一昨年政府が日露協商てふ卑屈退嬰の政策に懇々とし民間の政論を無視して自己一日の安を貪らむと欲せし時は。恰かも幕府が泰平の文弱餘毒に骨搦みされ國家獨立の眞精神を喪失したりしと同じ。故に當時の主戰論は愛國自主の精神の勃發にして安危存亡の決を成す大氣魄である。シカシ今は此精神大いに煥發して國民總立ちの後援と爲り。征露軍の大勝利と爲り了りて。扨講和條件の長短得失の詮議の場合には局面が進んだのである。

利害長短は比較的の沙汰＝或は多少の榮辱問題で。人々の見込の問題で有る。意氣若しくは算

盤問題である。

日露開戰當時の如きは國家の安危存亡問題である。絶對的問題である。

比較的のものと絶對的のものと混同する樣な不透明な腦髓が多いから。外交の深味を解せず。

又本末先後を顚倒して未だ政府を倒しも得ぬ癖に非講和を囀つるので有る。

我輩は對露主戰論には生命を賭して言論實行併せて國家に奉公し。遂に元老等の弱腰を叩いて開戰の大決斷に迄奮發せしめ了りた。此は絶對的問題の爲め國家千載の安危の原機の爲めなればで有るシカシ戰勝と同時に平和克復の方法を念じこそすれ。當時は政府に醐弄されて戰爭を爲し切るかドー乎と觀望し。短評式話柄式に主戰論を行り居りし滔々たる政客や新聞と此上の戰勝餘熱的の道伴レは好ましからず。我輩は斯う思ふ。

今日帝都に於て揮ふ丈の元氣は主戰論成立の一昨年に於て揮ふて欲しかつた。今は時が異なれり政客と新聞とは。軍人の忠死と偉功とに因りて意を强くし。戰爭に因て人の氣が立ちたる其風潮に投ずる者である。飽まで戰ふと云ふ元氣は軍人諸君に於て現在有り餘りて始末に了へぬ所なるに。苟くも文を以て武を補ふ役目の人々が徒らに軍人に阿附して只々戰を謂ふとは何事ぞ。

我輩は內外の軍人諸君に對して左の如く語り度い。自由に爲るならば滿洲軍の將士卒御一統に直面して滿腔の熱血を注いて此際の平和克復は決して我國の武を辱しめざる所以を一人々々に告げたい。此儘の休戰及び平和は諸君の憤慨不本意察し入れども。大石良雄が赤穗の忠士に於けるが如く。諸將は背赤誠雪心の士に時と云ふ事を諭して。後日の本懷を待ちし樣。に今回は心魂に疊んで。逸まらざる事を祈る。我輩が左の如く申したい。

大日本の陸海軍は神武軍なり。其奇蹟的偉功は宇內列國の驚き、畏れ、敬し、服したる事は既往現在相同じ。

露西亞は世界の强國なり列國の一と雖ども彼に及向ふ者莫かりしを唯だ大日本の陸海軍有て之を捻伏せたり。彼が滿洲を呑み朝鮮を脅かし已に北京の主人を以て自ら期し更に我神洲を圖らむとせる邪謀は正に碎かれたり。彼が不凍港を東洋に獲て海軍根據地を作り以て太平洋を橫領せむと計れる數百年來の宿望は茲に挫かれたり。幾十億に値する要塞と大連と東淸鐵道とを日本に献上し、日本の半分に均しき朝鮮を交付し、樺太の半部及び無量の漁利を我に割ける其痛苦は。勝者たる日本が償金を獲ざりし位ひの不滿に比しては。幾百千萬倍なるかを知る可からず。世界の心に於て神の眼に於て日本は全勝せり講和其物が日本の精神的大勝なり大開運なり。軍人諸君の功勞は既に太だ大なり。講和條件が不滿足なりとて精神的勝利に較ぶれば屑ならじ。

諸君決して自ら謙遜に過ぎ自任に過ぎて既に國家の爲めに奏したる這般無量の寶功を卑下する勿れ我々國民は償金は金に過ぎざるを知れり。富は金以上たるを知れり。國家の興隆は內の精

力に在りて外より見る榮譽と權勢とに在らざるを知れり。

諸君自重せよ。將來の任務はお互に遠し重し。一旦の死輙すく任務を了すと思ふ勿れ。死しても任務は尙ほ盡きざる程に此後が大切なり。只だ當路の人物未だ武功に伴ふ程の文臣を得ざるが爲めに、國論は沸騰し。又飽まで非講和を唱へ爲めに身命を捨てゝ臺閣の反省を促かす人々を生ずるに至りしかど。此は默過して軍人に對して濟ぬと云ふ普通義理人情から激發せし者にして。我々國民は沈思の末に於ては。實に深く諸君の功勞＝即ち露西亞が數千里の先よりハシ〳〵と浴せ來りたる侵略の潮をガラリ底から覆へして逆に冠せたる功勞＝をば心から承認し。同時に日本國の肩幅は世界に廣く成りチヤンと位が附き了りし事の實際を知解して。朗快曠達の氣色は晴れし秋空と與に大なり。

人は實方だけには買はれる者である。國も亦然りである。我社創業に際し九箇の信條を宣言したる中に自信力を勵めて曰く。

爾の己身は他人が春なりと謂ふが爲めに春なるを要せず。秋なりと謂ふが爲めに秋なるの理なし

世界の提憚する露西亞を叩き伏せて極東の覇者たる位置に登る戰勝新興の大日本は。講和條件に於て當路者の拙惡を演せしに拘はらず。大牛たる如く國家の貫目は正に大いに

備はりた者で。小村等が平和と光榮とを齎せりと誇る權利無き計りである。國民の不平は當路者に對する不平で決して國家の價値が國民の不平に因て損する道理が無い。而して國民は何をクヨ〳〵して居るや。

自ら侮りて而して後、人之を侮ると古の賢人は言へり。償金を取り果はせずに大讓步を以て講和せし迚。其は大日本國が勝手に付き讓步した者で。日本は外人が一時賞め畏れ閉口する爲めに勝つには非ず。國家の實體を堅める精力集中の方便の爲めには肝癪を抑へて講和する程の耐忍と度胸とが有るからで。大志有る者は小辱の爲めに死せず。家康も太閤と戰ふて一勝の際に講和した例もあり。今の日本が巨大なる支那國を片腕に仕立る迄には。高等女學校の補習科とは違ふて。多少の歲月が入用と承知して居るからである。

上海乞眞營口等の日本商人は。日本の屈辱講和を見て清國人等が輕蔑するに付き。何分怨恨に堪へざるやの趣。本國へ聞えよがしに通信し來り。政府へ面當テを爲せり。是は宜しい。土蛮日本政府の使用する領事其他外交官は六な料物は一人も無い。ソコデ折角の戰捷の餘威を國運發展に利用する機會が無い。例へば新嘉坡の我領事は現にバルチック敵艦隊來航前日本丸が該港へ寄りし際。

三井物產が日本艦隊へ石炭を積込み相だが之を許容す可きやワザ〳〵御入念に而かも正面から英國政廳へ伺出た

領事抔いふ料物は。此類の杓子定規、俗僚雛方、無精神極まる者で。箸にも棒にも掛かる者に非ず。而して其れが帝國の外交官である。土臺『成つて居らぬ』連中とは云へ。苟くも我同盟國の一港に於て斯かる急場に石炭を積む如きは何の仔細が有らう。其邊は秘密の公然で雙方言はぬが花とは稅關の給仕でも解し得る世界の活法である。然るを英國政廳に表向言ふは殆んど腦味噌の有る人間とは想はれない。公然掛合はれてハイ宜しう御座いますと英國官憲が答へる筈の有るか無い乎。其だに分らぬ阿呆が外交に當り居るに至りては。日本は駄目と夙に定まり居らず耶。次に廣東の野間領事や上海の先日辭した小田切などと來ては。到底一國の體面利益を維持するに足る機宜を善くする柄では無い。爾して其が日本外交である。大抵ツンナ者である。郵船會社支店の閑な事務員抔と與に球突きと花合せを爲すのが本務で。土臺國民の發展と云ふ念が無いから。何事にも著眼の有り相な事が無い。

彼等は舊幕天領の役人が金と無事とに倦み居りしと同樣で有る。

ソコで外交官と云ふ者を根本的洗濯せねば外交は駄目の皮なれど。無能にしてガイド式なる人物は所謂明治官僚政治の套局に欽りし男で。出世の種である。是は政府の頭腦から仕換へねば言ふも甲斐無し。而して政府の頭腦から仕換へると云ふ事は。元老閣臣政黨渾ての遣口を否認する有識熱誠の士が政事改革に任せねばならぬ。即ち官僚政治打壞である。

三井物產や郵船會社や三菱抔は。役人の愚を利用して。當らず障らずに儲ける丈け儲け居る。けれども彼等が政治の根本を理める良心を缺きて。口を拭いて澄し居る時は。官僚政治の弊は彼等にも向ふ。政府打壞しの次は富豪征伐とお鉢が廻る。國家發展の途上には。實業家が厄介免レ計り爲し居りては不可なり。彼等は本然の責任を時勢から命令さる。

扨右の都合に付き在外の我商民が講和條件に不服を鳴すは情に於て恕す可し。然れども茲にノーノーが一つ在る。

元來。平和成立の間際に於て我邦人が條件不充分なりと感想し自己の肩身が狹く思ふ。其魂性が無識と無膽力と外聞好ミと形式病との凝塊である。

形貌の上の巨大に平伏して精神的優越を認め得ぬのが亞細亞式の事大氣風で。朝鮮の亡び支那の迷ふ所以の根元ならずや。到底彼等は日本の厄介者である。然るを今償金が取り得ざりし迚侮蔑する抔は。是れ厄介物たる所以の本性で日本人たる者は夙に承知の筈。其を厄介物が其樣に想ふ乎と云ふて我と我氣を降し何やら氣が減除る樣な氣がするとは。臆病未熟の至り也。斯かる時は猶更に外國人の頭上を步行く底の氣膽を示さゞる可からず。內地の軍國的慷慨論に和して自ら好んで日本國を侮り。隨つて日本國を侮らしめる抔は。宇濶の至りなり。無分別の極也。

彼樣の商人が海外にウヲ〳〵爲し居る樣では行末最も案じらる。知らずや今に於て悲觀的言動を爲

す者は露獨人の術中に陷る者なるぞ。正に覺知せよ日本人は極東に指一本無斷にて指させぬ實力的高位置に進みたるなるぞ。平和克復は即ち此位置に對して世界が裏書したる者ぞ。

爾れば平和克復は。其れ自體に於て善事なり吉事なり大開運の保證也。日本國民は海の內外を問はず。陸海戰勝の號外を獲たる時に十倍する盛大の祝意を。平和條約發表の日に表せざる可からず。是れ國民的大自信力の發揚なり世界無比の武名と新興的實勢の現示也。

然りと雖ども日本人は未だ心底より滿足せじ。日本は失望する程に自ら侮らざる代りに滿足は禁物とす。

國運發展の祝意は祝意也。其は其なり。對元老＝對內閣＝對政黨等の攻擊は國民の急務なり。此は此なり。官僚政治の打壞は勢い也。

明治小成小爲の套局は。之が原機を爲す者は山縣有朋伊藤博文に在り。井上、松方の徒亦同じく之を助成す。抑ゝ十年前日清戰の講和に於て三國干涉、遼東還附てふ終天の大屈辱を速ぎたる當時の閣臣は。伊藤博文殿を首めとして方々孰れも。爵位勳章を頂戴するどころが。須らく過を謝し失を悔ひ、國民と與に自分達も。世界的識量と氣力とを養ふべく發憤勵精して。新興有爲の國風を振作する樣に。庶僚百揆を戒飭し。後進の異材を推奬し。不撓の民風を敎導し。文武一途國家の精力集中に貢獻する樣に。町村治の基本より眞實と勉强とを專一たらしめ。小學校の敎科書から初め革新せざる可からざりし也。而して彼等は何等國家生存の痛烈事相を官民に感受せしめるの意志を生せず戰捷國てふ虛名に我自ら眩迷して。東京一流太平樂の惡風を煽起しつゝ之を地方に轉播し。恬然として明治元老てふ美名を取り。

日本銀行の貸出を寬にし流通紙幣を過多にして。國民の不平を諸式の好景氣に轉じ。政商の投機に便ならしめて。ワイ〳〵的事業熱に政治的反抗を葬り。竟に償金を空費して猶足らず。財政の破綻を見むとする迄に立至らしめ。政黨を腐敗せしめ世道人心を壞亂し。地方の如きは政治屋は良民を欺きて惡事に運動する一種の職業なる如く解釋して平氣なるを致せり。是に於て人民は地方政費の過重に堪へず恒產漸く減じて恒心亦衰へむとす。而して元老は依然國民の最高級、王族の親類なる如く振舞ひ。議會は彼等の奴隸と爲り。官僚政治の弊や完全に成れり。

見よ。在外公使と云ふ者は概ね元老輩の私に援引する通辯的外交家のみ。露西亞から歸朝早々我輩から叱られ。其結果として『東京歸著迄は一言も吐く勿れ』と云ふ外務省の電報を神戸にて受取りし程の小供外交家栗野慎一郎を見て全般を推す可し。是れ官界に於ても心有る文武の兩官共に痛慨する宿弊なり。

今日の儘打捨置かば。差向き栗野が駐露全權公使として再任するに極れり。是れ明治政府の空氣が然らしむ。心細き極點ならず耶而して桂首相等は伊藤侯が手本を出し置きたる通りに又も龍頭蛇尾

の講和を了し。其は尙ほ恕す可しとするにしても。桂首相等が講和條件の不滿足をば國民の精神に訴へて自ら處決し且つ此好機を利用して人心振興を策するの道に出づる莫き也。

第一、國債募集其他には新聞社を初め政客富豪等の後援を藉り。藉りる時には禮を具へ依賴し乍ら。扨平和が來らむずるに當りては何等の御挨拶も無く。

第二、國民の反對をば滅法に畏れて器械的に壓迫を加へむとし。例の通り外國への氣兼＝其は恐極まる氣兼で。外國人は國民の不滿足運動を見ば却て日本を畏敬す可きに。其を爾思はぬ官僚式の氣兼＝から妙に講和の成行を秘密にし。好んで疑心暗鬼を生せしめ。

第三、戰時國民が夜の目も合はせず待戀がるゝ戰爭の結果を公示するに是亦乙ふ勿體ぶりて外國人に先知させ。日本海々戰の如きは、ロンドン電報が打返て來て。初めて東京に知れると云ふ樣な。內外本來の顚倒を來さしめ。戰勝をば私有視するの嫌を生せしめ。而して以爲らく戰報を束ねて形式を揃へて一時に發表せば內外共に幾層の驚歎を生せむと。是れ官僚的虛榮と倨傲との結果なり。

第四、無算の外交を以て提出條件の成立を夢みドーやら償金も取れ相に想はしめた。是れ閣僚の擧動犯なり。お蔭で株式抔買煽りし面々は大損毛を醸せり其恨が皆政府に向く。株屋の自業自得は笑ふ可し。政府の威信や憐む可し。

第五、斯くして不言實行でふ美名の下に講和を了し外債を作り例の通り形式を具へて。一時に發表し。以て人民を面喰はせ樣と云ふ稚心驕心有り。而して政黨は政權分與の餌にて軟化させ得る故。一寸夏蟲い者は新聞屋と頑固有志のみ、、、、、位ひに考へ。ツマリ政府は實業家と云ふ奴が平和後の景氣を思ふて浮かれるに乘じて矢張り戰後の太平樂氣風を利とし（此まゝならば）己等は程よく爵位勳祿を頂戴して而して後に政黨と同類元老とに馴合的に內閣を渡さうと云ふ寸法なりと。誰からでも推定されねばならぬ樣の行動を講和前後に執れり。

嗚呼是れ今の元老等が遼東還附後に執りし方針と態度と勝手千萬なる註文とを今日に繼續しつゝ在る者也。明治式官僚套局の絕頂なり。斯くの如くんば新興の國運に處する平和後の大事を奈何せむ。

日淸戰後に相場と花牌と自轉車と名古屋女と淫賣婦的女學生とモルモット的靑年とを以て國家の精力を破ぶりし通りに。今度も亦同じ雛方を行き。外交と財政と富と敎育とは永久、根本的解決を期し得ぬで有らう。

爾る時は誰が書かずとも言はずとも。天下の憤りは元老を始め閣臣を無事に差置く事は六かしいであらう。

是れ時也。勢ィ也。

故に這度は。元老を首め聯帶責任の閣臣は（陸海相を除き）國家の爲めに百の反對を排して平和克復

の大業を了し、而して後に潔く闕下に伏して從來の不心得を謝し、如何に陛爵等の恩命あるにせよ全く御辭退申し奉り、乃ち民間に退く外に途なき者として。斯くせば人民の氣が闊と開け戰後の官民が精神的に奮興するし。斯くせざれば日本は朝鮮や露西亞染みたる穢き政權爭奪と陰謀と太平樂との惡風に赴き茲に國魂の源が涸れるに定まれり。

元老閣臣等は果して今後ドー進退する乎。近來の騷擾を以て簡單なる非講和的敵愾運動と視ば、、、、ァハハ。愚の至りなり。敵は本能寺に在り。東京の亂暴は官僚式奪局に對する無言無聲の擊撲なり。幕末的太平役人に對する目ざましなり。

此次に起るは不實信念の新聞と曲學阿世の徒に對する打壞たる可し。ウソと思はゞ。思ひ居り給ふも差支無し。我等の言は其時が來れば必ず驗有るなり。扨我社は東京が騷動する前に(去月二十七日)全國新聞の目ざましを叙し。最尾に

平和よ早く來れ。我等は直に思想界の大戰を惹起するの急務を有す。萬事は平和の後に在り。

と結びしを讀者は何と猜せし耶。我輩の意見や明白なり。曰く。

平和克復は大贊成

官僚政治打壞は大贊成

非講和てふ事は大義名分に合はず又不通の愚論にして野心家の餌なり。

旗印は根本的革新の五字を取り政府政黨併せて責めよ

我輩の此心事を讀む人は則ち眞の知己なり讀んで解せず、不埒にも我輩を目して政府黨抔と申す罰知らずの輩は讀むを要せず。

十八。平和克復無上感

願はくば虛空大の淨玻璃の鏡を獲來りて此際の我靈感を如法に表現し。普ねく五千萬同胞をして同じき意境を博取せしめばや。

願はくば無邊際の銀河を九天より倩ひ來りて洽ねく慶援々たる日本衆生の心田に屈注し。我と與に清淨朗曠なることを得せしめむ。

我は光明遍照の智境か。將た上天神明に對する感謝か。我自ら之を何と名づく可き乎を知らざる儘に。只何となく無上絕對の靈威が日本人として我身に充ちたらむ樣に。平和克復の斯時に意識す。

强ひて緻かに之を說かば。开は國家大開運の天命觀とばし謂はう歟。情餘りて語副はず。乃ち大海の一滴を發露せむ。

一。平和克復の仕揚の事

講和條約は調印濟と爲りたれど。愈々其が實際に有効ならしめる迄の手數が非常に大切で。軍人國民政府暴つて之に氣を籠めねばならぬ。戰爭で氣の立ちし折柄故。我と我氣を塡めて精確なる思想を練り。以て平和成立の仕揚を善くせねば。手元まで來た運氣を取逃がす恐有りと承知せよ。今日は飽までも謹愼して無限の福を受用する基礎を堅む可き時なり。

日露戰爭の如き激大なる鬪爭は歷史に聞及ばず。旅順戰の如きは力と力、氣と氣の勝負以上更に靈と靈との戰とに迄上りた者で慘極痛極の光景は今尙眼前に浮ぶ事なるを。丸で人間が土や石同樣に塡草と爲り臺場乘入の蹈臺と爲り人と鬪ふならで山と鬪へりてふ酸鼻の狀を世人は早忘れし歟。戰爭を利害損得の仕事の如く言做して平氣なる輩がワイ〳〵騷ぎ居るとは何事ぞ。日露戰爭其レ自體が天命なりと觀じてこそ死せる人の歸らめも附くなれ。其をば十萬の人の生命は十億の償金に値せず耶抔と。穢ない論法から割出して講和を是非するに至りては。死せる人の遺族方が之を何と聞く可きか唯だ一人の肉身の者の生命だに十億にも百億圓にも換られる者ならぬを。土臺、今の政治屋と新聞屋とは如何に慈悲も思遣りも無き人々ぞ況して此上、戰ふて償金の取れると云ふ見込＝又は露西亞が永久に屈服すると云ふ成算之有らざるに。只だ無闇に强がりを言ふて人を殺させ樣とする其心は餘りに淺ましくて嚙附いても足りぬ殘刻の者共ならずや。

誠に條約を破棄して戰爭を繼續せねばならぬ程の理合なり實勢なりが存在せば。筆と口ばかりの人達よりも眞ッ先に軍人の意見が物を言ふ筈。閣臣元老が何と申上るとも兼て軍人を愛し重んじ給ふ大元帥陛下が戰場諸大將及び留守將官の意見を參酌遊ばさゞる道理の有らうや。無念ながら時と場合に因ては逃る心の駒を押へるが眞の勇者なればこそ軍人は戰ふの心を以て和するなれ。和して金多く取りたし抔いふ或は內閣を打壞して自黨を入れ以て論功行賞と戰後の利益分ケ取に便にせむ抔いふ或は又議會を解散させて自分が候補者に立ちたし抔いふ卑劣心から政略的に戰熱を煽動する不埒の者共と軍人の眞情とは。墨と雪、地と天はどの相違あり。

爾れば講和の仕揚が充分に行かぬならば即ち露西亞の眞意が一時の休戰に在つて心底より日本と手を握る協商の實行無くば。其節は今日にも新たに本黨の主戰論は發す可し。然る折は斯く申す東洋日の出が眞ッ魁ケに天下人心に電氣を掛く可し。其邊に脫りの有るか無い乎は。一昨年六月天下一人として日露戰爭の必至を測らざりし時より主戰論を立て。遂に遣附け了りて。尙ほ且つ平和克復の預言と解說とに血筆を揮ふて我言ひし其通り一丁も違はざりし事實に照して解し得ざらむ耶。東洋日の出の文字には。軍人の精神が憑移りて居るのである。否。弓矢八幡の御使として我等は氣魂を發露し居るのである。是れ誠意の極は天に通ずる也。戰場の實驗も無き辯士や新聞屋に無法の言動を恣にせしめるは帝國軍人、日本武士道の精神の顏汚シで有る。戰爭を笑談講の如く思はしめる

極々惡しき流行である。平和克復も天命なりと諦らめてこそ未了の心事を慰撫し得れ。又條約に因て得たる効果が光りを發するなれ。條件は零なり戰勝の効一も無し軍人歸來の時埠頭に迎ふる面目無しと犇く者等は。斯く言はる丶出征軍人がドー感じる乎を少しく考へ見よ。ウソ許り吐きくさつて。講和條約の効益殆んど無量無限なる事實を抹殺して。死せる人には犬死と思はせ。生きて還る名譽の同胞をば阿呆扱ひに爲して。其で氣が濟む乎。國賊と云ひ露探と云ふ者が世に存在せば彼等惡黨こそ其であらうぞ。

今日は浮調子、面白半分を以て演舌屋に翻弄され居る樣な閑な時節に非ず。實に一日も一刻も油斷せず。

既に獲たる領分を堅め
利權を實握し
國家の信用と基礎とを確かにす

可き緊急切々の時で。一個の身軀を二つにも三つにも使ふても實力的發展に共する覺悟が大切である。

非講和連の了見の淺墓さは餘り甚しくてお話にならず。經濟的軍事的外交的の實算より平和克復を重んずる我等の意見と。彼等の馱放螺とは。餘り隔り過ぎて。何分秤りにも目方にも懸け難いと云ふ次第は。彼等が外列國を相手として目を配る可き此時に當りて。お鯉や巡査派出所や新聞の百枚五十枚の賣高抔に目を附け居る段は。話が女一匹や箱の如き小屋と五大洲だけ違ふ沙汰で。土壔小學校の生徒と雖ども笑ふ事である。何とも手の附けられぬ事は。彼等が國家と國民との品位及び信用を外國に失ふ點をば一向無頓著なる儀で。折角列國が極東に於て日本を最上席に据へむ迎待構へ居る矢先に。當方は諸肌脱ぎて生首や蛇の文網を露はしペラン酩酊を極め込むに至りては實に我武士道の爲に泣かざるを得ない。土壔、群論は滿州と云ふ事が腹に入て居らず。又興戰の趣意が判つて居らぬ。何ほど書いても判らぬ人は到底判ぬらのかと思へば殆んど嘆息の至り乍ら。群論は日露戰爭をば滿州から西比利亞、バイカル湖ウラル嶺ペテルボルクの戰爭と解釋し居る故總て物が間違ふて仕舞ふ。

繰返し〳〵言ふ程に不仕合なる我等は。役目としてモー一度説明せむが。

日露戰爭は北京問題と太平洋問題との實力解決の戰爭なり朝鮮問題の如きは日本が下關長崎より釜山へ聯絡し釜山より京城義州へ義州より鴨綠江を渡りて奉天營口へ營口より天津へ天津より北京への鐵道の一横棒を引く爲めの用地に過ぎじ。

金も商賣も生活地盤も。三億の民衆と無限の土地と富源とある支那より外に目指す處は最早世界に殘つて居らぬ。故に列國は皆對支那貿易の根據を國是の第一番に立て丶居る。米國の如きは

比律賓に陸軍を送り海軍及び貿易の根據地を作りて太平洋を泉水に見立て支那大陸を別莊と心得居れり。彼はマニラをば十五年の後にはサンフランシスコと同樣に爲すと公言して居る程なり。其他佛の安南に於ける獨逸の膠洲灣に於ける理窟は皆同じである。

然るに日本人は何が爲めに今回の大戰を惹起せしとは思ふや。

露西亞が東清鐵道を以て本國から數千里一直線に大連旅順へ縱棒を引いて仕舞ふては。日本は大陸へ進む運命を絶ち切られて未來永劫、經濟上軍事上彼れの屬國と爲り終る外に無之しそこで日本は東京から北京までの橫棒を以て反對に之を叩き斬る爲めの故にこそ。國家生存に懸けて大冒險の壯舉即ち今回の戰爭を斷行せしなれ。

縱棒と橫棒との此爭ひが。我の東清鐵道占有、旅順大連の割取、朝鮮の入手を以て一旦は完結したる此大切なる講和條件は。國民として拜まねばならず。戰場の死者生者は何ほど禮言ふても足りぬ事と。十歲の小兒と雖ども理解し得る道理ぢやに。其に不足を言ふとは土堂から戰爭の理由を知らぬからで有る。外國人に對して愧かしき限りならず耶。

小供に花と唱らるゝ瓜厚は。如何に深大ぞと本心に問ふて見よ。又斯く迄大切なる條件なる丈けそれ丈け此際は之に精神を打込んで折角獲し者を減らさぬ樣小心翼々として用愼する事肝要なりと吳々も反省せよ。

況んや政府の技倆の長短は新たに出る人物次第にて取返す場合もあれど國の＝國民の品性に關する泥は容易に拭ふ能はざる辛さに想到せば。非講和の暴民こそ國賊と悟れかし。桂等を責むるは內輪の事なり。平和確定後に彼等を彈劾する儀ならば。我等無論同意なり。此內閣を倒す位いの智慧は拙者何時にても貸して差上げる。けれども國家が外に對する大事と內輪の小事と先後本末を顚倒する馬鹿騷ぎは斷じて許し難い。其處が即ち脊に腹は換られぬ切ない場合と云ふ者である。

見よ〳〵。今日の如く天の賜はる幸運を仇とせば天罰は必然なりと我等が言ふ口の下より種々の災害は起り來るぞ。こゝで氣が一分でも弛んだら最後、外交財政共に一大事ぞ。人を咒詛へば穴二つ無理と云ふ者の害はゴミ一つ眼に入りても全身痛むに均し。松方伯も心せよ。山縣を斬るの及は御邊をも斬るの及ぞ。株屋的陰謀の政商は顧みよ。亂民を煽して秩序を破り一時政治及び經濟に不安の念を起さしめ政府を手古摺せて乘取り且つ株式を賣叩いて巨利を博さうと云ふ樣な寸法は到底駄目なり。今に見よ郵船株は一百九圓まで暴騰するぞ。天は用心の爲めに災害を降し給へれど國家大開運は定まれる事故に。見よ〳〵。本年は暴風の歲なりしも劇しき暴風の早く來りしが天祐ぞ。半作と想へし米作は取揚の上には豐作たること拙者の豫言將に適中せむとするぞよ。拙者若し二十萬や三十萬の金に目が暮れるならば。大嫌ヒな役人の手より取らず共。株式商人と爲れば新聞屋買收の金位ひは朝餐前に取り得るなり。我胸中の火は天照皇太神の射給へし火の一部なり。千百の群論

爭で我の正しき一言に敵せむ。

天罰の條々を揚げむか。人は喰はねば生きて居られずてふ淺近の理を知らざる演舌屋と新聞屋は度外視すれど。暴論暴動の結果は實に左の如く微妙なる差引キを日本人に與へたるよ。

一、豫て交渉成熟し平和を俟ち一實行を期せし神戸川崎造船所の外資借入は。今回の暴動の爲め外國資本家の疑惧を釀し。破談に歸したり。

一、九鐵の外資輸入、是亦好都合に運ぶ筈なりしを右同一の理由に因て外國人は暫時差控ゆる事と爲りたり。

一、當長崎に來りて九州地方の礦山に放資せむ迚實地踏査まで行ひ居りし某外國資本家は是亦心機一轉したり。

川崎造船所は松方伯一門の所有なりてふ因果談は扨置いて。信と云ふ事は如何に微妙なる動機より動搖する者かと此邊にて悟り給へ。商工の繁榮と各民生活の大事とを念ずる人は。日本人が好んで運勢を濁さうと云ふ目下の危き場合を怖れて且つ憂へて深く謹慎せよ。兎に角平和條約の仕揚迄は非講和を商賣として福島の水の出鼻を塞ぐ所の不實不信切なる連中をば非國民と知り候へ。大會を名として良民を脅迫取財する無賴的新聞屋抔は捕縛して足りぬ奴輩と承知し給へ。彼等は拙者一人を狙ひ居れと拙者が風潮の暴に畏れて盲從する樣の時は即ち當に長崎が黑闇と爲る時のみか日本の立言界が黑闇と爲る時と心得れば致方なし。拙者は彼等を斬殺さゞる代りに。天は拙者に對する彼等の毒謀を無効ならしめ給ふ。拙者は眞に日本の世道人心の繫ぎの爲めに大決心を以て群論の矢表に立つ也。

去り乍ら天運は一時の事のみ。

大日本の運氣は正に開けたり。

東郷大將は三笠の火災前際どき時間に汽車に乘りて東上せり、東郷大將の運の强さは即ち日本の開運の謎である。

軍人が講和に不平とは煽動者の作り言なり。其は先月の事にて最早諒解が屆きたる樣子。拙者は機微を知りつゝ其とは言はずに物の道理だけ申せど。最早地方官も檢事長も控訴院長も戰後の方針を齎しつゝ歸縣する時に於て非講和とは何たる愚熱ぞ長崎は大繁昌す可し。其は追々事實を具して精述致さむが差當り天下人心の鎭撫は如何にして行はるゝ乎東京の政界はドー收まる乎と云ふ歸著の極處を申さうならば。內閣の連中はドーセ終局に退職ながら。其レ迄に

大山元帥と東郷大將が相携へて　大元帥陛下より親しく謁を賜はり難有き御語葉が降る其時より南大將に對して國民は己レに復る

是は拙者が例の天文に在る話で。又搗き出さうならば矢張一七と一八の揃ふた時が平和確定の時で

ある。七は易に於て長爲山と立て丶。一は天で、八は地、五は風、七は山である而して。一は乾爲天と云ふて龍に象り天子の位とす。サー易を知らぬ人でも解し得るなり。大山は七。平八郎は八。即ち一の天子が七と八とに各々見合ふた時が例の一七、一八のキチンと揃ふて萬事相濟の時なり。國民よ機嫌を直せ。腹のドン底に堅き安心を作れ。拙者をして天罰を言はしめる迄にウカ〳〵する莫れ。今は平和の仕揚の時なり。非講和の徒をして心に慙ぢて聲なからしめる迄に用慎せよ。セメテ長崎一港だけも外國に對して耻かしからぬ大日本の分別ある人民の住する都市ぞと知らしめよ。倒マに長崎を以て東京の師匠たらしめよ。關する所は一代の氣運に在り。

神物人感應如是（終）

明治四十年八月一日印刷
明治四十年八月十五日發行

神物人感應如是
定價金八拾錢

著者　鈴木天眼
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
發行者　平山勝熊
東京市京橋區弓町二十四番地
印刷人　高塚慶次
東京市京橋區弓町二十四番地
印刷所　三協印刷株式會社

發兌元　東京市京橋區南鍋町一丁目　株式會社　隆文館

不許複製